

喜望峰とビクトリア大瀑布

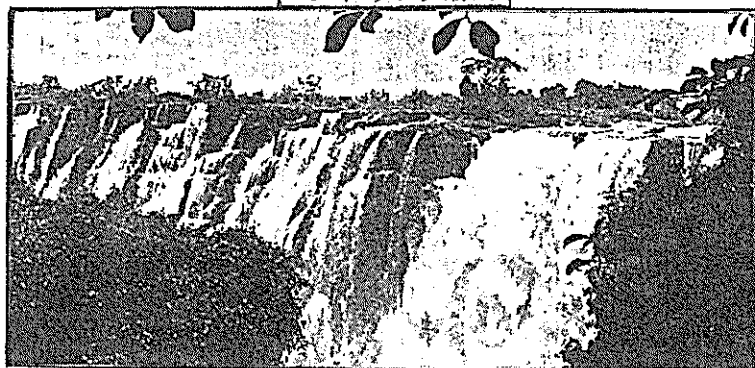
紀 行

南アフリカ共和国
ジンバブエ共和国
ザンビア共和国

喜 望 峰



ビクトリア大瀑布

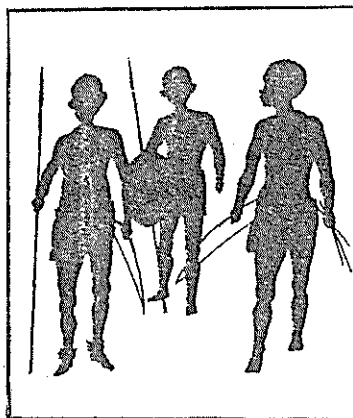


平成3年12月28日～平成4年1月6日
(1991～1992)

寺 前 信 次

「喜望峰とビクトリア大瀑布紀行」目次

まえがき	・・・ 1	ヨハネスブルグの概要	・・・ 42
12月28日	・・・ 3	1月2日	・・・ 44
台北へ翔ぶ	・・・ 3	ブルートレイン	・・・ 44
台北～ヨハネスブルグ	・・・ 8	プレトリアの概要	・・・ 46
12月29日	・・・ 12	ユニオン・ビル	・・・ 47
ヨハネスブルグ～ハラレ	・・・ 12	チャーチ・スクエア	・・・ 48
ジンバブエ共和国の概要	・・・ 15	開拓民記念堂	・・・ 49
ハラレの概要	・・・ 17	ボーア農民の 大移動と苦難の歴史	・・・ 50
セルシ・ローズ	・・・ 17	開拓民記念堂の見学	・・・ 55
ジンバブエ遺跡	・・・ 18	南アの防衛力	・・・ 56
12月30日	・・・ 19	ゴールド・リーフ・シティ	・・・ 57
ビクトリア・フォールズ空港へ	・・・ 19	ソウェト蜂起	・・・ 58
ビクトリア大瀑布 (ジンバブエ側より)	・・・ 20	1月3日	・・・ 60
リビングストーンへ	・・・ 22	ケープタウン	・・・ 60
ビクトリア大瀑布 (ザンビア側より)	・・・ 23	百万ドルの夜景	・・・ 63
ムクニ村の見学と ザンベジ河クルーズ	・・・ 25	ケープタウンの概要	・・・ 63
ザンビアの概要	・・・ 27	1月4日	・・・ 65
12月31日	・・・ 28	テーブル・マウンテン	・・・ 65
サファリー見学	・・・ 28	ケープ半島の探訪	・・・ 66
リビングストーン博物館	・・・ 31	喜望峰の概要	・・・ 69
大晦日	・・・ 32	喜望峰に立つ	・・・ 69
1992年元旦	・・・ 33	日本食で命の洗濯	・・・ 72
リビングストーン～ルサカ	・・・ 34	1月5日～6日	・・・ 72
ルサカ～ヨハネスブルグ	・・・ 35	帰国の途	・・・ 72
南アの概要	・・・ 37	あとがき	・・・ 73
		南ア共和国々花	・・・ 75



元来、旅（タビ）は軍隊のことを意味する言葉であり、軍旅（戦い）とも称した。「タビ」は「他火」、「他の火」と書いて「他所の火を経験する」ことだと解釈できる。火は我々の生活に欠くことのできないもので、動物から人類に進化した要因の一つが火の使用であったように、「旅」は「火」とかかわりがある。

旅とは即ち「居所を離れて他方に客寄する」（他界の遍歴、異郷へ行く）ことであり、その旅は旅によつて何かを会得しなければならない。それを「旅魂」と言い、それには見識がなくてはならない。

本年9月に訪れた諸葛孔明陣没の地「五丈原」は、私にとっては稀にみる「旅魂」の充実した旅となり、その紀行文が完成したのは12月上旬であった。世界という書物を読破し、いろんな所を歩いて東西南北の人を夢見る私の胸中には、見たいが病の虫が蠢動していた。

そのとき、時を遭わせたように「南アフリカとビクトリア大瀑布の旅」の案内が数社から舞い込み、残席3という催行の確定した1社の通知が目止まった。得手に帆というか、時は得難く失い易しと遅疑逡巡することなく参加を決意した。

幸福とは機会を捉えることだと好奇心を煽動し、【^{イディッシュ}癡人（足の悪い人）起つを忘れず、盲人視ることを忘れず」とばかり、切ない思いで南部アフリカ諸国の知識を求めた。然し乍らこれらの国に関する出版物は殆どなく、闇黒の世界のことは「百聞は一見に如かず」と、旅心の風車の回転を早めたのであった。

支配と分割の歴史のアフリカは、ローマ帝国が北アフリカを支配した時、原住民が商業国家のカルタゴ（現チュニジア）を「アフリ」と呼んだことから、ローマ元老院はアフリカ洲と名付けた。これがアフリカの名称の由来である。このことはエジプトやモロッコ等を訪れた時に得た新知識で、他火の旅魂の成果であった。

しかし戦前は、南アフリカについては英連邦支配下の1連邦国であったこと、原住民の hottentot やブッシュマンの名称、金・ダイヤモンドの産地、南阿戦争、ケープタウンやヨハネスブルグに喜望峰、ガンヂーがインド人を指導した不服従運動（1893～1915）程度の知識しかなく、ジンバブエやザンビアに至っては存在すら知らない状態であった。

戦後の南アフリカは南極観測隊の寄港地となり、或は漁業基地としての認識が高まり、近年になってアパルトヘイト（人種隔離）に対する国際的な非難的となり、特にネルソン・マンデラ氏の逮捕（1962）から釈放（1990・2・11）が我々の関心事となった。

国の未来を読み取るには其の国の歴史を知らなければならない。「月夜も15日、闇夜も15日」と言われるように、世の中は良い時もあれば悪い時もあるが、果たしてアフリカ人には良い時があったのであろうか。将来に希望があるのだろうか。

奴隷と植民地支配と云う二重の屈辱に耐え抜いてきたアフリカ人に、黄色人種の我々が過去に排日移民法（大正13年・1924年）という米国の抑圧に遭つたことを想起すると、心の支えとして同情を寄せるのである。

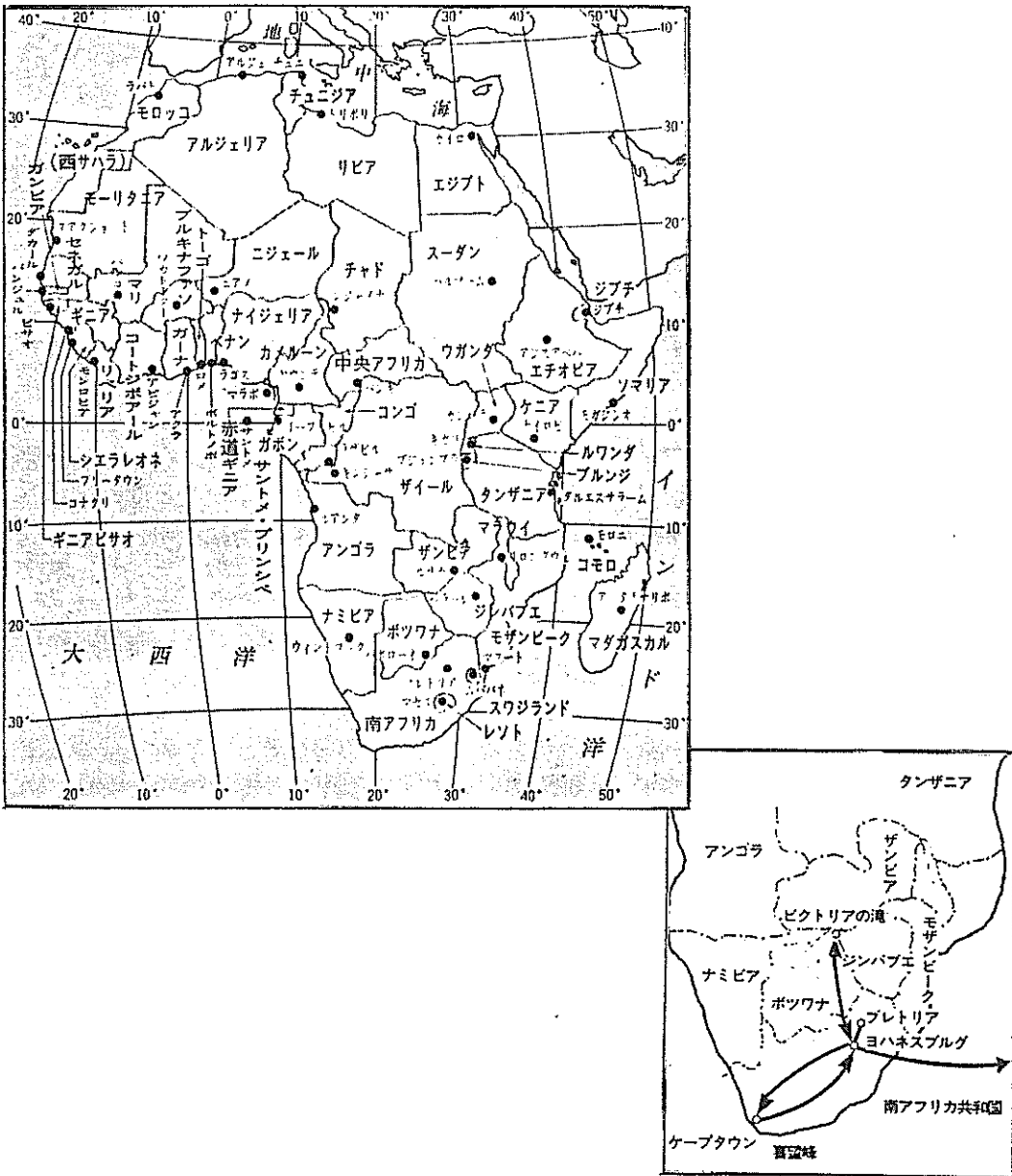
「適者生存」とはダーウィン（英）の進化論で、長い生物の進化の中で自然条件に順応し適合した生物だけが生きのびると云うのである。しかし現今言われる地球家族

の人間に適用して良い論であろうか。適用すれば白人優越の思想と言わなければならない。

運命は彼等をどのように導こうとしているのか。「雁も鳩も喰った者が知る」という通り、何事も我が眼で見なければと図南の旅路についたのである。

平成3年（1991）12月28日

下図はアフリカ全図と今次旅行の経路図



12月28日

(土) 雨・曇

台北に翔ぶ

(大東亜戦争の回顧)

日本から南アフリカへの直行便はなく、台北(週2便) 香港(週1便) からヨハネスブルグ行が運行しているだけで、我々は先ず台北に翔んだのである。

これらは1986年、アパルトヘイト(人種隔離)の廃止を訴えた英連邦、EC、米国等の経済制裁強化のための処置である。日本も①銃鉄、鋼材等の輸入禁止、②南ア共和国への観光ビザの発給禁止と、日本人の南アへの観光自粛(南アからの日本への観光は禁止)、③航空機の乗り入れ禁止、④国家公務員の南ア航空国際線の使用禁止、⑤大使館の設置はなく領事館のみ設置等、アパルトヘイト廃止のための主要な処置がとられていた。

台湾は中国との間に問題があり、イスラエルはアラブ諸国との問題がある。そして南アはアパルトヘイトの非難があり、世界から孤立した3国だけが連携して航空機を乗り入れている状況であった。

しかし南アはアパルトヘイト関連法を全面的に廃止し、黒人に白人と同様の政治参加の権利を与えるための新憲法制定交渉が始まった。このために南アとの外交関係は欧米を中心に37ヶ国が結び、日本も10月に経済的規制処置を解除し、平成4年1月に外交関係を結ぶ事になったことは喜ばしいことである。

回顧すると私が台北に初めて渡航したのは戦時中のことである。昭和19年10月、陸軍士官学校附からビルマ方面軍司令部附に転勤を拝命し、福岡・雁の巣飛行場から翔飛したのであった。

当時はサイパンも既に陥落して制空・制海権は完全に敵に掌握され、危険極まる中を軽爆撃機改造の旅客機に将官連中と搭乗し、運を天に委せて単機・無防備の状態で決死の飛行を敢行したのである。

台北飛行場は敵の猛爆を受け、我が戦闘機の残骸が散乱して滑走路も破壊され、台湾神社は丸焼けとなっていた。比島戦線は風雲急を告げ、いよいよ沖縄攻防戦が始まろうとする約9ヶ月前である。

機中で当時の状況を險に浮かべて懐古している時、20日前にテレビ画面を賑わした12月8日の真珠湾攻撃50周年のことが、必然的に考えさせられるのであった。

果たして真珠湾攻撃は奇襲でだったか否かを論じるのは枝葉末節であり、戦争原因の発端は遠くまで遡らなければならず、そのように考える人は恐らく私だけではないだろう。

多くの国を訪れた私の脳裏に去来するのは、あくどい白人の植民地政策である。東亜ではインド、ミャンマー(ビルマ)、マレーに始まるイギリスの侵略は飽くことを知らず、中国大陆はアヘンの密貿易を皮切りに彼等の魔手から逃れることはできなかった。

フランスは印度支那半島(現ベトナム、カンボジア、ラオス)、オランダは蘭領印度支那(現インドネシア)、スペインはフィリピン、ポルトガルはマカオを侵奪し、アメリカもハワイからフィリピンを手中に収めた。

アフリカはイギリス、フランス、オランダ、スペイン、ポルトガルの白人たちから奴隷貿易に始まる冷酷無道を受け、砂塵が舞うように植民地政策の犠牲となり、梅毒

までも蔓延させられて闇黒大陸となった。

我々は世界の天の声として「独立のない平和より戦いを」と立上り、甚大な人的物的犠牲を払って戦ったのが第2次大戦だったと信じている。

その結果は如何であったか。アジアでは1946年にフィリピン、48年にミャンマー（ビルマ）、49年にインドネシア、50年にインドがそれぞれ植民地から開放され、独立の栄冠を勝ち取った。

アジアに起った独立開放の熱い息吹きはアフリカ大陸に波及し、52年にはイギリス連邦下の王制を打倒して、ナセルの率いるエジプト共和国が誕生した。57年にはブラック・アフリカでは初めてガーナが独立し、「アフリカの年」と言われる60年にはザイール、コートジボアール、セネガル、ナイゼリアを始めとする17ヶ国が独立したのである。

1967年、800をこえる異なった部族のアフリカ諸国では、自主・自助・自立を柱とした新興独立国は希望に満ち溢れ、大陸の連帯が声高らかに叫ばれたことは、我々の記憶に新しいことである。

日本が立ち上がって白人帝国主義に挑戦し、植民地支配体制に大打撃を加えるという義挙に出なかったならば、このような世界の大変革は決して実現に至らなかったであろう。

今や我が国が世界最大の経済大国に成長した現在、世界の未来を築き上げようとするれば、過去の歴史の経過を絶対に見落としてはならず、これも天の声と言わなければならない。

戦争の危険もなく暖衣飽食し、世界最高の平和を享受している今日の我国では、開戦当時の世界勢や心理状態を理解することは至難である。しかし真珠湾攻撃50周年の論説の多くは奇襲を認め、自存自衛戦だったことを認めておらない。

戦後の評論家達は、開戦前の我国の国民性の中に国が辱められた時、戦わずして屈伏するなどということは、価値観として存在しなかつたことを忘れている。或は知らないのである。

本来、国家の運命は永遠であり、国家の最大の責任は国民と国土を守ることである。世には平和のためや自存自衛のために、死物狂いになつて戦った戦争は数多く存在したのである。

大東亜戦争も決して易く米国に勝てるとは思っていなかった。それでも経済圧迫を受け、艦隊が戦わずに燃料が無くなり立往生するよりは、石油を求めて戦ってこそ国難打開策だと信じて立ち上がった。これこそ自衛戦争の典型である。

すべての戦いの反対が平和、平和の反対が戦いであると考え、一切の戦いを罪惡視する反面、「勝てば官軍」の面目を立てるために敗者の側に戦いの責任を負わせ、平和の破壊者と決めつけようとしている。これは平和の仮面で偽装した軍国主義であり、征服者は必ずこの仮面を被って侵略したのであった。

米・西戦争（1898）はキューバの独立運動を契機に起つた戦争である。米国が勝利した結果、パリ条約でキューバは独立、フィリピン、グアム、プエルトリコ等が米国領となり、米帝国主義の諸政策の発端となったことが思いだされる。

世界の隅々まで張りめぐらした米国の情報網から判断すると、1年前の湾岸戦争でも、米国はイラクのクウェート侵入の情報を的確に掴んでいたのではないだろうか。パ

ナマと同じく「やらせ」でこれを撃つ戦略が、米国の戦法のように考えられる。

曾てのイギリスのアヘン戦争と云い、日本に真珠湾を攻撃させた追い込みと云い、強大国の鉄面皮な「やらせ」によって、敗者（被征服者）を平和破壊の戦争犯罪人に仕立てたように思えてならない。

真珠湾は果たして奇襲であったのか。あの当時の日米交渉の経過を一切無視した、昭和16年11月26日（開戦の11日前）の米国務長官のハル・ノートは、我国の大陸からの全面撤退を強要したものであった。スチムソン陸軍長官などは最後通告の積りであったと書いている。

即ち宣戦布告は米国が老獪な手で先に通告したのである。若しハル国務長官が支那事変を非難するのであれば、なぜ調停に努力しなかったのかと言わなければならない。

東京裁判を開設したマッカーサでさえも昭和26年5月、米上院における外交軍事合同委員会に於て、日本が第2次大戦に向かった目的の殆どが安全保障（自衛）のためであったと述べている。（間接的に東京裁判が誤りであったことを認めている）

東京裁判のインドのパール判事の判決書は有名である。パール博士は開戦に至るまでの、「日本の行動の背後には理由と動機があり、日本の行動に先行して当該行動を必然的たらしめたあらゆる事情が考慮され、深く検討されなければならない」と述べている。

博士はまた「経済制裁等を含む関係国の先行的行動を考慮に入れることが極めて重要である」と説き、「侵略という言葉ほど幅広い解釈、または利害関係に左右された解釈のできるものはない」と戒めている。

パール判決書は【何が侵略であり何が防衛であるかについては、慎重かつ客観的に対処すべきであり、さもなければ侵略者という本質的にカメレオンの性質をもつ言葉は、単に「敗北した側の指導者」を意味するだけのものとなる】と断じている。

真珠湾は日本が先制攻撃したのは事実である。しかし先制攻撃者は侵略者だと言えるだろうか、ここに問題がある。戦争準備という点から考えると、米英の方が日本よりも早く始めている。

例えばイギリスは昭和15年12月（開戦1年前）に、シンガポールに極東軍総司令部を新設して軍備を増強していた。米国は昭和16年1月（開戦11ヶ月前）に、フィリピンにマッカーサを最高司令官とした極東軍司令部をつくり、戦争を準備したのである。

そのころの日本は、何とか局面を開きようと懸命にトップ会談を重ねていた時期である。インドのパール博士が「真珠湾攻撃は奇襲ではない」と言っている論拠の一つはそこにあり、米英は中立国ではなかったのである。

中立主義に完全に違反していたのであるから、日本に攻撃を受けたとしても、これは奇襲という理由にはならない。日本の最後通牒が遅れたことは事実だが、これは末梢的問題である。米国は12月6日、日本の暗号を解読しており、警戒の不手際を日本軍になすりつけている。

日本が当時、どのような状態に置かれていたかという大局的見地から、真珠湾攻撃を考える必要がある。経済力も軍事力もある無尽蔵な資源大国群が、資源のない小さな日本を生死の瀬戸際まで追い込み、「窮鼠猫を噛む」ようにさせた方が間違っていなかったか。

このように纏まりのない走馬灯のような回想が、機上の私の脳裏に浮かんで消え、消えては浮かんでいた。12月8日前後に放映されたNHKの報道番組で、「ルーズベルト大統領は欧州やアジアへの参戦はしないとの方針を改め、参戦への口実を作るための詭計であった」ことが確認されたのである。

百年戦争だと言われていた大東亜戦争も50年を経過した。黄禍と日本人を軽侮し、猿に等しい民族だと罵っていた彼等は武力では勝利を取めたものの、現在では世界一の債務国となり、敗れた日本は世界一の貿易黒字国・経済大国になった。

敗北という言葉が国民性に合わない彼等が、自国に有利に解釈していたという報道は50年目の大成果であつた。負けて勝つた大東亜戦争だが、人間世界には永久という言葉のないことを、我々は絶対に忘れてはならない。

敗戦後の日本では、それまでの歴史を否定することが「進歩的」だと考えるようになったことは遺憾であり、誇りある日本国民として許されることではない。戦争犠牲者の方々のことを想うと胸が痛み、全国民挙って慰霊に努めなければならない。

台北 (林氏と再会し中正記念堂を見学)

感受性の強かった青年期の思い出に時の経つのも忘れて耽っていると、搭乗機は台北・中正空港の着陸態勢に入っていた。台北は何年ぶりであろうか。

年末年始を台湾で過ごす日本人の大群衆に混じって、ロビーに立ったのは12時であった。そこに膠漆の友である林忠誠氏と次男の方が眼光炯々として、「朋、遠方より来たる」と出迎えていた。私もまた再会に胸をときめかせて走り寄り、喜びの握手を交わしたのである。

添乗員に別行動を告げ、一行(10名)と別れて林氏の車に乗車し市内へと疾駆した。小雨に濡れた麗しい満市満香の街路樹は静かで落ち着いた風格を漂わせ、取敢えず最高級ホテルの来來大飯店(セラトン・ホテル)で昼食を摂ることになった。

奇妙な偶然から我が家と林家との交友の始まりは、愚息の東大1年の在学中からである。それ以来、愚息一家から娘一家との交際に発展し、必然的に私とも親交を深めて一族同士は肝胆相照らす仲となった。

1年半ぶりの邂逅に胸襟を開いて久闊を述べ合い、私好みの中華料理は舌の先まで楽しませてくれた。四方山話に花を咲かせたが、私の関心事は台湾政局と中台関係の今後を占う国民大会(最高権力機関)の選挙結果であった。

アジア新興国家の優等生・台湾では出発1週間前の12月21日に選挙が施行され、与党の国民党は定数(325)の4分の3を超える254議席を獲得して圧勝、これに対し「台湾独立」を旗印に掲げた野党の民主進歩党は66議席に低迷した。

民主党が台湾独立を掲げた背景にはソ連邦解体があったことは間違いない。しかし巨大な軍事力を持った中共が台湾海峡の対岸に控えている現実を、選挙民は考えたのであろうか。

蒋介石の統治時代から私は台湾省民の台湾を願っていた。台湾住民約2千万人のうち、外省人(大陸からの移住者)は2割弱に過ぎない。国民党の1党独裁体制下にあった台湾では外省人が政治の中樞を握り、反対する者を徹底的に弾圧するという状態が続いていた。

本省人の外省人に対する反感は根強く、民主進歩党が台湾独立を掲げたのも「台湾人による台湾政治」を求める本省人に期待したのであろう。

しかし選挙民は経済的繁栄のもとでの現状維持を願う傾向が強く、国民党の統一でも独立でもない「革新・安定・繁栄」という現政権を支持したのである。

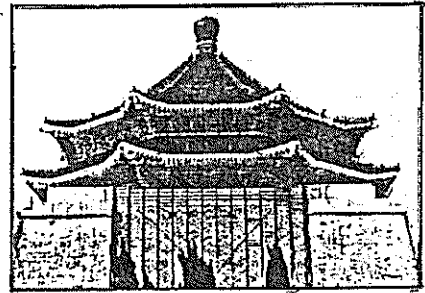
2年前の立法院選挙の際、中共側が民主進歩党の独立主張に厳しい批判を浴びせた結果、台湾住民の反発を招き、独立を主張した候補が躍進した教訓から、中共は今回の選挙に対しては静観し慎重な態度であった。

現政権の李登輝総統と林氏とは旧制台北第1中学校の同級生で、ともに本省人である関係から、林氏の選挙結果に対する応答は当然ながら控え目であった。しかし底流には台湾本省人としての自覚が流れていると推察する。

台北屈指の財界人であり資産家である林氏が、台湾がこのように発展した最大の原因は、日本の統治時代からの教育に基因すると幾度となく感謝の言葉を述べていた。この点は韓国や北朝鮮とは雲泥の差である。

台湾の将来についての会話は食事の終るまで続き、再び彼の車に乗車して橋の歯を挽く高層ビルの谷間を通りぬけ、案内された処は「中正記念堂」であった。

林氏は私が陸士出身の蒋介石（字は中正）と同窓であり、台北は何回も訪れて熟知しているため、4年前に新築した中正記念堂を参観させたかったのであろう。誠に人を知ると言わなければならず感謝に堪えない。



北支那戦線では蒋介石直系軍である第1戦区司令官の衛立煌と戦火を交え、ビルマ及び雲南戦線でも再び蒋軍最精鋭の衛立煌軍と死闘を繰り返し、蒋介石とは浅からぬ因縁があり、今にして思えば懐かしいものがある。（右上の写真は白亜の中正記念堂の全景）

広大な敷地に建つ記念堂の正面には白大理石の大門が聳立し、中央の正面奥には洋風の白亜の記念堂本館、左右には朱塗極彩色の豪華絢爛な中国式の殿宇が建っていた。

台湾の人々から尊敬され、求心的な磁場を形成しているような記念堂本館に脚を運んだ。激しく燃焼した彼の一生を反芻する書画が所狭しと壁面を埋め尽くし、歴史の重みの片鱗を見せていた。

孫文と並んだ大絵には風雲を耐え抜いた彼の強い意志が窺われ、孫文が蒋介石に贈った「養天地正気 法古今完人」の書は、何時までも私の眼の底に焼き付いている。

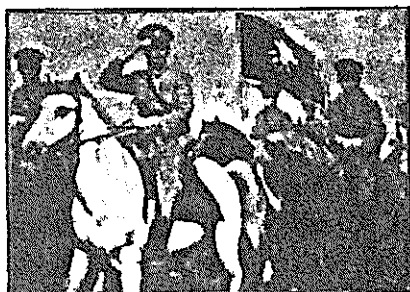
（法＝手本とする。完＝欠点のない）

（右写真の左側、杖をもつ人が孫文、右側の軍刀を佩した人が蒋介石）



軍官学校長時代、北伐に出陣する絵は生々しい精気を発散させ、血なまぐさい権力闘争時代の足音が聞こえるようで、雄渾豪快な迫力が感じられた。

戦時中のルーズベルトやチャーチル、戦後の吉田総理との会見の絵画も見え、人生の辛酸をなめ幾度となく挫折した有為転変の彼の厳しかった一代記が、「芳を後世に流す」ように絵解きされていた。（右は北伐に出陣する白馬に跨る蒋介石）



彼の琴線にふれ、私の胸の奥が熱くなるような思いで記念堂を後にした。特に終戦時に彼が述べた「報怨以德」【怨みに報ゆるに徳を以てす（老子）】の言葉は、日本人として忘れることはできず感謝しなければならない。

残照の人生を迎えた現在でも、心血を注いで戦った当時の想い出は強烈で、中正記念堂の参観は、牡丹餅で頬を叩かれたような幸運な巡り合せであった。

中山公園近くの林氏の邸宅は王侯貴族の住むような豪邸で、華麗な重量感に圧倒されながら応接間に通された。奥様を始め長男氏や孫たちの温かい歓迎を受け、親しく団欒の一時を楽しんだのである。

日本の大学を出た息子さんは勿論のこと、一家の人達は小さい孫さんまでも日本語を話す親日家で、奈良の五重塔や各種の陳列品も日本のものばかりだ。驚いたことにテレビも日本の放送を見ており、我家で寛いでいるような感じであった。

時間の経過も忘れて歓談に耽っていたが暇する時刻を迎え、慇懃に謝意を述べて林家を辞し空港に向かった。途中、林氏の経営する膨大な数の高級マンションの一部を拝見し、19時の集合時間に一行と合流したのである。

台北～ヨハネスブルグ

21時出発の予定が1時間延となり、待合室の椅子に腰を下ろして待つ間、私の頭の中に去来したのは中台関係であった。

昨年3月、台湾の対岸である福建省各地を訪れ急速な発展ぶりに驚嘆したが、それは中国内部と比較してのことであり、アジアNIE S（地域群）の優等生、台湾には遠く及ばない。

親族の大陸訪問が解禁後（87年秋）、大陸に渡った200万人の台湾人は高級ホテルに滞在し、高価な買物をするばかりか、親戚にまで金をくれている状態である。それを見た大陸人は台湾なら金が稼げると、密航者が後を絶たないという。

モーターボートなら3時間の距離しかない台湾への密航者は、本年だけでも二千人にのぼったと云われている。日本と同じく台湾でも人手不足が深刻で、建設現場や町工場は密航者でも歓迎し、密航が成功すれば1月で大陸の1年分の稼ぎになるから垂涎の的だ。

現在、大陸と台湾ともに交流拡大では基本的に一致しているが思惑は違っている。台湾は学術、経済などに絞り、政治的な波及は避けたいのである。

今年5月、台湾当局は大陸との内戦終結を宣言する一方、民主化の推進を打ち出して言論の自由を認めた。しかし1人当たりのGNPは台湾の9000ドルに対し大陸は200ドルに過ぎず、東亜の安定を望む我々には強い関心事である。

南ア行の中華航空機は22時に離陸し、招く漆黒の大空めざして飛鴻のように舞い

上った。16時間という図南の旅に一抹の不安を抱きながら、シートベルトのサインが消えると同時に最後尾の座席に移動した。

僥倖にも4座席を独占。遅い夕食を摂り直ぐ脚を伸ばして横臥すると、天地という大きな部屋に寝ているような心地がして、死んだように眠っていった。途中シンガポールに立ち寄り、遅れが遅れを呼んで4時間延の出発となった。

未知の地に魅せられた翼は、何か優しい巨人に抱かれて遠くに運ばれて行くようで、再び睡魔に襲われて眼を閉じた。

今まで外の闇を写していた機体の黒い窓は、一眠りした間に夜明けの暁色を映し出していた。天馬のように翔ぶ空間に、ただ1本の水平線だけが我々を取り巻き、次第に真昼のように明るくなって行く。

洋々とした夢を抱いて夏の青い海を眺めていた。この海につながる彼方はアフリカ大陸だ。2500万の黒人の棲むアフリカ大陸は、世界一の精神的な不健康地の汚名がある。一体誰がこのようにしたのかと、胸の中に奔流のようにあれこれの歴史が浮かんできた。

「アフリカ大陸の歴史の概要」

アフリカは恐らく人類誕生の地と云われ、古代の原始的時代では人間の生存に適した諸条件を備えた土地であったと見られている。反面、アフリカの大部分の社会は著しく停滞的であったことも否めないようである。

アフリカ原産と思われるモロコシ、イネやマメ類は混作で、焼畑耕作で作られてきたが、古代アフリカの資料は極めて乏しい。

4世紀にキリスト教の1派が入り、7世紀以降は新しい宗教であるイスラム教が進出し、武力を伴った征服に近いものであった。反面、熱狂的な信奉者も多く生まれ、その勢力拡張も崩壊も帝国主義の成立を容易にした。

イスラムの厚い壁で北アフリカをさえぎられたヨーロッパ勢力は、15世紀中ごろより海路から黒人アフリカに到来するようになった。先ずポルトガルが黒人アフリカの海岸各地に貿易の拠点をつくったが、17世紀以降は衰退したポルトガルに代わってオランダ、次いでイギリス、フランスが多くの船舶を派遣した。

これらのヨーロッパ諸勢力の間に交易拠点の争奪戦が繰り返された。初め求めていたのは金であったが、数百年来、内陸に組織されていた交易ルートによって北アフリカに流れていた金を、大量に海岸に吸い寄せることは出来なかった。

新しく開発され始めていた南北アメリカ大陸で、求められていた奴隷を供給することに、アフリカとの交易の主目的が移行し、奴隷は鉄砲や酒と引換に現地の酋長から買い取られた。

19世紀に欧米諸国で奴隷貿易が廃止されるまで(1880年代)、正確な数字は判らないが、数千万という規模のアフリカ人が大陸から奪い去られたと思われる。これによって海岸や内陸の黒人酋長が、他の部族を襲って得た捕虜を奴隷として売ることが盛んになり、アフリカ社会は荒廃し闇黒化を増長した。

19世紀における最大の歴史的事件は、1880年代以降に本格化したヨーロッパ列強による全大陸の規模の植民地分割だが、すでに18世紀後半から始まっていた。

イギリスに始まった産業革命の結果、資本主義は機械化大規模工業の段階に突入し、それまでのような奴隷の供給地としてではなく、原料供給地と輸出市場として利用し

ようと転換した。

奴隷制廃止に至るまでの間に、19世紀に入る前後からヨーロッパ人によるアフリカ内陸部の探検が盛んに行われていた。探検はもともと科学的興味や人道主義的使命感から始まった。

しかし探検によってもたらされた内陸部の情報は、19世紀後半におけるヨーロッパ列強の領土的野心を刺激する結果を生んだのである。

19世紀に入る前後に始まり、19世紀半ば以降に本格化したキリスト教の組織的な布教活動は、善意から出発したものだったが、次第に知らず知らずのうちに、ヨーロッパ植民地主義勢力の水先案内人的部分を含むようになっていった。

アフリカで最も精力的な大規模の布教活動を行った勢力のうち、カトリックを代表したのはフランス、プロテスタントを代表したのはイギリスであった。このことは来たるべきアフリカ分割の結果、両国が最も広大な植民地を獲得したのである。

19世紀が次第に深まり資本主義が一段と発展した結果、ヨーロッパ列強が帝国主義の段階に入り、アフリカ分割の時代が始まった。アフリカ大陸の至る所で領土的野心が渦巻き、利害の衝突が起った。

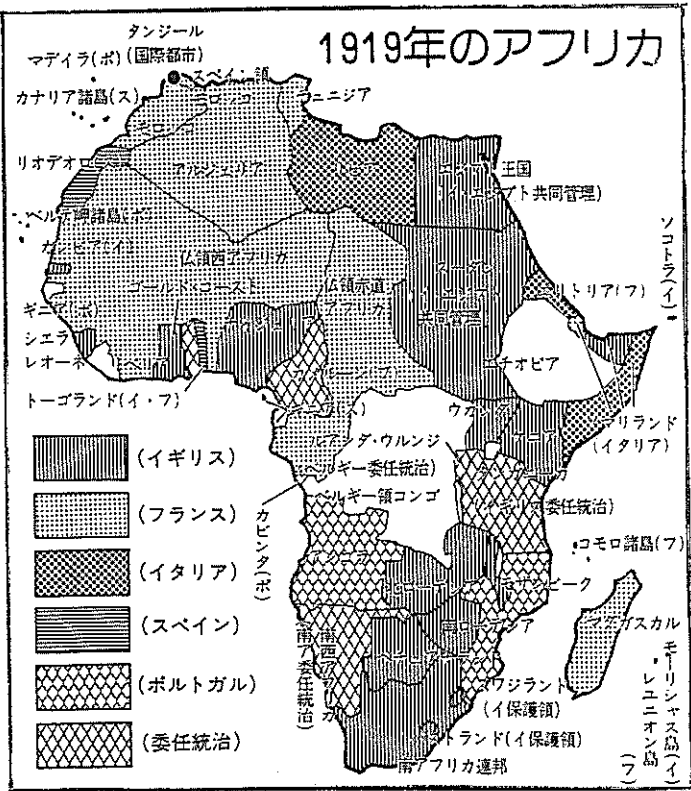
84年から85年にかけて百日余りにわたって行われたベルリン会議の目的は、無秩序なアフリカ分割競争に一定のルールを課し、既存の権益を相互に調整し、国際的に承認することであった。(参加14ヶ国)

しかしベルリン会議を契機として列強のアフリカ分割競争は更に白熱化した。各国は争ってアフリカ各地に使節を派遣して植民地化を進め、利害が衝突すると調停したうえで境界線を引き直すという状態であった。

(右は1919年のアフリカ分割図)

アフリカ分割が終わった段階でみると、最も広大な植民地を得たのはフランス次いでイギリスであった。しかし手に入れた植民地の質的な価値はイギリスである。さらにドイツ、ベルギー、ポルトガルがこれに続き、あとはイタリア、スペインの順である。

アフリカ大陸の中で植民地化を免れたのは、アメリカから送還された開放奴隷が、1847年に建国した西アフリカのリベリア共和国と、イタリアの度重なる侵略を退けたエチオピアだ



けであった。

1910年に白人支配の国、南アフリカ連邦がイギリスの自治領として独立し、22年に君主国エジプトがイギリスから独立したのを除けば、50年代の半世紀の間は独立とは全く無縁であった。

ところでアフリカを分割したヨーロッパ列強の植民地支配の原理と政策は、どのようなものであったか。植民地主義を正当化するためには、もっともらしい論理が必要であった。

例えば適者生存のダーウィンの進化論や、白人優越主義の論理などが必要に応じて唱えられた。更に発展して、未開野蛮で自己発展の能力に欠けたアフリカ人を教化し、文明開化させることは先進的なヨーロッパ諸国の責務であるといった、一方的な使命感が生み出された。

アフリカ支配は各国によって方式は異なっていたが、アフリカを文化的に否定し、政治的に抑圧し、経済的に搾取した点では全く同じであった。列強の植民地支配は政府によるばかりでなく、特許会社の帝国イギリス東アフリカ会社、イギリス南アフリカ会社などによって行われた。

こうした植民地主義の侵略を、アフリカ人は無抵抗のまま受け入れたかといえ、無論そうではなかった。そして第1次、第2次大戦期に入ると、自治や独立をめざす本格的なナショナリズム運動の芽生えが見られるようになった。

南アフリカでは白人移民の人種主義的支配体制のもとで、早くも第1次大戦に先立つ1912年に、アフリカ民族会議（ANC）が創建され、主として人種隔離、差別の撤廃をめざす運動を開始している。

独立を目指して本格的に植民地主義と対決するようになったのは第2次大戦後である。第2次大戦は既に傾きつつあったヨーロッパ列強の植民地体制を弱化させた。その結果、1940年後半にアジア植民地に独立の時代が訪れ、その波及効果がアフリカに及んだのは50年後半である。（日本の影響が大と云わなければならない）

独立の時代が訪れるまではアフリカの独立は4ヶ国に過ぎず、独立の時代が到来して以来、48の独立国が誕生したことは前記した通りである。

第2次大戦後に独立したのは、旧フランス領は21ヶ国、旧イギリス領は16ヶ国、旧ポルトガル領は5ヶ国、旧ベルギー領は3ヶ国、旧スペイン領は2ヶ国、旧イタリア領は1ヶ国である。

これらの新興アフリカ諸国は、植民地主義が作り上げた不自由な国境線をそのまま引き継いだ独立国家で、近代的民主国家の建設は容易ではない。アフリカには根強い部族対立や地域的割拠主義があり、国民的統合を阻害したり、分裂作用の原因が多く残されている。

第3世界全体の台頭が著しい中で、アフリカ諸国が多くの苦難名問題を時間をかけて解決してゆくことを願って止まない。

突然、搭乗機は大きく振動した。数年前にモリーシャス沖の海中に墜落した南ア航空の事故を思い出し、腕の時計に目をやると針は午前7時をさしていた。

逍遙とした気分の旅心も長時間の空中散歩に飽き飽きして気分転換に窓を覗くと、真夏の太陽光線を反射している世界第4位のマダガスカル島が、千切れ雲の間から見

えアフリカ近しと興奮が熱気のように湧いてきた。

スチュワーデスからヨハネスブルグまで未だ4時間だと聞かされると、冴えていた眼も頭も疲れたように茫然となり、安眠は心労の最善の療法だと自然に臉が閉じていった。

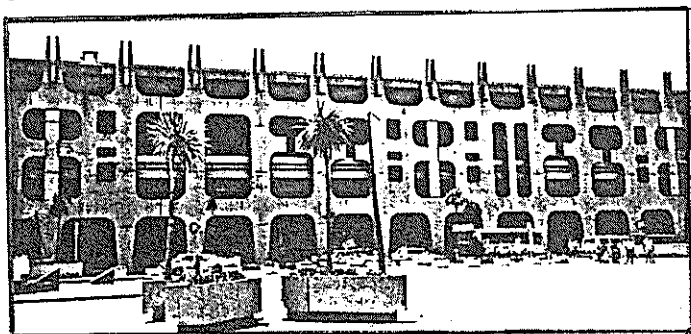
朝の機内食を食べ終わってから左右に大きな弧を描いた海岸線が、コバルト色の鏡のような海面に白い線を引き、遙々八重の潮路を越えてきたかと動悸が激しくなってきた。

日本の総理大臣が足を踏み入れたことのない唯一の大陸アフリカ。日本の企業にとって不可欠な希少鉱物資源の安定供給国である南ア、反共のアフリカ・チャンピオンで西側の一員だったが南ア、暴力が暴力を生んだ南アなどと、さまざまなイメージが風のように頭の中を走っていた。

機内放送がヨハネスブルグ空港の着陸態勢に入ったと告げると、名状しがたい一種の感動を覚え、眼を充血させながらアパルトヘイトの国を凝視していた。

夏空というのに秋のように澄み切った大空から眺める地上は手に取るようだ。

マッチ箱のように目に映る「ソウェト」（後記する黒人隔離地区）の小さな家屋はボックスのようで、ボタ山も各所に見えていた。



南アフリカの空の玄関口、四面楚歌の国の最大の都市、ヨハネスブルグのヤンスマツ空港に午前11時に着陸。先ず私の視神経を刺激したのは、漆のように光った黒人の肌と独特の双眼、それに容赦なく照りつける太陽の熱射であった。（上の写真はヤンスマツ空港）

12月29日（日）晴

ヨハネスブルグ～ハラレ（ジンバブエの首都）

鵬程万里の図南の旅は終わったものの、うんざりするほど税関通過に時間が掛かり、性急な日本人に不快な第1印象を与えて幸先の悪い感じであった。

午前中の予定だったヨハネスブルグの観光は、5時間の延着のために余儀なく中止となって、慌てふためいてEAA・SAL航空に乗り継ぎ、11・45にジンバブエの首都ハラレに向かって羽博いた。（次頁地図参照）

限りなく続く透き通った空から、広い敷地に森もある優雅な佇まいが見えていた。それらは贅の限りを尽くした白人たちの住宅で、噂にたがわず王侯貴族の生活である。

白人の植民地支配は南ア連邦となり、次いで南ア共和国になったこの国は、悲惨な桎梏の歴史であった。アパルトヘイトは白人が共和国で優位を保ち、生き残るためのものと言わなければならない。

そのため世界の非難の聲が高まり隔離・差別の法律は撤廃されたが、未だ黒人の参

政権は認められず、政情は混沌としている。

国連の制裁処置や日本の渡航自粛も漸く緩和され、アパルトヘイトの余燼のくすぶる今がチャンスと、地球の裏側までやってきた実感が湧いてきた。（南アフリカの概要は後記する）

飛翔して間もなく機内食のサービスとなる。南ア航空は清潔で座席も少々広く、機内食も豪華だと耳にしていた通り、運ばれてきた食事は2つのパックに盛られた素敵なおもてなしであった。

重畳とした連峰があり、木もあり断崖もある日本のような風景は見られず、概ね赤茶げた平坦な台地が延々と伸びており、陸の孤島のように無味乾燥である。

変化のない異国の景観を眺めながら食事を終え、携行した常備薬をバックから取り出すと、隣席のカラード（白人と非白人との混血の総称）らしい老人（白人）が、スチュワーデス呼び止めて水を要求し、親切にもそれを私に渡したのであった。見知らぬ旅人に尽くしてくれる心は「四海の内、皆兄弟なり」（論語）の通りで、情けは東西南北とも同じだと胸が熱くなる。

一瞬にして快を得たように英語で話しかけてくる彼に対し、片言の英語で応えながら途切れ途切れの会話が続いた。すると彼は日本人は頭脳明晰だと自分の頭を指差した。遠い国の老人が日本の偉大な発展を知っていることは驚きである。日本の国際的な地位は我々が考えている以上に高く評価されている。

63歳という彼は年に似合わず老けて見え、友達になった記念だと写真を撮ってアドレスを尋ねると、私の手帳に「E. A. LAING BOX 14 NORTON ZIMBABWE」とサインした。本当に一期一会の出会いである。

搭乗機はサバンナともいえない、耕地のない茶褐色の原っぱの上空を飛び、内陸部に深く入るに従って未開の度が増し、時が過去へと逆行するような感じがする。

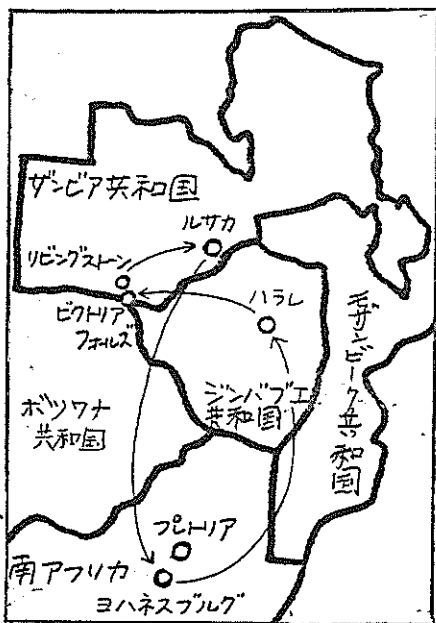
血で血を洗った部族間の抗争があつた土地とも思えず、すべてが平和でのんびりとした光景は、環境に体を慣らす時間を与えてくれているようである。

思えばアフリカが黒人の住むブラック・アフリカという言葉に、暗黒の大陸などという訳語が付けられ、そこに住むアフリカ人は未開で野蛮だとされてきた。それは白人がそこを植民地として支配するのに、都合のよい口実に過ぎない。

白人の侵略は15世紀の大航海時代の幕開けとともに、奴隷貿易を軸として始まり、当初は海岸地帯で取引されていたが、19世紀には深く内陸部まで入り込むようになった。ジンバブエもその例外ではなく、この国の歴史は屈辱一色に閉ざされたことであらう。

渺々とした高原の小国ジンバブエは、箱庭のような日本の風光と違った広大な台地が続く、領土は民族の母体だという土地住民の感情が理解できるのであった。

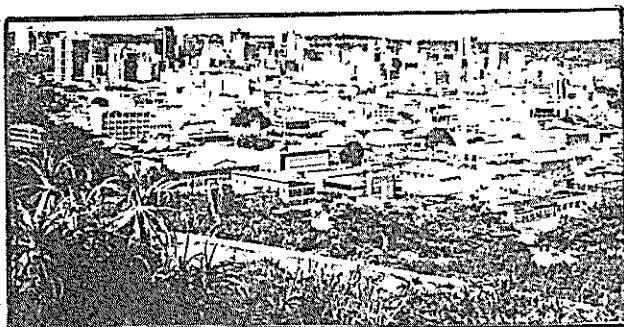
いよいよ機が高度を下げ始めると、自ずから知りたい心が煽動されて高まる期待は



早鐘のように鳴り出して、興奮の熱気が沸き返ってきた。

滑走路を疾走する機内から眺めた空港ビルは、案に相違して堂々たるもので、この国にも新時代の波が動いている感じだ。

タラップを降りた途端に浴びる灼熱は35度もあり、真冬から真夏に飛び込んだ我々の皮膚は痛さを感じるのであった。(上の写真はコピー丘から眺めたハラレ市街)



空港の正面にはウエル・カムと歓迎の横文字が大きく書かれ、ビル周辺の可憐な花は民族の回生を象徴しているように咲いていた。笑顔で迎えた通訳のジョン氏に案内されながら、本当の旅のスタート地点となったハラレの観光が始まった。

人影のない路傍には、枝を絡ませた低い木が青々とした葉をつけ、殺風景な感じを受ける褐色の台地は不快指数ゼロ、空気は本当においしい気がする。

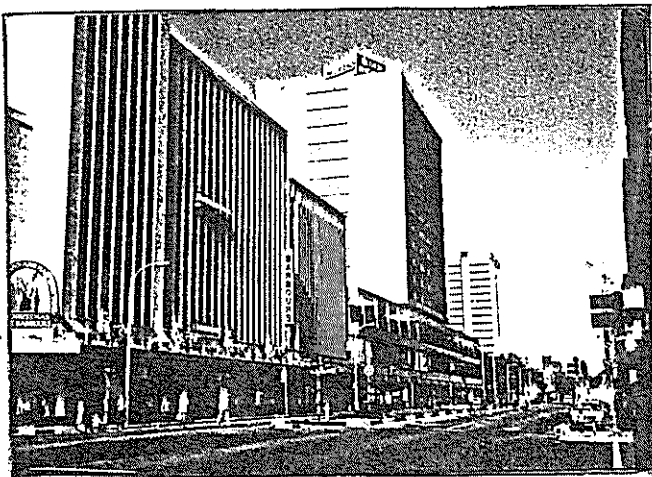
バスは先ずコピー丘に登った。山あいには展開しているハラレ市街のパノラマは、白と薄茶色の建物が櫛の歯のように建っている。小さいながらも悠然と歩む首都には貫禄のようなものがあり、息吹く解放の熱意が脳波のように伝わってきた。

市民の憩いの場となっているコピー丘には三々五々と黒人達が散策に訪れ、大きなサボテンや熱帯樹が色彩豊かな花をつけていた。我々を好奇心な眼で見つめる黒人たちの微笑や、灼きつく太陽と大自然が最初の印象として残っている。

愛想よくカメラに応じてくれる黒人たちの肌艶は、喜びが心の底から出たときのようにキラキラと光を放ち、肌を輝かすような気がしている。特に若い女性はアフリカの土と生活の匂いを鮮烈に感じさせてくれた。

独りで遊歩道を歩いているとき5人連れの親子と出会い、写真撮影を所望すると、筋肉質の若い主人と、恥ずかしげな表情をした夫人たちが一列に並び、天真爛漫な家族から朗らかな雰囲気を感じることができた。

花盗人は風流のうちだと勝手な言い訳をつけながら花を摘み、バスは丘を下ってハラレ市街へと進んだ。(右はハラレ市街)



白亜のビルが並んだ広い町並みは区画整理され、新興の首都らしい美観を備え、社会主義神話が崩壊した今日、これから正念場を迎えようとしていた。

町外れの一角に聳えた大統領府の前を通ると、高層建築の最上部に描かれた鶏のマークが目にとまった。恐らくジンバブエの象徴が鶏のようで、「大樹招風」という辞

が浮かんできた。即ち大統領や市長といった地位の高い人ほど責任重大で、未開文化の国の発展を祈りながら通り過ぎた。

(右は大統領府、最上部に鶏のマークが見える)

アフリカはしばしば言われるように発展の遅れた大陸ではなく、独自の発展を遅れさせられた大陸である。そして国家意識よりも部族意識の方が優先する国柄であり、部族対立が解消されない限り、複数政党制は有効に機能しないのが現実ではないだろうか。

多分プロテスタントと思われるキリスト教会も建っていた。宗教は魂の休憩所であり不幸な人々の頼みの綱である。人間に完全なものを求めさせる教会が存在している一方、アフリカ大陸は迷信が支配する世界だとも聞いており、部族の伝統的な宗教も未だ残存していると言う。

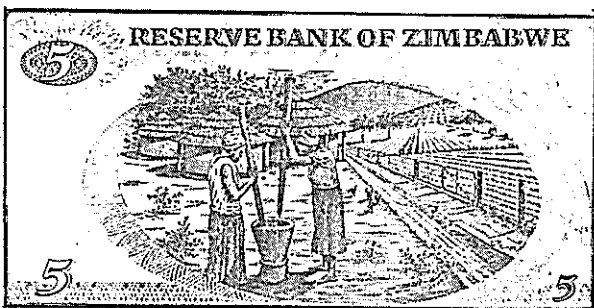
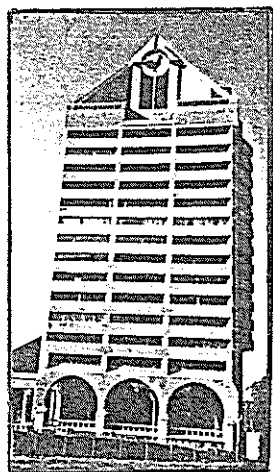
ネムの木の多い緑の街道から火力発電所が望遠された。800を超える人種構成の大陸南部の一小国、ジンバブエの首都ハラレにある、唯一の国際観光ホテル・シェラトンに、旅装を解くことになった。

驚いたことにはホテルの玄関を入ると空港と同じように、フィルムを除く全部の荷物はレーザー機に通され、未だに白人支配の傷跡が残っているような悪印象である。

マネチェンジした各紙幣の表面には、有名なジンバブエ遺跡や動物の画が、裏面にはビクトリア大瀑布や農村の米搗き模様が印刷され、いづれも文化の遅れた国の図柄であった。

(右は米搗き風景を印刷した紙幣)

日本人には馴染みの薄い遠い国に足跡し、判官最良ではないが、あくどい支配を受けた彼等に対する惻隱の情が込み上げ、先ず志のあるものは必ず成功すると激励したのであった。



ジンバブエ共和国の概要

ジンバブエは日本の2倍の国土をもち、人口800万のアフリカ内陸の独立国である。イギリス領時代は南ローデシア、或はローデシアと呼ばれ、長い白人支配を脱して1980年に独立した。

公用語は英語とショナ語、ショナ族75%、白人30万。ジンバブエとはショナ語で「石の家」という意味である。国名の由来となった「石造遺跡」はハラレの南方、約300kmの山中にあり、11～18世紀にかけてこの地に栄えた「モノモタバ王国」のものだと言われている。

国土は南部アフリカ高原の標高1200～1500mのハイ・ベルト部にあり、北側のザンベジ川と南側のリンポポ川にはさまれ、南緯16°～22°の熱帯半乾燥の気候である。

石器時代はブッシュマンに近い狩猟民族が居住していたが、2世紀ころバントゥー族（赤道以南に住む南アフリカ原住民の大部分の黒人）が北方から侵入して部落を建設した。

9世紀ころバントゥー族系のショナ族が、この地に移住して農耕、牧畜を主として暮らしていたが、金の採掘によって富を蓄え、東アフリカ沿岸地域との貿易に従事した。そしてジンバブエ（石の家）と呼ばれた巨大な石造建築を各地に建設し、巨大な王国が18世紀ごろまで栄え、内陸部に進出してきたポルトガルと対抗した。

1855年、英人リビングストンがビクトリア瀑布を発見し、幾多の変遷の末に南アフリカのケープ植民地のセルシ・ローズ（後記する）が、この地域の支配権を掌握して1889年、特許会社のイギリス南アフリカ会社を設立した。これに対し土地の各部族は反乱を起して対抗したが、圧倒的な武力によって鎮圧されてしまった。

この時期に現在の国境線が確定し（2頁地図参照）、この地域はローズの名にちなんで「ローデシア」と名付けられた。

1922年、イギリス南アフリカ会社は経営の行詰りを理由に、ローデシアの統治権を放棄することに決定した。イギリス政府は南アフリカ連邦への統合を希望したが、ここの白人住民は反対し、翌23年、イギリスの自治植民地南ローデシア（現ジンバブエ）が成立し、24年、直轄植民地の北ローデシア（現ザンビア）が誕生したのである。

しかしアフリカ人は人種差別法によって政治参加の道を事実上閉ざされ、経済的にも従属的な地位に置かれ、以後、ジンバブエの独立までこの状態が続いた。

第2次大戦後、南ローデシアの白人政権は北ローデシアの銅と労働力に着目し、各植民地の連邦化を推進して連邦を結成した。

60年代に入って他のアフリカ植民地が次々に独立し、63年に連邦が解体するに伴い、南ローデシアの白人政権は少数白人支配体制の独立を目差し、宗主国のイギリスと交渉に入った。

アフリカ人ナショナリズム運動も多数支配の即時実現を要求して活動を展開したが、白人政権の弾圧によって成果を上げるまでには到らなかった。

イギリス政府は独立の条件として多数支配への漸進的移行、および人種差別の撤廃を主張したが、白人政権はこれを拒否して65年11月11日、ローデシアとして一方的に独立を宣言した。イギリス政府は直ちに経済制裁を科す一方で、和解交渉を続けたが実は結ばなかった。

一方、ローデシアは白人支配体制をさらに強化する方向に進み、70年3月、共和国へと移行した。また独立宣言以後、段階的に実施された国連の経済制裁も、南ア共和国などはこれを無視したため、十分な効果を生み出すことは出来なかった。

74年4月のポルトガルのクーデタと、それに続く75年のモザンビーク、アンゴラの独立は、南部アフリカの白人支配体制に多大な影響を与えた。とりわけローデシアの政治情勢にとっては転換点となった。

1972年から開始されたアフリカ解放組織の本格的なゲリラ闘争も、次第に成果を上げ始めた。76年10月、白人政権はアメリカ、南ア共和国、及び周辺のブラック・アフリカ諸国の圧力により、2年以内の多数支配への移行を骨子とする提案を受諾した。

しかし再び提案を拒否するなどの紆余曲折があり、79年4月に新憲法に基づく総選挙が実施され、実質的には白人優位体制を温存した多数支配国家のジンバブエ・ローデシアが発足した。

それに対し国連は総選挙の無効を決議して経済制裁を続行し、急進派の解放組織・ZANU、ZAPUもこの国家を認めず、武力解放闘争を激化させた。

他方、イギリス政府はアフリカ諸国を中心とする国際世論に押され、イギリス連邦首脳会議において全当事者会議の開催を約束し、新憲法、停戦協定、暫定期間の取り決めの合意に達した。

その後、暫定的なイギリスの直接統治と80年2月の独立選挙を経て、同年4月18日、国際的に承認された多数支配体制のジンバブエと、黒人の大統領が誕生した。国花はフレイム・リリー（FLAME LILY）である。

我々が訪れたこの国は未だ11歳に過ぎない若い国であった。

ハラレの概要

ジンバブエ共和国の首都のハラレは、郊外を含めて約70万人の人口である。標高1484mの高原にあって爽涼な気候に恵まれている。旧称はソールズベリーと云い、1982年4月に現名に改称された。

金鉱地帯の中心でタバコ、トウモロコシ、綿、柑橘類などの集散地である。食品加工、タバコ、飲料、肥料、家具、建築資材、化学薬品、製糖、鉄鋼、石油卵などの各種工業は発展中である。南アフリカやモザンビークに通じる鉄道、道路網の要衝で、国際空港、国立大学、国立博物館、美術館、図書館、スポーツ施設も完備している。

1890年9月、南アのケープ植民地のセルシ・ローズが派遣した軍隊によって建設した町で、当時のイギリス首相ソールズベリーにちなんで命名され、南ローデシアの主都となった。

1935年に市制をしき、53～63年には連邦の主都となったが、当時は白人の都市という性格が強かった。

その後は自治植民地南ローデシア、白人政権が一方的に独立宣言したローデシア共和国の主都を経て、80年4月に独立したジンバブエの首都となったのである。

セルシ・ローズ

イギリスは元来、貴族の国であった。貴族の家に生まれるなら誰でも貴族だが、平民の家に生まれるなら如何に優秀な素質を持っており、立派な業績を残しても、どこのかの馬の骨と同様の扱いしか受けなかった。

そこで19世紀に於ては、大きな望みを抱き優秀な頭脳を持ち、冒険心に富んだ英国の平民青年は一様に海外に進出し、そこで階級門閥にとらわれずに思う存分、自分の実力を発揮できる場所を見出した。

このような環境の中で、イギリスの産んだ野望に富む優秀な頭脳が南アフリカの地にやって来た。彼の名はセルシ・ローズ、大英帝国に対する愛国心の塊のような人物であった。

ローズはオックスフォード大学に学ぶかわら時々、南アフリカにやってきて大陸を制覇することの大きな意義を認識した。アフリカ大陸の地図は南の端ケープから北の端エジプトに至るまで、英国の色で塗りつぶさなければならない。それが英国のため、世界のため、文明のためになると確信したのである。

ローズは決して「青いインテリ」ではなかった。自分の理想を実現するには先ず「富」を得る必要があると考え、精力的に働いて大きな財産を作った。

その金でキンバリー（南アフリカ・オレンジ自由州）の小さなダイヤモンド鉱区を幾つも買取り、これを統合して有名なデビアースという会社を設立した。

世界最大のダイヤモンド鉱山の成功により、ローズは億万の富を築き上げたが、彼は生涯結婚せず、「自分の妻は大英帝国である」と称し、死後この世界最大とも言うべき財産を英国に寄付している。

ローズはケープ州の議員となって成功し、後にはケープ州の総督に任命されたが、何と云っても彼の作った最高のものはチャータード会社の設立であろう。世界の歴史の中でこのチャータード会社ほど大きな権限を与えられた会社は他に存在しない。

チャータード会社が英国政府から与えられた権限とは驚くべきもので、「アフリカ内陸を英国植民地にしてしまう権限、その地を統治する権限、近隣諸国と条約を締結する権限、法律を作り施行する権限、警察力を保持する権限」等であり、まるで国家のような存在である。

ローズは先ず現在のボツワナ（2頁地図参照）を英国領とし、次いで北のマタペレ族の地に毒牙を伸ばし、英国の農民を送り込んで土地をその農民のものとした。

反乱が起るや否やチャータード会社の警察軍と英国軍が出動してマタペレ族を破り、マタペレランドを自分のものにしてしまった。これがローズの名を冠した地、「ローデシア」で、1980年にジンバブエとなったのである。

ジンバブエ遺跡

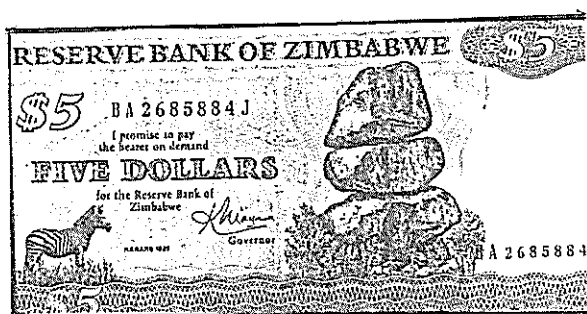
遺跡は古代人の生と死の世界の出現であり、当時のこの国を彷彿させるために一項を設けた。

ジンバブエの国名の由来は前記したように、遺跡にちなんで名付けられ、巨大な石造建築の遺跡は現地語で「石の家」の意味である。

アクロポリスと云われる高さ120mの花崗岩の丘の上にある建築群と、神殿と呼ばれる平地にある長径100m、短径80mの楕円形の建築からなっている。

建設年代や建設者については古くから激しい議論があった。しかし1958年以降の考古学的及び民族学的な調査発掘によって、バントゥー族系のショナ俗とロズウィ族が、11～18世紀に建設したことが判明した。（上は紙幣に印刷した遺跡）

ジンバブエ遺跡からは8個の「鳥神柱」（約1.5mの石柱の頭部に鳥を彫刻したもの）のほか、多くの土器、陶磁器、金製品、ガラス製品などが出土している。（この国のマークが鶏となつたことが理解できる）



その中にイスラム陶器、中国の宋、元、明の青磁や染付の破片が大量に出土していることは、外国との貿易が盛んであったことを証明している。

ジンバブエ遺跡に類する石造建築の遺跡は、ジンバブエ共和国の各地や西隣のボツワナ共和国の東部に約300ヶ所もあり、それらはジンバブエ文化と呼ばれている。なお遺跡名と国名を区別するため、遺跡を大ジンバブエと称することがある。

12月30日 (月) 晴

ビクトリア・フォールズ空港へ (下図参照)

アフリカ南部の黒人社会ハラレの第一夜は、灯を消したが目が冴えて仲々眠りに付けなかった。

それは「神の前では全ての人間は平等である」と云う、キリストの教えを標榜しながら、冷血動物のように黒人から一切の尊厳と権利を剥奪し、家畜同然に扱って地獄の日々を送らせた、苛酷な歴史に想いをめぐらしたからである。

白人は石の小さな割れ目にまで入り込み、石までも割ってしまうような搾取の連続であった。

地球という星の上で、これほど苛斂誅求な歴史はあったであろうか。黒人たちよ、運命の力には勝てないと言ってしまうのはならない。

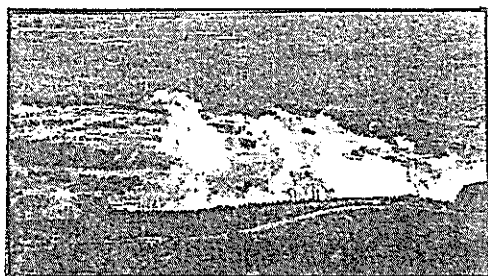
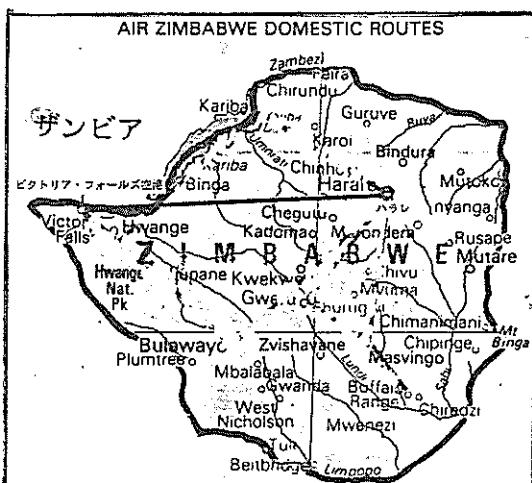
何時の間にか長途の旅の疲れから眠りに入ったが、今朝のモーニング・コールは4時30分、4時45分にルーム・サービスの朝食、5時30分にホテルを発つてハラレ空港に向かった。

閑散とした空港ロビーにはビクトリア瀑布の大絵が飾られ、雄渾壮麗な幽趣を喚び起こしている一方、火焰樹は真っ赤な花を咲かせて熱帯らしい景観を呈していた。

紺碧の空は澄みわたって雲一つなく、ジンバブエ航空321便は曖々とした空漠の野に鷹飛した。国内線の小さな銀翼は陽の光を浴びて燦然と輝き、機上からジンバブエの農村風景を眺めていると、異国情緒の実感が湧いてきた。

操縦席を覗くと黒人女性が操縦桿ににぎり、愛想よく手招いて写真撮影を許してくれた。同じ有色人種の日本人には特別な好意を示し、我々のために予定の飛行コースを遠く離れ、ビクトリア瀑布の上空を旋回してくれた。

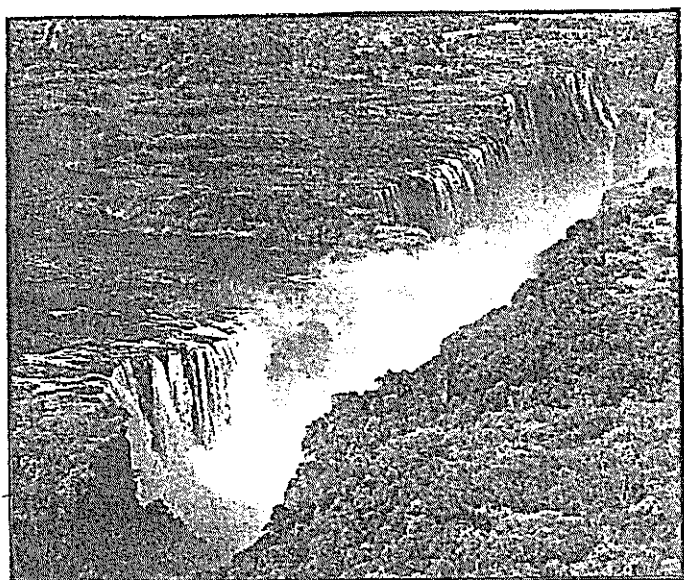
一瞬、山火事かと疑うような白煙が機の丸い窓から見え出すと、私の視線はその水煙に釘付けになった。(右は瀑布の水煙)



幻想的に彩る白色水煙の夢幻美は、自然がつくった神秘的な景観で、瀑布は生きている地球と対話しているような感じがする。

対地速度の速い飛行機は素早く通り過ぎた。日本人は天地宇宙を封じ込めたミニチュア的な盆景や盆栽を好むが、このような雄壮な美しさを目にしたのは初めてである。

機は歓喜を爆発させた一行を乗せ、ビクトリア・フォールズ空港に9・20着陸。操縦士に感謝し目もくらむような暑さの中をビルに向かった。



この小さなローカル空港も季節の移り変わりが無いのであろうか。木や草が独自の花を咲かせ、空港ビルを取り巻く壮大な樹冠は旅心を誘い、檜の茂みが大きな木陰をつくっていた。(上の写真は機上から眺めた大瀑布)

ビクトリア大瀑布 (ジンバブエ側)

ジンバブエの西北端にあるビクトリア・フォールズという町は、同名の大瀑布を見にくる観光客のためにできた空港のある町である。(前頁地図参照)

ビクトリア大瀑布は自然界の世界的驚異の一つと言われ、ジンバブエと北に隣接するザンビアの国境を流れるザンベジ河の中流にあり、アメリカのナイアガラ、南米のイグアスと共に世界三大瀑布の一つに数えられている。

ザンベジ河は中央アフリカ高原のザンビア西北端ミニルンガに源を発し、南に流れてザンビア、アンゴラ、ナミビア、ボツワナ、ジンバブエの5ヶ国が接する所を通過して東にコースを変え、モザンビークを経てインド洋に注いでいる。全長2700kmのアフリカ大陸の第4位の河である。

三大瀑布の中で高さはビクトリア瀑布が108mで断然トップ。滝は大小多数の島によって幾つかに分かれ、河幅約600mのザンベジ河が約1700mの滝となって落下している。

瀑布は悪魔の瀑布(デビルズ・キャタラクト)、主たる滝(メイン・フォールズ)、馬蹄型滝(ホースシュー・フォールズ)、虹の滝(レインボー・ヌォールズ)、東の大瀑布(イースタン・キャタラクト)の5つからなっている。

紀元前90年頃に農業を主とする一握りの人々が、ビクトリア瀑布の附近に住み着いた記録はある。西洋人でこの大瀑布を最初に発見したのはイギリスの探検家ディビッド・リビングストンで、1855年11月16日のことであった。彼はイギリスのビクトリア女王の名をとってビクトリア大瀑布と名付けた。

リビングストーンに発見されるまでは、アフリカ人の中では「音のする煙」「轟く霧」と呼ばれていた。この附近には当時、相当数の部族が住み一部は狩猟をしていたが、外部から侵入してくる部族も多く、彼等の間には闘争が絶えなかった。

又この附近には世界最大の巨大な象が住んでいることでも有名である。

一体このような滝が何故できたのであろうか。推定約15、000万年前、地層が割れて滝を作ったと云われている。それは大陸移動説と関係があるのかも知れない。大陸の移動があつたとすれば、この程度の割れ目があっても不思議ではない。

アフリカ大地溝帯は東部アフリカを貫く巨大な断層陥没地帯である。イスラエル及びヨルダンに接する「死海」の底から始まり、アカバ湾、紅海を通り、エチオピア、ケニアを縦貫し、タンザニアに達している。このことは死海を訪れた際に学んだことである。

以上のような予備知識をもつて、空港を後にし瀑布へと進んだ。長い熱帯雨林の中を走る道路を通過し、先ずビクトリア瀑布の手前にある樹齢1000年の「バオバブ」の木の見学となった。

褐色の大地に豊かな流れと深々とした森、そこに聳立するバオバブの大樹には無数の精霊が宿っているような感じがする。

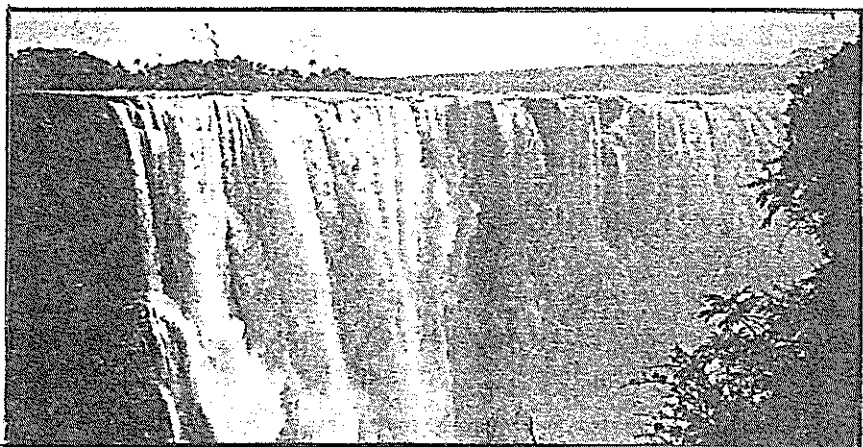
バオバブはパンヤ科の高木でアフリカのサバンナ地帯に分布している。高さは約20m、経は約10m、葉は幹の上部についており乾期には落葉する。花は白色の大型で、果実はヘチマのように垂れ下がり、果肉は食用や調味料になる。このようにNHKの特集で報道していた。

その近くに茅葺きの博物館が建っており、ヴァファローやインパラ、象、シマ馬などの獣骨が陳列され、古代人の生活様式も展示されていた。しかし一行の心はここになく、逸る思いで瀑布に向かった。時刻は10・20を指していた。

猛獣が大砲が咆哮するような不気味なざわめきが空気を震動させ、全身を耳にして聴いていると、黒ずんだ大木の茂った樹間から白いものが洩れてきた。(右はリビング・ストンの銅像)

万水千山の河水が滝壺に落下している轟音である。そこに瀑布の発見・命名者のリビング・ストーン博士の銅像が肅然として立ち、見る者に畏敬の念を起させていた。

進むにつれて響きが音をとめない、豁然と視界が開けた青い虚空の下に、足がすくむような絶壁の谷底めがけて、滔天の河水が唸りながら落下し、



その壮観は筆舌に尽くし難しであった。(前頁の写真はジンバブエ側から見た滝)

旭日を浴びて輝くダイヤのような水飛沫の中に七彩の虹が掛かり、ただ茫然と息をのんで陶醉するばかりであった。夢幻境にさまよい込んだような幻惑とは、正にこの景観を言うのであろうか。

異次元の空間に足を踏み入れたような忘我陶醉の境は、全身の血を奔騰させて神経までも麻痺させ、心を空しくして日々を送る私に活を入れているようである。

世界の三大瀑布を全て見る事ができた私にとっては、金では買えない神が与えてくれた旅の財産である。超弩級の迫力に過熱させられた余韻は暫く抜け切らず、自分の無力を感じながら滝から離れたのであった。

リビングストンへ(ザンビア) (下の地図参照)

バスはジンバブエからザンビア共和国へと向かった。人の心を研ぎ澄ませてくれた瀑布の偉観は何時までも眼の底に焼き付き、国境附近にも何か神がかった空気が漂っているような感じがする。

熱気が居座った日本の8月のような青空の広がる街道を北に進むと、そこに両国の検問所と税関があり、そこを通過するのに約30分を要した。

退屈まぎれに下車すると、頭の上に物を乗せたザンビアの女性の姿が目にとまり、早速カメラを向けてシャッターを切った。(右下の写真)

黒い肌の彼女らは顔を赤らめているのか判らない。しかし歯茎をむき出しにして笑い出し、ようこそザンビアへと歓迎しているような表情をしていた。

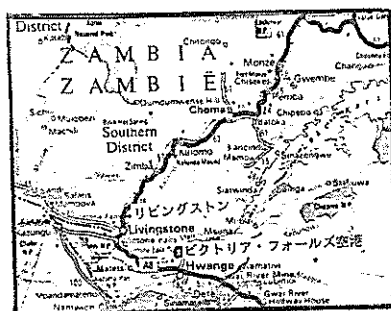
照葉樹は陽光を反射し、光がこぼれるような樹間に広がる建物の前で、バスは停車した。これが2日間逗留することになったインターコンチネンタル・ホテルで、静寂閑散として周りは樹木以外に何一つ目に映るものはない。

熱帯樹の減少、砂漠化、酸性雨、オゾンホールなど、深刻な状況下にある地球の悲鳴、そして警告に耳をか傾けなければならない時、旅人の安らぎの場所としては最適なところである。

ザンビア第2の都市リビングストンの街は何処であろうかと思いながら、貧弱だが居心地の悪くないホテルで小休止した後、今度はザンビア側からビクトリア大瀑布を眺めることになった。

太陽の熱を受けて蒸発した大西洋の水が一滴一滴の雨となってアフリカ大陸に降り、日本の3倍以上もある地域から流れ込む水量が大瀑布となって落下する雄大な景観は、何回眺めても飽きることはない。

ビクトリア瀑布の位置は確かにジンバブエ領内である。しかし眺めはザンビア側から見るのが最高と言われ、それに向かう興奮はさらに興奮を駆り立てていた。



ビクトリア大瀑布 (ザンビア側) (下の写真は全景)

ホテル前の芝生の広場を通り抜けた所に、薄茶色の四角形の塔が立っている。観光地らしいものは、このリビングストンの記念碑だけである。

塔の後方は鬱蒼とした樹林が続いて林冠をなし、濡れた散策道を黙々と歩むと小雨模様に変化し、何となく神秘的な感じに包まれてきた。

視界が突然開けて満目凄涼、殆ど一樹の限界を遮るものもなく、大瀑布は180度の視野を埋めている。

そこに立った私は天地を揺さぶる雷霆(雷のような響)に絶句しなければならなかった。

(上写真の①からの眺望)

高さ108mの断崖を狂乱怒濤となって落下する雷鳴は、狩猛な獣が喉を鳴らすような不気味さで、哑然として思考力まで鈍化する。

自然には想像に絶する桁外れの凄いものと、圧倒された大自然に恐怖を感じ、肌粟を出しながら上流に移動した。(上写真の②の地点)

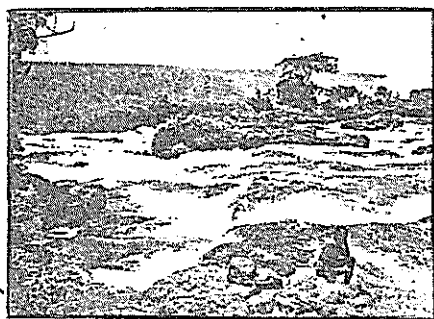
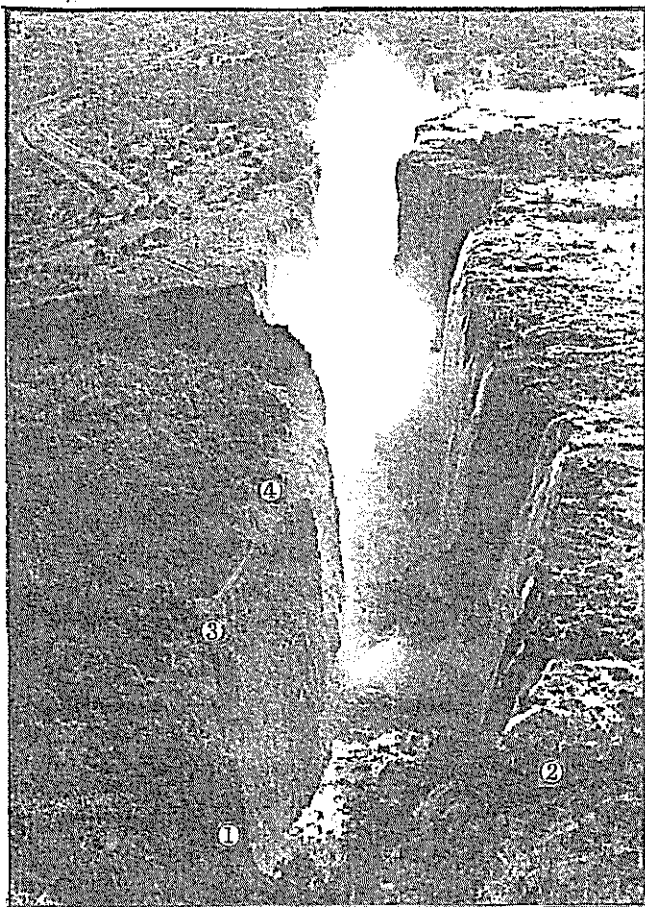
滝に流れ落ちるザンベジ河の水は高く低く波打ち、うねりは早瀬のように滔々として滝壺に向かっている。その絶え間なく押し寄せる渦は流れている生命のようであった。古来から人間は動く水に霊なる力を感じたのである。

(右の写真は②から見た滝の上流)

奔騰する急流がひた走るエネルギーの美観とも別れ、芳霏のたなびく仙境のような森の中を反転し、渡橋の場所に移った。(上写真の③の場所へ)

烟雨のような滝の水飛沫にずぶ濡れになって渡橋の端に立った。白い水の帯、白い水の柱が、壁立万仞の滝壺に地響きをたてて落ちる轟音に、顔は蒼白になって唇が震え、平常心では居られない心境に陥った。

地獄のような滝壺に目をやると、歓喜どころか、滝に吸い込まれそうになり、息が



つまる思いである。



唐の詩人、杜甫が「大きな沢には昔から竜や蛇が住んでいた」（深山大沢竜蛇）と言った言葉を思い出したが、その比ではなく度肝を抜かれてしまった。

目もくらむ高さから落ちる水幕を太陽光線は七色に分解して虹をかけ、人の靈魂と関係があるかのように、さまざまな色を生み出していた。神秘漂渺とした壮観を見惚れながら橋を渡って対岸に辿り着いた。（前頁の写真④から撮ったのが上の写真）

地球の創世を思わせる絶景は大自然の靈力を秘め、その美しさを超えて伝わる強烈な振動こそ、滝そのものを神としてあがめた古代人のエネルギーとなったのかも知れない。

天然色が誘惑する虹の芸術写真を撮ろうと盛んにシャッターを切った。しかしカメラはずぶ濡れになって作動せず、残念無念と途方に暮れてしまった。

その時、「善を為すを楽しむ」とでも表現すれば良いのであろうか、Iさんは一台のカメラを私に提供して呉れたのであった。将に水にちなんだ「上善は水の若し」であり、衷心より御礼を述べます。

水は万物に利沢を与え、天地の間に水なくして存在するものは一つもない。それと同様にカメラなくして、この雄壮な情景を描写することは出来なかったのである。

飛沫となった水煙のために樹林は生き生きと繁茂し、林間に響き渡る瀑布の咆哮を聴きながら、びしょ濡れになってホテルに引き返した。荒れ狂ったビクトリア大瀑布は、何時までも私の網膜に焼き付いている。

ホテルのロビーを通り抜けると広いレストランがある。その横でバーベキューができるようになっていた。そこを歩いて一段降りたところに熱帯樹に囲まれたプールがあり、我々の昼食はそこで摂ることになった。

しかし私の心中から離れなかったのはカメラの故障である。本朝以来の貴重な写真が台無しではないかと平常心を失い、部屋に帰ってカメラの蓋を開けたところ、フィルムが感光して万事休すだ。

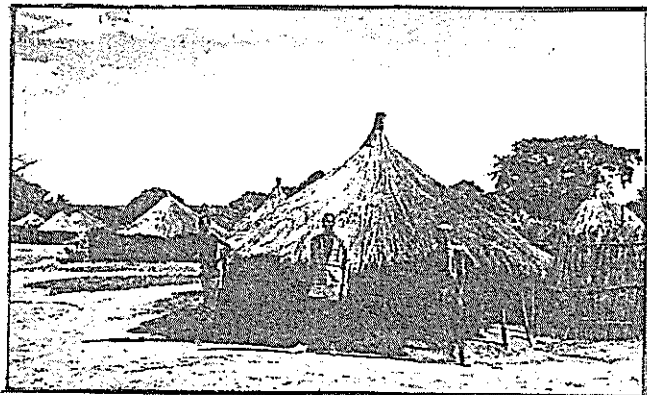
故障の原因は水飛沫のために乾電池が濡れて電流が流れず、カメラの自動が作用しなかったのである。不運な偶然性とはいえ諦め切れず、ただ呆然と途方に暮れていた。

ムクニ村の見学とザンベジ河クルーズ

昼食を終えた一行は最古の黒人集落であるムクニ村の見学となった。

ザンビアには72の部族があつて言葉も違い、その一つを訪れることの意義は大きく、要を得た計画だと賛辞を贈りたい。

地理不案内のために経路や方向は不明だが、バスの停車した所は稍々高台になっている褐色の丘であつた。



切り開いた平坦な土地に大小の茅葺きの住居が並び、ザンビアのエネルギッシュな大きな太陽が容赦なく照りつけ、太陽の国らしい原始的な景観である。(上の写真)

訪れる人もない寂しい住居群、天竺の横町のような人里離れた食慾な村里、彼等は如何なる星のもとに生まれたのであろうかと、背負って生まれた数奇な運命に同情を禁じ得ないのであった。

人口6000人というこの村には家畜の影も見えず、平らな空間を進んで行くと数人の村人が怪訝そうに顔を出した。見栄も外聞もない汚い姿は運まかせの「運否天賦」というか、世は気の毒な入れ物のような感じがする。

カバなどの動物の木彫を手にした男たちは、ワンドル、ワンドルと哀願するように同情心に訴え、執拗に食い下がって離れない。世の中には無縁の人はいないと私も2個買ってやる。

パプアニューギニアを思い出させる光景を撮ろうとカメラを向けると、素早く3人の男が飛び出して写真におさまリ、アドレスを書いた小さな紙片を手渡した。文明から遠ざかった彼等には写真はそんなに珍しいのであろうか。

一つ覚えの「ムリバンジ」(こんにちわ)と声をかけて茅葺きの中を覗くと、赤子を抱えた母親が歯茎をむき出しにして笑っていた。土間で寝起きする貧しい生活でも我が家は楽しく、住めば都だと応えているようである。

運命の神は屋根に宿ると言われるが、自分の力では如何することも出来ない彼女等に憐憫の情が込み上げ、焼コテを当てられたような思いがするのであった。

家庭こそ国家の原型というものの、あの人達は生まれた時に死刑を宣告されたようなもので、生きながら骨が枯れている状態だ。一体誰がこのようにしたのか、又もや白人の恠愾な搾取に憤りを感じるのである。

確かに黒人は世を達観したような強韌さを持っており、新鮮な空気と熱い太陽の光だけが彼等の生命を支えている。このような光景を眺めているとビルマの野戦を思い出し、なんとなく近親感を覚えるのであった。

しかし彼等は何で生計を立てているのだろうか、不思議でならない。家畜は大切な仲間だが其の姿も見えない。家畜に食わす餌の問題だろうか。村の周辺に農耕している緑もない。これは長期の旱魃の性だろうか。

部族共同体社会の中で育った彼等には、死ねば父祖の地に霊が帰るという強固な信仰があるらしく、そのために貧しさに打ち勝ち、気の滅入るような灰色の生活に耐えられるのかも知れない。

社会の恥部のような底辺の生活を眼の当りにし、一段と強固な海外協力隊の重要性を認識して村を去った。

ザンベジ河遊覧の船が待っている河畔にバスは移動した。100人程度乗船できる2階建ての遊覧船は、2km近い河幅の水面を押し分けながら、ゆっくりと上流へ進行した。

エンジンの大きな音が大気を揺るがす中を、広い河の両岸が少しずつ移動して行き、灼熱の太陽に照らされた緑のブッシュは、眼のとどく限りの彼方まで続いている。（上は遊覧線の乗船場）



通訳は運がよければカバや象の水浴風景が見られると話していたが、サギやカワセミの1羽も目に映らない。

「我々は地球の果ての日本から万里の道をやって来た」、どうか歓迎の意味で顔を出してくれと祈るばかりであった。

船上に立った一行は四周の水面に全神経を集中し、小さな変化に一喜一憂しながら辛抱強く見詰めていた。

河の中央にある島が流れを2分する地点に達すると、船はエンジンの回転をおとし、スピードを緩めてゆっくりと走った。

船長が研ぎ澄ませた五感を働かせながら進航すると、突然、カバだと喚声が上がった。

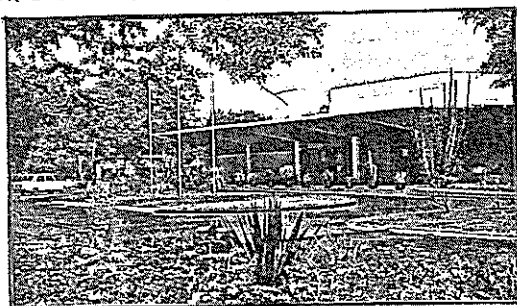


船が近付くと水中に隠れるのが普通だが、不思議なことにこのカバは、ぱあっと大きな口開けていた。勿論、相当の距離があるからであろう。（上は口を開けたカバ）

続いて反対側の河淵に、鼻を鳴らすように大口を開けたカバが見えてきた。するとざわめきが船上を揺るがして一行は一斉にシャッター切った。彼等にはここが地球上で最も美しい安息地、騒がして申し訳ない気もしていたのである。

この光景を見詰めていると、豊かな流れの恵によって人間や動物の暮らしが満たされ、生あるもの凡てが一つの連鎖によって結ばれているような感じがする。

水が天に連なる悠々たる流れに蒼茫とした夕闇がせまり、水面は漆を流したように黒ずんできた。船は灯一つ見えない静寂な河淵に接岸した。（右はホテルの正面）



ザンビアの概要

旧イギリス領の北ローデシアであったザンビアは、南緯 8° ～ 18° の間にあつて900～1500mの高原を主体としている。昔は奴隷や象牙の交易の富を蓄積して強力な王国を形成した部族もあったが、現在の乾燥地に住む農耕民は雑穀を主作物とした焼畑農耕である。

世界第2の銅産出国として鉱山都市が開けたため、早くから成人男子の出稼ぎ労働が盛んに行われている。しかし銅の国際価格の低落のため、住民の生活水準は停滞を余儀なくされている。

8～12世紀ころバントゥ族系住民が北から移住し、原住民のブッシュマンを駆逐して農耕牧畜を始めた。18世紀末のポルトガル人の遠征に続いて、19世紀半ばリビングストーンがイギリス人として初めて訪れた。

19世紀末、ローズのイギリス南アフリカ会社は南アフリカから北方に進出を企て、この地一帯を手に入れて南ローデシア（ジンバブエ）を作った。

続いて4890年にザンベジ河上流の鉱山探掘権を入手し、さらに北方に進出して99年には現在のザンビア（北ローデシア）全域を手に入れた。

しかし会社の関心は鉱産資源の多い南ローデシアに集中し、北ローデシアへの白人の入植は遅れた。1920年初め会社の独占支配に対する白人入植者の反感が高まり、住民投票の結果、24年会社の南北ローデシア支配は終わり、北ローデシアはイギリスの直轄植民地となった。

1920年以来、北ローデシア中部に銅の富鉱が発見され、その採掘にはイギリスやアメリカ系の会社が従事した。大恐慌後、銅の生産は著しく伸び、北ローデシア経済の大宗となった。

南ローデシアの白人入植者はこの資源に着目し、イギリス領ニヤサランド（現在のマラウィ共和国）のアフリカ人労働力と合わせて、3植民地で連邦を結成することを計り、53年にローデシア・ニヤサランド連邦を結成した。

白人の権利を優先する連邦結成にアフリカ人は反対し、アフリカ人民会議（ANC）を結成し、連邦反対と独立を要求してイギリス政府と交渉した。

63年末、ローデシア・ニヤサランド連邦は解体し、北ローデシアは翌64年10月24日、独立してザンビア共和国となった。

独立後のザンビアは直ちに国連、イギリス連邦、アフリカ統一機構（OAU）に加盟し反人種主義、非同盟主義を外交の基本とした。特に南部アフリカの白人支配に対するアフリカ人解放闘争に対しては、その置かれた地理的環境から積極的に対応した。



12月31日

(火) 晴

サファリー見学

昨日は瀑布の水飛沫のためにカメラが故障し、金で買えない貴重なフィルムが感光してしまった。眼を覚ますと居た堪れず、自然にフォールズへと脚が向いていた。

数棟に分かれたホテルの出入口には警備員が配置され、昼夜を問わず警戒している。従業員が盗人の片棒を担いで客の荷物を窓から投げ下ろし、下で待っている泥棒に渡して山分けした事件があったらしい。

一行の宿泊した棟の警備員は私の顔を覚えたのか、朝の挨拶の声をかけてきた。このホテルに出入りできるのは、本当に限られた一部の上流階級の人と外国人だけで、人数にすれば極く僅かであるからであろう。

リビングストーン記念碑からフォールズに通じる鬱蒼とした樹間は薄暗く、ダイナミックに落下する滝にも未だ陽が当たっていなかった。撮影は無理だと諦め、我れを忘れて呆然と陽の昇るのを恋い焦がれる思いで待った。執念である。

千仞の滝壺の眺めは、人間の忘れた多くの感覚や能力を掘り起こしてくれる。人は大きな自然に出くわすと自ずから痒み、ひし伏れ、たたえ、祭り上げてきたが、そのことが良く判るような気がするのであった。

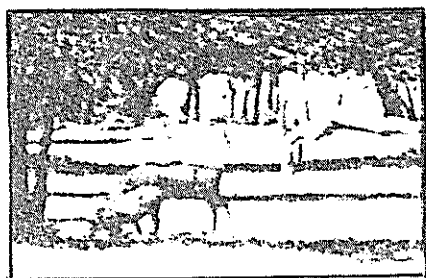
漸く東から昇る太陽に落下する水は銀色に輝き始め、霊力を秘めたように虹がかかり、この美観は心身をゆり動かし、生命力を高める原動力のようであった。

故障の禍が転じて福となり、他の人達の2倍も瀑布が眺められると傘をさしながら、意気揚々と昨日歩いた道を通り、ザンビア側の写真だけは撮れたのである。

本年最後の観光は自然動物園ナショナル・パークの見学となり、ホテルを9時に出発した。舗装されていない細い道路には人影も人家も見えず、鏡のように輝いて流れるザンベジ河を左に見てバスは上流へと疾駆した。

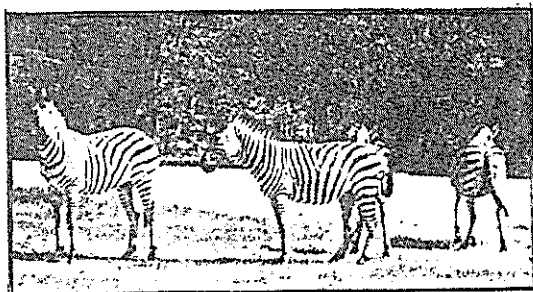
しばらく行くと、ここが入口かと迷うほどの簡単なゲートがあり、まるで牧場の入口のように棒が一本あるだけだ。バスはステップの中をくねくねと曲がりながら園内を進んだ。童心に帰ったように心臓の鼓動が妙に高まってきた。

灼りつける陽光を浴びた草原で初めて出合った動物は、長いスマートな脚のインパラであった。バスを発見した彼女等はピョンピョンと軽快に宙に舞い、その姿は蝶のようであった。(右の写真)



その向こうに数頭のシマウマがのんびりと歩いていた。動物園で見ると比べてシマは美しい。体も大きく皮膚に艶があり、シマ模様が生き生きとしている。一頭として同じ模様のないのは、人間の指紋と同じようだ。

サファリーの空は限りなく透き通り、風の音に耳をそばたてながら静寥なステップの中を走った。樹木も草も午睡して



いるような静けさが続き、快適な空間をつくって豊かさが広がっている。

どの緑もそれぞれ固有の色をにぶく光らせ、背の高い照葉樹が陽光を反射している草原を、ゆっくり横切るキリンはしなやかで優雅であった。それは動物の群のようではなく、茎の長い花卉に斑点のある大輪の花が、しずしずと動いて行くようである。(右の写真)

身も心もとらわれてしまうような優美な姿のキリンは、バスが接近しても一向に我れ関せず、大自然の中でのんびりと口を動かしていた。

動物園の中の動物たちは常に振り子のように右に左にと動いている。それは自由に走り回ることができない苛立ちからであろうか。

木の幹とそっくりの長い首を伸ばし、高い木の葉を食べているキリンを見ていると、「老いては麒麟も駑馬に劣る」という言葉が脳裏に浮かんできた。麒麟は中国古代の想像上の獣でキリンと違うが、年老いた感傷がそのように思い出させるのである。

青々とした草原の中には葉脈だけになった枯れ葉も見えたが、どの茂みにも動物が潜んでいるのではないかと、針鼠のように全身の神経を逆立てながら、鋭い眼で周りを見回していた。

深い林を通り抜けた所で、象の群が歩調を合わせたように、威風堂々と歩いてくる光景を待っていたが期待は破られた。時おりトンビが我々の上を旋回し、甲高い声で何度も繰り返し鳴いているだけである。

喧騒を離れて自然のありのままを魅了し、時の経つのも忘れているとき、直射する太陽の光を避けるように、樹陰に集まったヴァファローの群が指呼の間に見られた。力強く角を張り出した重量感の溢れる鉄のような動物だ。(右の写真)

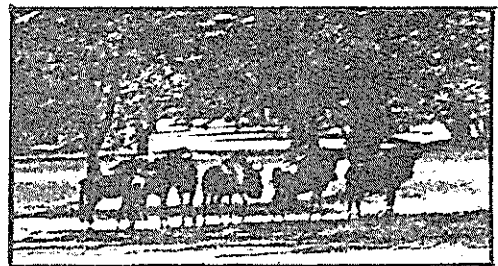
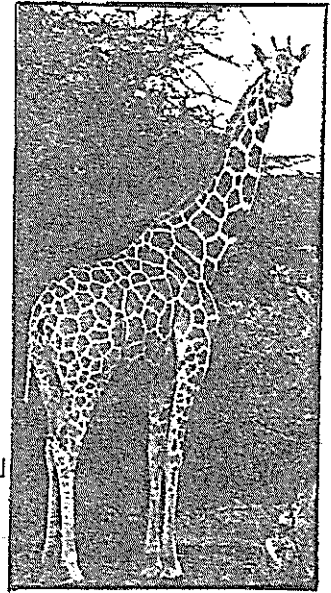
全身真っ黒に光るヴァファローの悠然として草を喰む姿は別世界のものようで、我々の心を癒してくれる大自然をふかぶかと認識したのである。

過酷な気候のもとに、混沌とした生命力の競争の中で生きる動物たちは美しい。これらの動物を眺めていると、原始時代にタイムスリップしたような気分になり、大自然に比べれば人の命などは、風に舞う花びらのようなものだと思えるのであった。

又、自然の与える恩恵を如何に利用すべきかを知っておれば、自然は我々すべてのものに幸福であることを許し、幸福を分かちあうように作られていると思うのだ。

人間と他の動物と違うところは何かであろうか。人間は心が複雑で欲望もまた複雑、感じ方も複雑であることを思うと、人間は考える動物だと云えるだろう。

この自然動物園は小規模の上に草食動物しかいない。肉食動物のいないサファリーは迫力に欠けた片輪のサファリーである。王者ライオンが木陰の短い木の下で家族に



取り囲まれながら、ゆっくりと憩う姿が見えないのは誠に物足りない。

当初の計画は「ボツワナ共和国」のチョベ国立公園の見学であったが、何らの理由も示さずに変更になったことは釈然としない。

揣摩憶測すると、業者は10名に過ぎない少数では採算上の問題があり、ボツワナへの入国を中止し、リビングストンに2泊すれば採算がとれると判断したのかも知れない。観光業者に猛省を促したい。

午後、再びこのサファリーを訪れて象とサイの姿に期待を掛けたが、その夢は破れてしまった。唯一印象に残ったのは、当惑した表情を浮かべていた気品のあるキリンの姿であった。

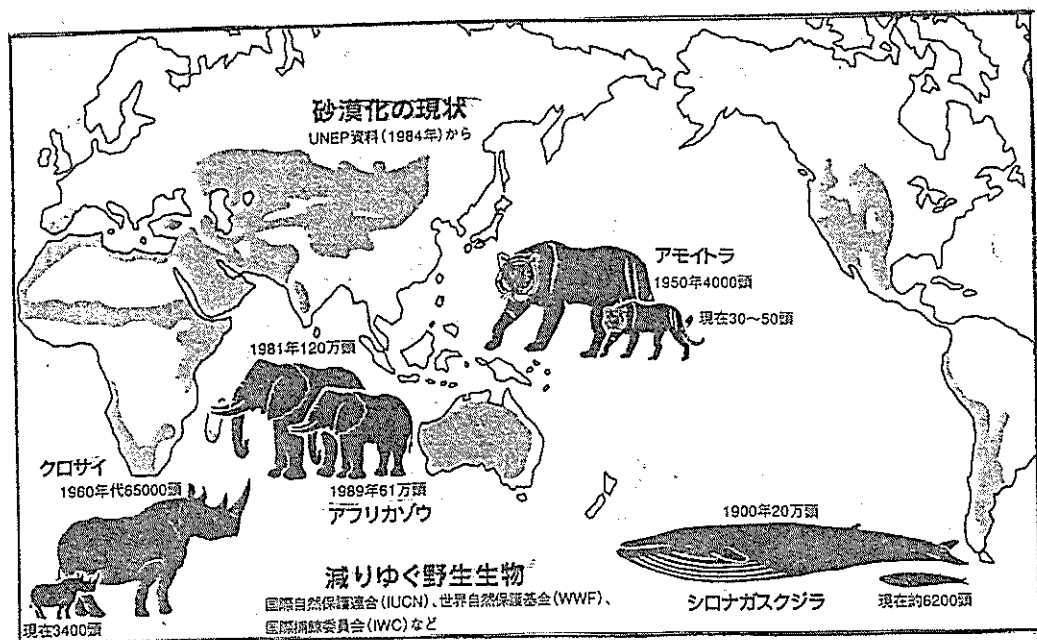
【付記事項】 (1992、1、1 読売新聞)

今年6月、ブラジルのリオデジャネーロで「環境と開発に関する国際会議」(UNCED、地球サミット)が開かれ、環境の改善に向けての新たな挑戦が始まる。

地球の温暖化を促進する二酸化炭素は増加を続け、それを吸収する熱帯雨林は減少を続けてきた。

砂漠は拡がり、野生動物は住む所を失っている。ここに砂漠化の現状から、減りゆく野生動物の状況を記載した。世界的規模で対処すべきがあると、サファリーを見て感じたのである。

	ほ乳類	鳥 類	は虫類	両生類	チョウ
ア ジ ア	222	114	112	--	44
うち日本	(9)	(19)	(2)	--	--
オセアニア	45	43	25	--	12
南北アメリカ	411	349	378	24	27
ヨーロッパ	--	--	--	--	5
アフリカ	514	361	196	8	27
世界計	1192	867	711	32	115



リビングストン博物館

希望者のみ博物館の見学となる。歴史を眺める楽しさは格別で、当然のように参加を申込み午後2時にホテルを出発した。

太陽が鋭い光の矢を撃ちこむ街道を慕進すること概ね10分、白亜の建物が目にしむ市街の中央で停車した。

ザンビア国旗とリビングストンと書いた小さな白亜の建物は、小なりとはいえ其処には時の流れと、静かな精神世界が漂っているような感じがする。

好奇心を一杯にして館内に歩を運んだ。内部は4つの部門に分かれ、石器時代のものや各部族の生活用品、住居などが主なもので、勿論、ここを発見したリビングストンの記事も書かれていた。

独創的な幾何学模様が描かれているのはアフリカらしく、オレンジとグリーンの使用方も個性的である。

伝統文化の温床というべき農村風景の絵は、生きるための知恵や文化遺産が物語りのように書かれ、どんな小さなものにも尊い歴史や情緒が感じられる。(右は農村の生活図)

陳列されたものは数少ないが、良く土着的な文化要素を表わしていた。歴史を愛する者にしか歴史の美しさは判らないが、古いものの死と新しい生の鮮やかさが描き出されており、歴史は民族の鏡だと改めて思えてくる。

時の流れはこの小国にも様々な歴史の皺を刻んできた。今はもう時を止めて訪れる人に昔を教え、人間は学問をしなければ馬牛に着物を着せたのと同様だと、論しているようであった。

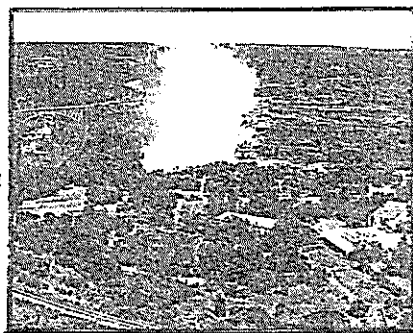
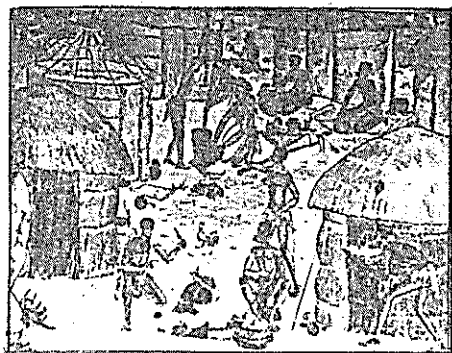
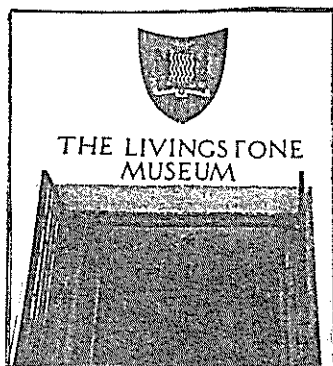
遠い地鳴りのような歴史の足音が感じられた見学も忽にして終わり、御土産品コーナーを廻って辞去したのである。

リビングストンの街の中央にある博物館は高台にあり、杳々とした台地が続く陸の海のような光景が周囲を取り巻いていた。肌を焦がす強烈な陽光を避けてネムの木の陰で暫く休憩し、乾いた喉を潤した飲み水は生き返ったような味がした。

楽天的な黒人女性が頭上に荷をのせて歩く姿は、渺茫とした無限の広野とマッチしていたが、目標のない人生は気の毒だという感じを受けたのである。

幅員の広い街道の遙か彼方に、躍動感のあふれるビクトリア大瀑布の水煙が望遠された。美しく成熟した艶麗な景観は、博物館を訪れた者の特権のようであった。(右は大瀑布の水煙)

以上でリビングストンの観光は終了した。青い空と真っ赤な太陽のこの町の発展を祈って止まない。



大晦日

ホテル内はロビーと云わず各棟の玄関から階段に至るまで、日が過ぎたクリスマス・ツリーが派手に飾り立てられ、祈りの言葉を認めた願いが満艦飾のように吊るされていた。

旅に出て未知の世界の物珍しさに感覚が麻痺したのか、それとも大陸の自然環境の性か、師走の慌ただしさは感じられない。

勿論、今日が大晦日であったこともすっかり忘れてしまい、夕食時にホテルのレストランに脚を運んで、新しい飾付けを眺めて初めて気が付いたのであった。

大晦日は「おおつごもり」と云って心身を清め、歳神（正月神）を迎える厳粛な日である。故国の日本では枯淡幽玄の庭園の中に鎮座する、神社仏閣に参拝することが慣例で、恐らく孫達も今夜は神仏の前に額ずいたことだろう。

大晦日の晩に行われる恒例の「紅白歌合戦」や「なまはげ」、「除夜の鐘」や「年越そば」などが思い出される。海外で大晦日と元旦を迎えるのは出征時を除くと、アンコルワット紀行に次いで2回目、リビングストンは生涯の懐古の地となった。

美しく老いて行くにはどうすれば良いのかと、陳腐な疑問を抱いていると夕食時間となり、ロビーを通過してレストランの席に着いた。

昼間みるレストランと見紛うばかりに飾り付けられ、貧しい小国にとっては最大級の持て成しである。この国にも大晦日の慣習があるのだろうか。兎に角、心から有難うと随喜の涙を流さなければならなかった。

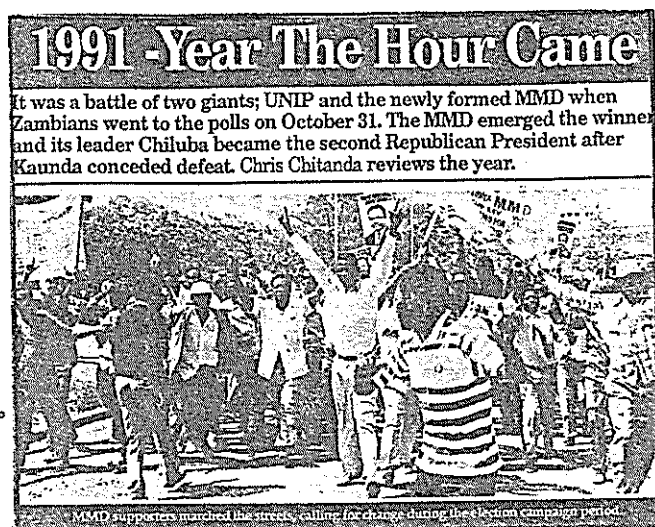
卓上に並んだ美酒佳肴に胃袋を満たしていると、心臓の鼓動が源だという快い音楽が流れ出した。心を尽くして客を楽しませてくれる黒人たちの熱情は、我々旅人にとっては何よりも嬉しいことである。しかし狡猾な血を受け継ぐ白人達は、横柄にふんぞり返っていた。

酒食音律の盛り上がったニューイヤーズ・イブ・パーティーは、「盲亀の浮木」というか、滅多に出会うことのない幸運な巡り合せである。

忘年の交わり（互いに年齢の差を気にしないで付き合う）の中で酒に弱い右党の私は、たらふく孫左衛門ときめつけながら、楽天的で明るい性格の黒人諸君に満腔の感謝を捧げていた。

地理は経済をつくり、経済は人情をつくる。その人情は歴史をつくり、世界をつくる。即ちこの世の中で最も大切なものは人類愛である。彼等の青眼を開いた粒々細工の歓迎に溺れながら時を過ごし、甘い夜の空気を深く吸い込んで部屋に戻った。

上記の写真は現地の新聞が報道した12月31日の情景で、ザンビアでも去り行く年を盛大に送っていた。（この新聞は元旦の機上でザンビア人より頂いたもの）

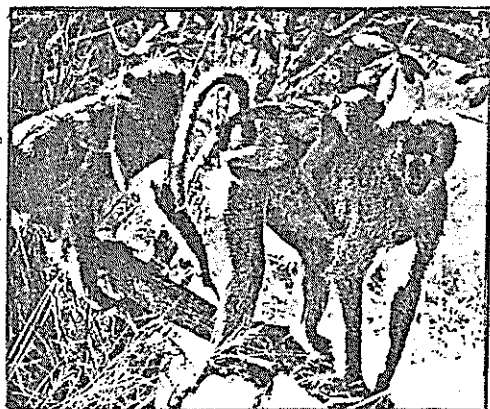


1992年1月1日 (水) 晴 元旦

騒然とした激しい雨の音で弾かれるように目を覚ました。暫くして雨は小降りになったのか音はやみ、窓外に目をやると晴天である。騒然とした音の主人公は猿であった。

長い腕で弧を描いて空中ブランコしながら、次ぎの木へ、また次ぎの木へと確実な動作で移動を続け、飛行している間、木の枝は小刻みに震えて騒音を撒き散らしていた。

(右の写真は樹間を飛ぶ尾長猿たち)



猿が木から落ちるのを見ながら抱腹絶倒し、窓を開けると冷たい空気が部屋に入ってきた。下に目を移すと腹の下に子猿を抱えた親猿と視線が一致し、彼女は餌をねだるような仕種をしていた。

今年は12年に1回おとずれる申年だ。元旦早々から干支にちなんで猿に起されたことは縁起よく、これから益々楽しい旅となるばかりか、今年は必ず情熱の燃え上がる幸せがくると期待し、堅く信じたのであった。

暫くして年の始めの太陽が昇り出した。新しい年の幕開けを告げる元旦の日の出、これを初明かり、初日陽などと云う。初日の参拝は新年の招福として、古より日本の各地で行なわれたが、異国の雰囲気はそのような気分にはさせない。矢張り人間の心は環境が大きく左右するのである。

しかし自ずと日本の正月が偲ばれる。おせち料理の数の子、黒豆、門松に注連縄、神棚の神酒と榊など、正月の美意識の風習が懐かしい。

「人は天地の間に生まれ、忍しきこと遠行の客人の如し」と、誰かが詠んだ詩が脳の中を走った。「今我れ楽しまずんば来歳有るや否やを知らず」だ。本年は変化の波に揺られながらも、良い運命に生きようと心したのであった。

強烈な旭日を浴びながらプールサイドで朝食会を迎えた。一行10名は襟を正して新年の挨拶を交わし、清新の気がみなぎる中で添乗員の挨拶が始まった。

貧乏な状態を「正月に餅搗かず」というが、今朝は業者の好意で元旦を祝う雑煮が出た。そのうえ小さいながらも薦被のお神酒のサービスもあり、至れり尽くせりの屠蘇気分は盛り上がり、1年の邪気を払い延命が叶ったような充電の元旦であった。

前記した今年の干支の申(猿)は、人間に最も近い動物である。この年に生まれた人は演出や表現に才能があり、周囲に人が集まってくるらしい。

申の字に近い「伸」の意味にも通じ、ぐんぐん成長する年が申年でもあると言われている。我が家の跡取りの孫の名前が「伸一」、これら5人の孫のために干支について若干記しておく。

干支は十干、十二支を組合せて構成されている。中国の哲学、五行(木火土金水)を表わしたものが十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)。

陰陽道に結び付いて出来上がった暦法が十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)。これらが組み合わさり、合計60の干支ができている。

干支	干支 番号	干支	干支 番号	干支	干支 番号	干支	干支 番号	干支	干支 番号	干支	干支 番号
甲子	1	甲戌	11	甲申	21	甲午	31	甲辰	41	甲寅	51
乙丑	2	乙亥	12	乙酉	22	乙未	32	乙巳	42	乙卯	52
丙寅	3	丙子	13	丙戌	23	丙申	33	丙午	43	丙辰	53
丁卯	4	丁丑	14	丁亥	24	丁酉	34	丁未	44	丁巳	54
戊辰	5	戊寅	15	戊子	25	戊戌	35	戊申	45	戊午	55
己巳	6	己卯	16	己丑	26	己亥	36	己酉	46	己未	56
庚午	7	庚辰	17	庚寅	27	庚子	37	庚戌	47	庚申	57
辛未	8	辛巳	18	辛卯	28	辛丑	38	辛亥	48	辛酉	58
壬申	9	壬午	19	壬辰	29	壬寅	39	壬子	49	壬戌	59
癸酉	10	癸未	20	癸巳	30	癸卯	40	癸丑	50	癸亥	60

(干支のよみ方)

甲 こゝろ 乙 おつ 丙 へい 丁 てい 戊 ぼ 己 き 庚 こう 辛 しん 壬 じん 癸 き
おの 子 し おの 丑 ちう おの 寅 いん おの 卯 ぼう おの 辰 しん おの 巳 し おの 午 ご おの 未 み おの 申 しん おの 酉 ちう おの 戌 いぬ おの 亥 い

昔から日本でも年月、時刻、方位などを表わす呼称として使われた干支だが、特に十二支は各年に動物が当てられて親しみやすい。動物に結び付け、その年に生まれた人や、その年自体を占うことも、細やかな庶民の楽しみであった。(上は干支表)

リビングストーン〜ルサカ (13頁地図参照)

悠遊の旅を充分に魅了させてくれたリビングストーン、都会の塵を離れて暮らした2日間に愛着を感じながら離別の時を迎え、孫たちの顔を思い浮かべながら黒人経営の御土産店を覗いた。

「おみやげ」の語源は「見上げ」で、「良く見、えらんで人に差げ上げる品物」の意味だが、見るもの乞食で何でも欲しくなる。サファリーで自由奔放に育つ動物のように成長してほしいと、孫たちに数点の動物の木彫を求めた。

相好をくずして別れを惜しむ黒人たちに懇懇に謝意を表わし、心の中で「努力すれば報われる」と激励の言葉を送り、リビングストーン空港へと向かった。

ネムの木の緑が目にも沁みる小さな空港ビルには、5〜6人の白人と2人の黒人の姿しか見えず、40度の炎天下を11・30、国内便のプロペラ機は羽博いた。

豊かな自然の息づく彼方にビクトリア瀑布の水煙が微かに遠望され、高度3000mの機上から瞰下する地表は手に取るようで、僅かな緑が褐色の台地を彩り、山麓を一直線につなぐ道路は大陸らしい景観である。しかし厳粛な不幸の匂いは拭い去ることはできない。

12月31日、大晦日を祝ったザンビア風景を掲載した新聞を、隣座席のザンビアの黒人から有難く頂戴した。これは紀行文に挿入すべきものだと、抜け目なく仕舞い込んだのである。(32頁に掲載)

多分この黒人はザンビアのインテリであろう。ザンビア人の多くは電気のない生活を送っているため、世界で何が起きているかを知ることもない。しかし彼等は贅沢を知らない代わりに、飢えることには強靱だという長所があるのだ。

これからは観光客に刺激され、希望の灯を国民の心の中に灯してほしい。貧乏で亡んだ国家はないと古来から云われている通りだ。狂乱怒濤の苦しい時代を乗り越えた底力を今こそ発揮すべきである。

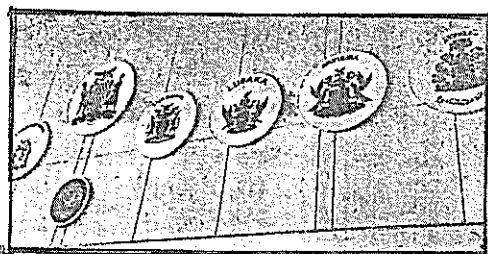
人生は旅の連続だが、私には連れて行って貰うという心は微塵もなく、自分自身で旅を大きく作ろうとする気持だけは旺盛だ。そのように意気込んでいると約1時間の空中散歩は終わり、12・30にルサカ空港に到着した。

ザンビアの首都ルサカは人口約65万、標高1283mの高原にあり、道路、鉄道、航空路の最大の要衝で、商工業の中心であると共に農産物や家畜の集散地でもある。

イギリスが南アフリカと銅産地帯を結ぶ鉄道を敷設する課程で、1905年に建設された集落から発展したが、附近のアフリカ人部族の酋長の名をとってルサカと命名したと言われている。

1935年、北ローデシアの首都が、リビングストンからこの地に移されて以来急速な発展を遂げ、第2次大戦後の銅の増産に伴って活気を増してきた町である。

64年、北ローデシアがザンビアの国名で独立し、首都となったルサカの地上に立ち、空港ロビーに入った。最初に私の眼を引き付けたのは、国章と各部族のマークを表示した陶製の壁掛けであった。(上の写真は国章と部族のマーク)



10数個の部族の紋章に共通するものは動物である。長期間に亘る部族間の闘争の経過表わすように、各々の特徴も巧妙に表現している。

アフリカ諸国の独立後の傾向として社会主義を標榜したが、ソ連の解体以前から西側に傾斜していた。社会主義の人たちは自分自身で考えるのではなく、党の言うことを繰り返すだけの方が党の信任が厚く、好感がもたれるということを経験から学んだ。しかし、これでは発展性が乏しく、ザンビア国民も自覚して建国に邁進されるよう望んで止まない。

経済も教育も貧弱で、苛酷な支配の痛ましい傷跡を遺すこの国に対し、我が国を始めとする地球規模の協力は当然である。それには先ず物質的繁栄を超えた人間尊重の世界の建設が重要であろう。善の光のきらめきは闇に負けてはならない。

ルサカ～ヨハネスブルグ (13頁地図参照)

ザンビア、ジンバブエの両黒人国家の旅は大自然の魅力に酔った旅、陽光の楽園で知られる未知の旅、そして夢を買うような感動と感傷を与えてくれた旅であった。

その語り尽くせない不思議な実感を抱きながら、南アフリカ航空065便に乗り継ぎ、14・10にルサカ空港を舞い上がってヨハネスブルグを目指して天翔けた。

南ア航空は何の風の吹き回しか我々一行にファストクラスを提供した。勿体振った白人達を後部座席にする快感は形容し難く、再び正月気分を味わっていた。

開戦50周年、敗戦国日本が世界筆頭の経済大国に躍進したため、一介の蒼生に過ぎない我々旅人も国威の影響を享受し、我が国がザンビア、ジンバブエのみならず、南アからも認識されている証左だと喜ぶばかりであった。

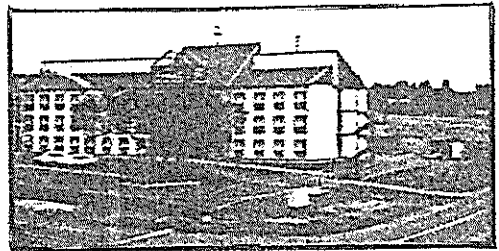
南ア航空は抜群の安全性の定評があり、清潔な機内と正確な運航、そして豪華な食事が有名だと前記した。噂の通りの機内食に腹の虫を満足させ、操縦席を覗くと気軽に手を挙げて写真撮影に応じてくれた。

下界の天然の画廊のような眺めは国境附近から変化して連峰が眼界に映ってきた。晴れ上がった大陸の景色の移り変りに応接して、飛ぶこと約2時間、16・10にヨハネスブルグのヤン・スマッツ空港に到着した。

出迎えてくれた通訳は意外にも中国人の「呉」氏であった。日本人の通訳がないのは国交がないからであろうか。中国に親しみをもつ私は彼に出身地を尋ねたところ、思いもかけない満州の齊々哈爾（チチハル）であった。

私にとってチチハルは最初の海外生活の地で思い出も多く懐かしい。彼とは言わず語らず旧友と邂逅したように話が弾んだ。

人口3000万の南アフリカ共和国の最大の都市ヨハネスブルグは人口160万。高速道路の四通八達した郊外の街道沿いには、広大な敷地に居を構えた豪華な白人邸宅が先ず私の目を刺激した。（右の写真）



白人住宅には黒人だけを吠えるように訓練した番犬がいると云うから驚きだ。先入観であろうか。快晴でありながら何か厚い雲が垂れ込めて、資本主義侵略の雰囲気肌に感じられる。時代遅れの偏見と無知の壁は1日も早く破棄し、アパルトヘイトの残滓を除去すべきである。

街道には火力発電所を始め各種の工場群が櫛の歯のように並び、ショッピングセンターや娯楽施設も続き、我々はヨーロッパの影響を100%うけた市の中心部へと疾駆して入った。

碁盤目状に都市計画された華美な街並みには楯比した高層建築が林立し、アフリカ随一の大都会らしい豪華さを誇る景観である。（右は宿泊したホテル）

震動が全く感じないデラックスバスが、繁華街の中心に建つ5つ星のサンアンドタワーズ・ホテルに横付けにされると、守衛の黒人たちは射るような視線と白い歯を見せて出迎えていた。（右はホテルからの景観）



36階建ホテルの俯瞰につられて早速、附近の繁華街に脚を運んだ。異様なガラス張りの天を衝くようなビルが所狭しと競い合い、アーケードの商店街が矢のように一直線に伸びている。垢抜けした通りは白人経営の商店ばかりが軒を占め、南アフリカの旺盛な経済力を誇っている。



黒人経営の店で何か買ってやりたいと血眼になって搜したが見当らない。それは糠の中の米粒を搜すよりも困難で、結局は締め出されているのである。根も葉もない白人優越の思想は独善的だと云わなければならない。

黒人と一緒にされたくない。俺の方が上等な人間だと信じたいのであろう。それは実体のない偏見に過ぎないことを知らずにいる、無知からくるものだと言いたい。

ガラス張りの高層ビルの谷間の商店街は、午後5時になるとシャッターを閉じてしまった。5時を打つと黒人は尋問され、拘留されるというアパルトヘイトの悪弊が、今もなお長い習慣として残っていた。

南アの概要 (下図参照)

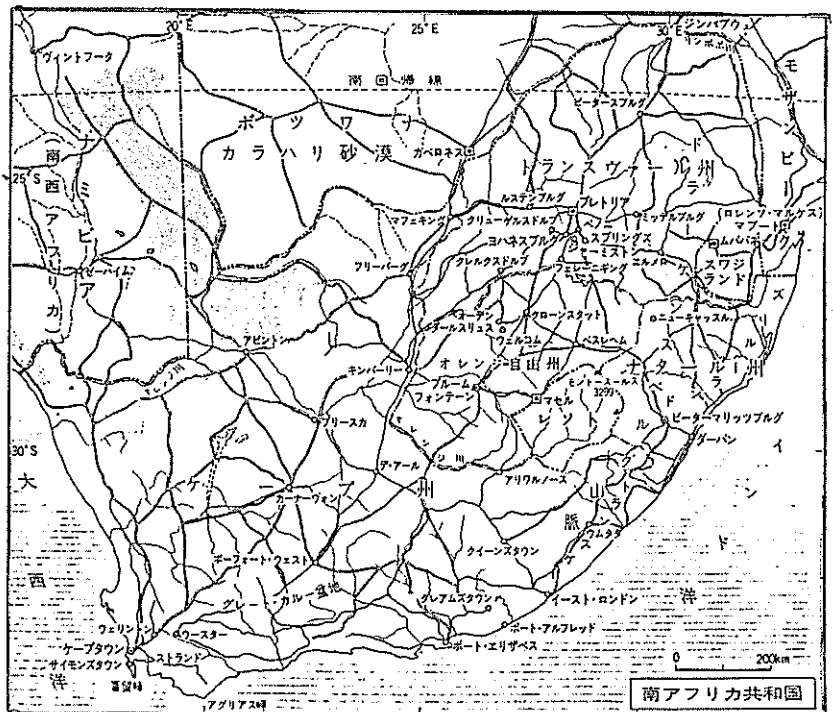
ヨーロッパ系住民はアフリカ諸国の中で最大とはいえず約18%にすぎず、第2次大戦後アフリカ人への主権移行が次々と実施された中で、悪名高いアパルトヘイト政策がつづけられた。

アフリカ統一機構(OAU)は勿論、国連における度重なる非難決議を無視し、世界から孤立した存在となっていた。

しかし、アパルトヘイト(人種隔離)政策は、デクラーク南ア白人政権によって1991年6月、全面的に廃止された。但し法的には廃止されたが、新憲法制定方法を協議する「民主南ア会議」(CODESA)は、白人対黒人、黒人対黒人、白人対白人の対立が激しく、黒人への参政権の付与は容易ではないようだ。

黒人間でもマンデラ氏の率いるアフリカ民族会議(ANC)と、ズールー族を代表するインカタ自由党(IFP)の対立は、反アパルトヘイト闘争の時代からあり、86年以来、主導権をめぐって6000人を超す犠牲者を出している。

南アの黒人間の対立は部族主義からきており、旧ソ連の共和国が民族国家と呼ばれるなら、南アも同じである。南ア国内には22の政治組織と90を超える政治団体がある。民主南ア会議の焦点は具体的な憲法制定方法である。ANCは自由選挙による制憲議会選出と暫定政府の樹立を主張し、政府(白人)は現政権下での新憲法移行を



主張して譲らない状態である。

南アは白人の少数支配を終え、人種融和国家をつくる道を歩み出したが、これは又、多民族国家の創設でもあり、そこにこれまでの黒人対白人の図式に加え、黒人間の民族対立が新たに浮かび上がってきている。

我が国にとっては南アは希少金属を供給国する重要な国である。デクラーク現政権とマンデラ氏以下の黒人指導者が、新憲法制定交渉に粘り強く取り組み、民主的共存共栄体制の確立に努力することを望みたい。

日本はこれまで南アとは領事の交渉はあったものの、アパルトヘイト政策に反対する立場から、正式な外交関係は結んでいなかった。しかし憲法制定交渉が開始されたことから、1941年以来、約半世紀ぶりに大使を相互に置くことになり、誠に喜ばしいことである。

以上は今次旅行時の南アの情勢だが、以下過去の歴史等について概要を記す。

【歴史】

17世紀の白人来住以前のこの国は狩猟民のブッシュマンと、牧畜民のホッテントットが住んでいた。15世紀以降、農耕民であるバントゥ族系のアフリカ人が北方から南下し、広く全土に定着した。(バントゥ族は16頁参照)

1652年、オランダ東インド会社は、ヤン・ファン・リーベックらを現在のケープタウンに上陸させた。それは東洋航路の補給基地を設けるためであった。その後、オランダからの移民(ボーア人と呼ぶ)が増加し、彼等はアフリカ人から土地を奪って入植地を拡大していった。

18世紀末から19世紀初めにかけてナポレオン戦争中のイギリスは、オランダと連合するフランスがケープタウンを占領することを恐れ、1795年に予防的に占領した。1時オランダに返還したが、ナポレオンの敗北後の1814年に再度占領して正式にイギリスの植民地とした。

その結果、ボーア人(オランダ移民)はイギリス人の支配を嫌って北方の内陸部に移動し、ナタール地方に「ナタール共和国」打ち建てた。しかし43年、イギリス軍に敗れナタールはイギリス領となった。(前頁地図参照)

ナタールを逃れたボーア人はイギリスと争いながら、ついに「トランスバール共和国」(1852)と「オレンジ自由国」(1854)の建国をイギリスに認めさせた。

1867年、オレンジ自由国のキンバリーでダイヤモンドの富鉱が発見されると、南アを辺境の農業国から鉱業国に一変し、さらに孤立していた南アを世界経済の一環に巻き込んだ。

イギリスは直ちにオレンジ自由国の割譲を要求し、71年にイギリス領とした。そしてダイヤモンド・ラッシュが起こり、多くの山師たちによる採掘が始まり、セルシ・ローズらのデ・ビース鉱山会社に吸収されていった。(17頁の記事参照)

続いて86年にトランスバール共和国のウィットウォーターズランドで金鉱が発見された。金鉱採掘も初めは多くの山師たちによって行われたが、やがて資本の集中が進んだ。ダイヤモンドで富を蓄積したローズは「南アフリカ金鉱会社」を設立し、金の採掘に乗り出した。

イギリスはこの産金国の支配を目的にボーア戦争(1899～1902)を起して領有化した。この戦争中、ボーア人の農場や家屋は焼き払われ、捕虜収容所では多く

のボーア人が餓死したため、ボーア人の反イギリス感情が続くことになった。

ボーア戦争後に連邦化への動きが起り1910年、ケープ植民地、ナタール、トランスバル、オレンジ自由国の4植民地が1つになり、南ア連邦が結成された。

最初の連邦首相になったボータは鉱山の白人労働者を保護するため、最初の人種差別法といわれる「鉱山労働法」を1911年に制定し、13年にはアフリカ人を原住民指定地に隔離する「原住民土地法」を立法化した。

第1次大戦が起ると、南ア連邦はイギリスと協力してドイツ領南西アフリカ（現ナンビア）に進駐し、これによって戦後、南西アフリカは南ア連邦の委任統治領となる。

戦後の不況期の1922年、鉱山で大争議が起るとスマッツ首相は軍隊を導入して弾圧したため白人労働者の支持を失い、24年に国民党・労働党連立内閣が成立した。

ヘルツォーク首相は文明化労働政策のもとに、白人貧民層の救済、保護を目的に一連の人種差別の産業調停法（賃金法）を立法化した。

1929年の世界大恐慌は南ア連邦にも波及した。最大の打撃を受けたのは白人農業であったが、金鉱業の順調な発展により白人農業は保護された。

大恐慌から立ち直るため、野党「南アフリカ党」のスマッツは国民党に連合を呼び掛けて「連合党」を結成、33年、第3次ヘルツォーク内閣が成立した。そして26年、同政権はアフリカ人から参政権を奪う「原住民代表法」を立法化した。

第2次大戦が起ると、南アは中立か参戦かで意見が分かれたが、連合国側への参戦派のスマッツが勝ち、戦時内閣を組織して参戦した。

【アパルトヘイトの由来と展開】

アパルトヘイトとはアフリカンス語（17世紀のオランダ人が持ち込んで使っていた言葉）で「隔離」を意味している。即ち南アの少数白人が人口の大多数を占める非白人を、皮膚の色の違いによって差別していることである。

アフリカ大陸には白人の入植植民地が多くありながら、南アだけになぜアパルトヘイトが起ったのか。その理由は南アの歴史にあると云える。

第1はボーア人（オランダ移民）の信奉したオランダ改革派教会の教義による。同教会によると、人は生まれながらにして神に救われる者と、救われない者との運命予定説の立場をとり、さらにボーア人こそ神に選ばれた者だという「選民思想」に基づいている。

第2は、ボーア戦争によって農場や家を焼かれ都市に流れ込んだボーア人貧困層を、労働市場でアフリカ人から保護し、且つ白人資本にとって必要な安価なアフリカ人労働力を確保しなければならないという、経済的な理由があった。

ヘルツォークの「文明化労働政策」とはその具体化であった。第2次大戦後、アジア、アフリカ諸国の民族主義の波を受けた南アでは、国民党のマランがそれを察して「黒禍」を訴え、1948年の総選挙のスローガンに「アパルトヘイト」の必要性を説き、選挙に勝って初めて国民党単独政権が成立した。

マラン内閣（1948～54）は選挙公約を直ちに実施し、異人種間の性的交渉を禁じる「背徳法」（50年）、さらに人種登録を義務づける「人口登録法」（50年）、人種別の居住地を定めた「集団地域法」（50年）、反政府活動を取り締まる「共産主義弾圧法」（50年）などを制定した。

次いでストレイダム内閣（1954～58）は24年に制定した「産業調停法」を

改正して人種混合組合を禁止し、人種による職種制限法を導入した。また最後まで残ったカラード（白人との混血）の参政権を奪う「投票者分離代表法」（５６年）を成立させた。

フルールト内閣（１９５８～６６）は今日まで続いたアパルトヘイトの基本方向を決定した。それは５９年の「パンツァ自治促進法」であり、これまで「原住民土地法」（１２年）、「原住民信託土地法」（３６年）によって全国土の１３％に押し込められたアフリカ地域を白人地域と分離し、独自に発展させようとする「分離発展政策」である。

さらに６０年には「非合法組合法」を制定し、ＡＮＣ（アフリカ人民会議）、ＰＡＣ（パン・アフリカニスト会議）を非合法化した。

７８年、首相の座についたボータは内外の動きに対応するため「全面戦略」を掲げ、アフリカ人に対して「分離発展政策」の堅持、カラード、インド人に対しては白人側に取り込み、改憲して８４年に人種別３院制議會を発足させ、自ら大統領に就任した。

これを契機にアフリカ人を中心とする反政府運動が高まり、８５年に非常事態宣言を発令して弾圧したため、国際社会はそれを非難し経済制裁に踏みきった。

大統領は「離婚禁止法」「背徳法」「パス法」（１６歳以上のアフリカ人に証明書を所持することを義務付け）など、一部のアパルトヘイト法は廃止したが、アフリカ人の参政権、集団地域法、人口登録法など、白人支配存続に必要な法律は依然として残された。

しかしこれらのアパルトヘイト政策も前記した通り、１９９１年６月に全面的に廃止され、アフリカ人の参政権問題だけが未解決である。

黒人たちにとっては、この地は彼等の唯一の祖国であり、他に行く所のないことは明らかである。黒人に対する教育、経済、文化などの水準を高め、アパルトヘイトの残滓を除去して参政権を１日も早く認めるべきだと力説したい。

【住民・社会・経済】

南アは白人４５０万に対し非白人２５００万で、前記した通り白人の占める割合は全体の１５％にすぎない。非白人の中ではアジア系８５万（約３％）、カラード（混血）が２６０万（約１１％）を数えており、アフリカ人は約２０００万で全体の約７０％を占めている。

白人対黒人の比率は１：４で、白人は南アの土地の９０％近くを占有している。

白人ではアフリカーナとイギリス系白人との比率は６対４で、アフリカーナが多数を占めている。アフリカーナはかつてボーア人と呼ばれていた。１７世紀にオランダからケープ州に入植した移民の子孫であり、自らをアフリカーナと称し、アフリカンス語を話している。アフリカンス語はオランダ語の１つの方言で、本国から隔絶した間に変化したものである。

入植初期の苦闘と、イギリスとの「ボーア戦争」に敗北した苦い経験から、アフリカーナは一種のナショナリズムを抱くようになった。さらに「神の真の僕^{スライ}はキリスト教である白人のみで、他の人種は白人に仕えるために存在する」という選民意識につながり、アパルトヘイトという人種隔離政策を打ち出した。アフリカーナは国民党の支持勢力で、政治権力では多数派を構成している。

南アにはまた「カラード」と呼ばれる混血も多い。カラードの先祖はアランダから

の初期の移民と現地の黒人との混血で、少数ながら奴隷として移住していたインドネシア人やマレー人の血も混じっている。

何代も混血を重ねてきたため、肌の色や毛髪は白人と変わらない白い肌や金髪から黒い肌の縮毛まで、身体の形質は複雑である。そのため白人社会に溶け込んでいるカラーードも多いが、ときたま黒人の遺伝的形質が発現して、白人社会から追放される悲劇も生じている。

アジア人はインド、パキスタン、スリランカなどから移住したヒンズー教徒やイスラム教徒で、インド人が最も多い。イギリスの植民地時代に、砂糖キビ畑の労働者として強制的に移住させられた人々の子孫である。

黄色人種の日本人を事実上の白人として処遇する政策は、1930年10月であった。(61年前)しかし、名誉白人の待遇を受けるようになったのは1961年4月である。(30年前)

それは居住地に関する限り、白人なみに扱うという政府の方針によるものである。白人専用レストラン、ホテルの使用が許されているとは云え、法的に身分が保証されている訳ではなく、永住権も与えられていない。

私に言わせれば何が名誉であるかと言いたい。名誉白人とは即ち不名誉ということで、日本人は白人より下等だという意味であり、白人優位の表現にほかならない。

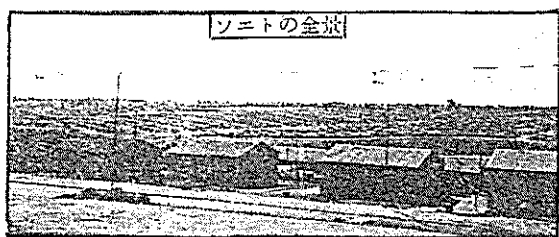
人種差別の代名詞とされる背徳法は、白人と非白人の間の性的関係を禁じた法律だが、その目的は白人人口の純粋を保ち、カラーード人口の増加を防ぐためである。

1970年のパントゥー・ホームランド市民権法は、すべてのアフリカ人に10個のホームランドの何れかに属することを義務付けている。これらはホームランドとして独立しているが、国際的承認は全く得られていない。

アパルトヘイト政策の1つであるパス法は、16歳以上のアフリカ人に出生地、部族名、現住所、写真、指紋、雇い主の署名などの必要事項を備えた、証明書を所持することを義務付けていた。

証明書を不携帯であったり、指定された居住地を無断で離れている場合は身柄を拘束される。従って職を求めて地方から都市へ流入するアフリカ人は、常に危機に置かれていた。若し浮浪者とみなされると修正住民法により、裁判なしに白人農場へ送られ強制労働を課せられた。

ヨハネスブルグ南西の黒人居住区は「ソウェト」と呼ばれている。公称の人口は60万であるが、実態は100万を優に越えている。ヨハネスブルグで働く黒人労働者は、夜間は町に留まることは許されず、毎日ソウェトに帰らなければならない。



ソウェトは人種隔離政策に対する国際的な非難を防ぐための、一種のショーウィンドであると言われている。(上の写真はソウェトの全景)

平均的な居住は、確かに他の都市のスラム的なアフリカ人居住区の水準を超えている。しかし電気、下水のような基本的な都市施設が不十分で快適とはいえない。

アフリカ人は法的に拘束されることが多く、職業確保法によっても白人労働者の領

分を犯さないような下級の労働しか保障されていない。

現在のアフリカ人の教育については、政府は出身部族の文化を尊重するとの名目で、算数や理科の教科書までもズール語やコーサ語など、部族の言葉で印刷している。これもアフリカ人同士を分裂させる意図が隠されているとして、アフリカ人からの反発が多いらしい。

経済面では、南ア共和国はアフリカ大陸最大の工業国であると同時に、豊富な鉱産資源をもっている。特に第2次大戦以来、欧米資本の流入によって工業化が著しく進歩した。

しかし工業化によって恩恵を被っているのは白人である。全人口の15%しか占めていない白人が国民総所得の74%を独占し、人口の70%を占めるアフリカ人は僅か19%を得ているに過ぎない。

鉱産資源は豊富で石油を除く殆どの鉱産物を産出している。特に金生産は全世界の2分の1を占めて第1位である。その他の埋蔵量で世界第1位のもはマンガン、バナジウム、白金、クロムなどの希少金属類、第2位のものに蛭石、ダイヤモンド、ウラン、第3位のものにアンチモン、リン鉱石、チタンなどがある。

これらの鉱産物の生産はイギリス系の鉱業会社によって行われているが、近年は南ア系の会社の比重が増している。

石油はアラブ産油国からの輸出ボイコットを受けたが、政府はその対策として豊富に産出する石炭を液化して石油を得る石炭液化公社の拡張を図るほか、石油のスポット買いによって備蓄を図っている。

農業は白人の商業的大規模経営農業と、ホームランドでのアフリカ人による自給自足農業に分かれている。しかしホームランドでは土地は狭く痩せており、土地に対する人口が高く、自給すらできない状態である。そのため成人男子の多くは鉱山その他に出稼ぎに出て、現金収入によって家計を補っている。

国際収支をみると、金の輸出を除く貿易収支は毎年赤字で、金輸出によって赤字を補填しているのが南アの貿易構造である。

以上、南アフリカ共和国の概要を記述したが、アパルトヘイト政策は法的には撤廃されたとはいえ、多人種性、複合社会性の国家の前途には困難な問題が山積している。南アの黒人たちはアメリカの黒人への憧れが強いと聞いているが、早く自由と参政権が獲得されることを望んでいる。そして白人たちには、満足を知らない禍ほど大きいものはないと忠告しておきたい。

ヨハネスブルグの概要

トランスバール州南部の都市で標高1754mの高台にあり、人口は約180万。そのうちヨーロッパ人は約65万、アフリカ人約100万、カラード約10万、アジア人約5万である。

このほか約200万のアフリカ人が、鉱工業その他の労働者として居住区をもち、近郊の中小都市を加えるとアフリカ大陸最大の都市圏を形成している。

鉄道、道路、航空路の要衝、通信網の中心で、国の行政上の首都プレトリアは北方約60kmと近く、経済的な主都としてあらゆる施設が整い学術・文化の中心でもある。

同市は世界の金生産の中心地として知られ、南アにおける工業の中心地でもあり、鉄鋼、化学、機械、繊維工業などが行われている。特に市の北東にあるダイナマイト工場は世界有数の規模を有している。

元来は樹木の乏しい土地であったが緑化が進められ、現在では鉱工業都市、商業都市としては世界に類のないほど大きな樹木に恵まれた大都市となっている。都市計画が50年の長期的な目標のもとに実施されたからである。

高原のために空気は澄み、ヨーロッパ人の居住に適しているために近代都市として建設したのである。そしてアフリカ人は市の南西にあるソウェトなどの周辺の居住区に、計画的に移住させられている。1976年のソウェト蜂起は有名である。

【歴史】

現在の市域附近から散発的に金が発見され始めたのが1870年代、金鉱の開発が組織的に始まったのが1886年である。その同年の10月にゴールド・ラッシュで集まった人たちが部落をつくった。これがこの町の始まりである。

1892年にはヨハネスブルグとケープタウン、ポート・エリザベス、イースト・ロンドン各港を結ぶ鉄道が完成し、1900年には既に人口10万の都市に膨張していた。(37頁地図参照)

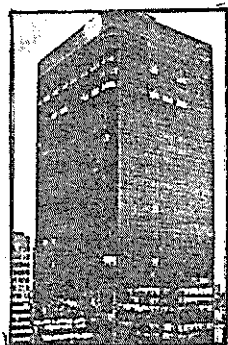
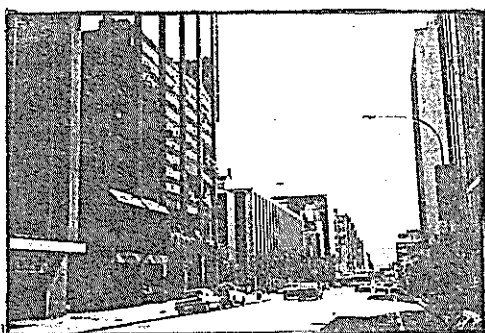
その年に南ア戦争(ボーア戦争)によってイギリスに占領され、1902年に戦争が終わるまで金鉱業は衰退し、それに伴う経済的発展は阻害されのであった。

1904年に中国契約労働者を大量に入れ、金生産が急速に増大すると共に、ヨハネスブルグも都市として整理され始め、1911年にはヨーロッパ人だけで12万人(ケープタウンの4倍)を数える大都市となった。

1920年代からのヨハネスブルグは南ア最大の工業都市の方向に発展し、金への依存度を低くするに到った。そしてヨハネスブルグは「悪魔の都市」とか「金の町」と呼ばれたのである。

第2次大戦後は高層ビルの建設、高速道路の整備など、都市再開発による過密都市としての変貌が凄まじい。

(上の写真は現在のヨハネスブルグ市街風景、下は宿泊したタワーズ・ホテル)



1月2日

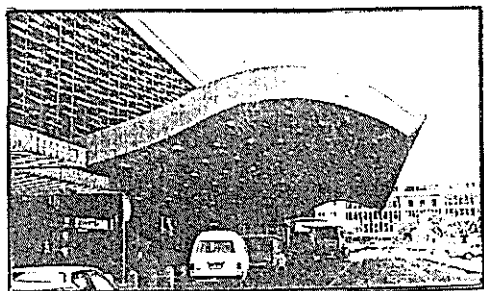
(木) 晴 ブルートレインにてプレトリアへ

1886年の金鉱発見の際につくられた TENT 村は、現在では高層ビルが櫛比林立する経済の中心地となっている。その欧風華麗なヨハネスブルグの第1夜が明けた。

活動開始前の近代都市は未だ静寂に包まれ、コバルト色の空をついて鋭い太陽の光が緑の街路樹を照らし出して行く。

黒人たちの底抜けに明るい笑顔に應えながら朝食のバイキングを終えると、チチハル出身の呉通訳が手を上げて出迎えていた。柔和な微笑を絶やさない彼は本当に好感がもてる人柄である。

一行は南ア共和国が世界に誇る豪華急行列車ブルートレインに乗車するため、8・30にホテルを発った。夢を買うと言われる豪華列車の好奇心は旅心を盛り上げ、親しくなった人たちと同乗するのも運命であり、巡り合せだと私の血管には燃えるものが駆けめぐっていた。(上は中央駅の車寄せ)



白人専用列車のブルートレインは、外観は黄色く中身は白いバナナのような日本人を、名誉白人として乗車を許すのであった。しかし、名誉白人とは要するに白人の下の人間ということで、少々抵抗を感じないわけにはいかない。

一風変わった格好の中央駅の車寄せで下車し駅舎に入った。乗客は閑散として人影は少なく構内の売店も閉鎖の状態で、結構ずくめの宣伝は台無しの感がする。

我々が乗車する列車は音もなく静かに停車した。呉通訳を先頭にして乗り込み、列車の中央にあるラウンジカーに腰を下ろすと、旅人に対する武器は笑顔と挨拶だと車長のエリック氏は、得意になって説明を開始した。(下はラウンジカーの一行)

想像は旅行者の特権だと夢見るように彼の説明に耳を傾けていた。

南アの鉄道の歴史は日本よりも古く、明治元年にはケープタウンを起点に鉄道が敷かれ、内陸部へと拡張されながら国の発展に大きく貢献した。又、南アの隣接諸国も輸出入の大半は南アの国鉄に依存しており、その役割は大きい。

豪華な点では世界のトップに属している国営のこの列車は、その名の如く車体は青い色をしているから、1946年、当時の運輸大臣F、C、スタロックが命名したのであった。

南アの行政上の首都プレトリアから、国内最大の都市で金とダイヤモンドの発掘を中心にして発達したヨハネスブルグを通り、世界的に有名なワインの産地を通過し、西南端にある港町で立法府の首都であるケープタウンを結んでいる。

全長1608m(東京～大阪間の3倍の距離)の幹線ルートを26時間で走るブルートレインは動く豪華ホテルと云われ、世界各地から観光客が一生に一度は乗ってみ



たいとやって来る。(37頁の南ア地図参照)

日本の新幹線のスピードで走れば9時間で行ける距離を、その3倍もかけて走行する列車であるから、速さを競う列車ではない。それでも最高時速110kmを出すことができると思う。

それも時として山間を縫って走るのだから、スピードよりも豪華さとサービスの良さを売りものにしているようである。日本の新幹線は乗って楽しむというよりは、ビジネスをする人のためにスピードを売り物にしているのに対し、これは豪華な設備と食事を楽しむことが主眼で、1日に何本も運行しているわけではない。1週間に僅か2往復である。

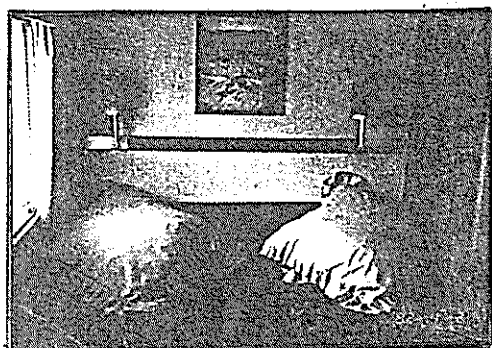
1938年から72年までは英国製のエアコン付きの鋼鉄製寝台車が走っていたが、72年から南ア製のスチールの新車両がとって代わった。

1列車は17両編成で、電気機関車について手荷物車、動力車、厨房車、食堂車、ラウンジカーのほかに11両の客車が付いている。しかも乗客定員は僅か108名であるから、1つの客車に対して10名の割合である。これに対して26名、つまり乗客4人に1人の割合で乗務員がサービスをするのである。

客車内の温度調節、防音、防塵装置は完璧の上に、バック・グラウンド・ミュージックも静かに軽やかに流れる。客室の中にはバスルームがあり、汗を流した後は一流レストランにも負けない料理と、同国自慢のワインに舌鼓を打つことが出来る。食堂車に行かなくとも、列車が発車すると無料でワインのサービスが始まると云う。

客車はA B C Dの4種類に分かれている。Aはベッドが2つある寝室と居間とバスルームの3つの部屋からなっていて、バスルームでは風呂に入れるようになっている。

(右はAのベッドルーム)



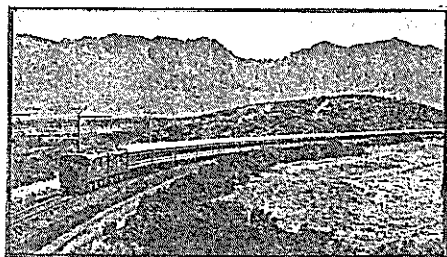
Bは居間とバスルームの2部屋だが、寝る時には乗務員が居間の座席をベッドにしてくれ、バスルームでは風呂に入れる。

Cは居間と専属のバスルームがある。ここには風呂はないがシャワーは浴びられる。

Dは居間の外に共用のシャワーと便所が付いている。料金はA=26万円、B=18万円、C=8万円(W=16万円)、D=6万円(W=12万円)である。

食堂車の収容能力は46人。メニューは大西洋とインド洋でとれた伊勢エビや魚類のほか、常に新鮮な野菜のサラダがあり、快適な乗り心地といい、行き届いたサービスといい、乗客は王侯貴族の扱いを受ける。

夜には靴みがき、洗濯のサービスもあり、乗用車で旅行する人のために、それを積み込む車両まで用意されている。(右はブルートレイン)



以上のような説明が終わって車内の見学に移った。列車は欧州風の旅空間を走り、景色は疾風のように現われて疾風のように去っていった。

車長のエリック氏は金に糸目をつけない贅を尽くした客室を次ぎから次ぎへと案内

した。洗練された格調高い部屋は海内無双と言われる通りで、全く動く豪華ホテルであった。

万金を惜しまずに投じた富貴栄華な設備は舌を巻くばかりで、我々の目を楽しませてくれただけでも御満悦と言わなければならない。しかし旅人を魅了する列車は成金意識が強く感じられ、世の中の動く底の底には経済があることを改めて認識させたのである。

金にものを言わせた豪華絢爛さも目が慣れるにつれて興味は薄れ、移り行く車窓風景の方に心が移った。この国の波乱と変転に満ちた歴史の空間を快走する列車は、我々にも往時の苦難の過去を見詰らせて走るようである。

超閑散の列車の見学が終わって居心地のよいラウンジカーに戻った。毎日が日曜日である私でさえも浮き世を忘れた怠惰な幸せを覚え、死に花を咲かせたような気分を堪能した。

しかし網膜に映る景色は美しさと痛まじさが錯綜しているような感じだ。国際的な視野から見ると最高に贅沢な旅であっても、黒人の生きる道を考えると胸が痛むからである。

通訳の呉氏は右手に見えだした薄黄色の建物を指差し、あれがプレトリア大学だと説明した。アフリカ各地から学生が集って45ヶ国語の講義があり、12万人が勉学に励んでいると云う。そして1週に20時間以上の授業は行わないということであった。

経済大国、飽食大国に躍進した日本の現状から顧みると、金、金、金、と金ばかりを資本と考えるのは最早や古い思想ではないだろうか。今日の最大の資本は知能だとプレトリア大学の諸君に訴えておきたい。

乗車時間は約1時間、垂涎的だったブルートレインはプレトリア駅に到着し、バーガーズ・パーク・ホテルで昼食となる。

プレトリアの概要 (37頁地図参照)

南アフリカ共和国の行政上の首都である。(立法上の首都はケープタウン、司法上の首都はブルームフォンティン) 又、トランスヴァール州の州都で人口は約82万、標高約1500mの高原都市で南緯15°45'の亜熱帯に位置している。

ジャカランダ(薄紫の花が咲く)の美事な並木道や花園と樹木の多い静かな都市で、「バラの町」とも言われる健康地であり、活気と落ち着きのある町である。

市はトランスヴァール共和国(現在の州)初代大統領となったM・W・プレトリウス(ボーア人)によって建設され、ブラッド・リヴァー(血の河)の戦いで有名な息子のアンドレ・プレトリウスの名をとり、プレトリアと名付けられた。

1860年にトランスヴァール共和国の首都となり、1900年のボーア戦争(南ア戦争)ではイギリスに占領された。南アフリカ連邦の成立(1910)後は連邦議会はケープタウンに置かれたが、行政上の首都として発展を続け、都市計画によって今日の繁栄をもたらしている。

プレトリアを語るには、ケープに上陸して大自然の山野を開拓したボーア人(オランダ農民)が、後に来たイギリスに圧迫され、トランスヴァールやナタールに大移動

(グレート・トレック) し、悪戦苦闘の末にトランスヴァール共和国を建国した歴史を知る必要がある。

この歴史に就いては「フォートレッカー・メモリアル」の項に記載する。

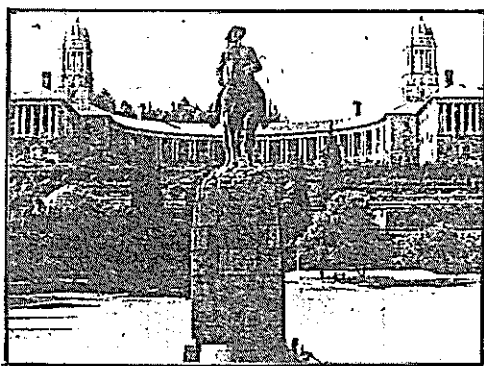
ユニオン・ビル

昼食を済ませた我々はプレトリア大学の前を通過し、ジャカランダの緑の濃い町外れから、市の東にある丘に向かって進んだ。

南アフリカで暑いのは海岸地帯だけで、内陸の高地にあるプレトリアは涼しいと言われている。しかし真冬からきた我々にとっては炎熱という感じであった。

澄み切った青空の下に広がる眠るような静けさの中に、赤茶色の煉瓦で造った壮麗かつ威風堂々としたビルが目飛び込んで来た。

これが南ア共和国行政府のユニオン・ビルディングで、市街を一望のもとに俯瞰する高台に建っている。



1913年に完成した行政府庁舎は市のシンボルであると同時に、市民の憩いの場ともなっていて、色とりどりの花が咲き揃う花壇や噴水が見えていた。

庁舎と道を隔てて段々畑になつている小道を下った。一面の花壇は幸福を誘うように色彩豊かな花でおおわれ、蝶は恋を競うように乱舞して正に楽園の光景である。

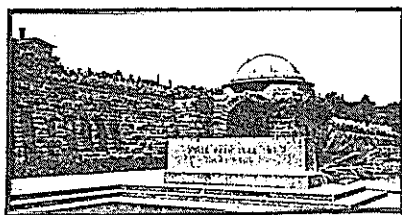
アパルトヘイト法を廃止した今日、再生への霊力を秘めた真の花園であって欲しいと願いながら、さらに下の広場に向かって降りて行った。

広場にはトランスヴァール共和国の開拓者のリーダーの1人で、プレトリアの地名となったアンドレ・プレトリウスの像が立っていた。過ぎ去った苦難を永遠に心に刻み、国家の柱石として胎動の地に立つ彼は、百家争鳴の現状を如何に見ているだろうか。(上の写真はプレトリウス像と行政府ビル)

奴隷制度の遺物のようで時代錯誤のアパルトヘイト支配機構は、彼は夢想だにしなかったことだろう。老子は「物事は極端までいってしまうと流れは逆になる」と述べたが、その通り1985年4月15日、政府は余儀なく廃止を声明したのである。

さらに一段降りた広場には、第2次大戦で連合国側に参加して犠牲となった人達を祀るドーム型の慰霊塔が立ち、さらに下の広場には朝鮮戦争で亡くなった人の小さな慰霊碑も立っていた。

下から見上げるユニオン・ビルは鳳凰が翼を広げたようで、その下一面は花の海に包まれている。果たして行政府は21世紀に向かって何を目指しているのだろうか。政治はスローガンではなく結果が問題である。(上の写真は第2次大戦の慰霊塔)



この国には白人優越の神話があるのかも知れないが、黒人の選挙権、被選挙権は我々の重大な関心事である。「民の口を防ぐのは水を防ぐよりも甚し」という東洋の諺

に耳を傾け、水火の争いを速やかに解消してほしいと念願する。

先住民であるアフリカ人を法制上、外国人化することは許されない。それでは「治人あれども治法なし」、国を治める方法を知らないと言わなければならない。「水清ければ月宿る」というか、行政を司る人の心が正しければ神の加護があるのだと諫言する。

集合時間が切迫し、汗だくで階段を昇って振り返ると、瞰下する市街にはジャカランダの街路樹が延々と伸びている。紫の花をつけた景觀は、さぞかし自由という財産を謳歌する光景だろうと想像していた。

自由のない者の自由を願う「籠鳥雲を恋う」の心は、かつてのボーア開拓民の心に通じるものがある。愚痴だが頑迷固陋を改めて、清濁併せ呑む度量の大きな行政を望んで止まない。

勿論、政治が改革されても、黒人の生活の向上には気の遠くなるような時間がかかるだろう。しかし「有志^{ヨウシ}竟成」（竟=ついに）という後漢書の辞の通り、志のある者は必ず成功するのだと黒人たちに申したい。

赤煉瓦のユニオン・ビルを眺めていると、どのような詭弁を弄しても、どうしても埋められない断層があるように思えるのであった。勿論、その処方箋は簡単でないが、天下を治める根本策は人心の収攬だと進言したいのである。

見晴らしの素晴らしい丘の眺めは私の脳神経に克明に刻まれている。そして南ア問題は、遠い国の人の他人事ではないと感じながら立ち去ったのである。

チャーチ・スクエア

都市計画された美しい市街の中央に、プレトリア市庁舎の高い時計塔が見えてきた。その前に広がるチャーチ広場はジャカランダの樹におおわれ、バスは停車する場所を求めて、幾回となく公園の周囲を回った。（右は市庁舎とチャーチ・スクエア、及びジャカランダの樹）

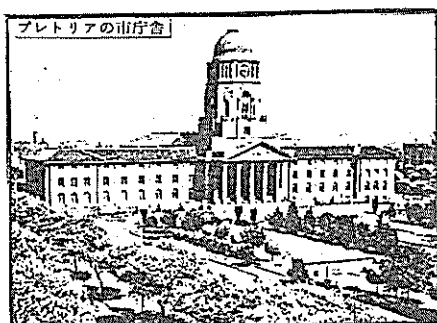
人影のまばらな広場には平和を象徴する鳩が群をなしていた。白人が黒人よりも多いこの街は静まりかえり、公園の中央には精悍な勇者の風格を備えた、クルーガー大統領の銅像が厳然として立っていた。

未来を作り上げようとする人物には、過去を見落^{ミドロク}としてはならないというような表情が表れ、特に優れた容貌^{シヤウバウ}風采は誇り高く、自信に満ちた傲然独特の精神がにじみ出ている。（右の写真）

クルーガー像の立った石塔の四面には4人の護衛兵の座像があり、彼等の顔にも獅子よりも勇敢なボーア人の不撓不屈の魂が見えていた。

クルーガー大統領がロンドンに赴き、トランスヴァール共和国の自由と独立を陳情した時、同行した4人である。

ダイヤモンド鉞区が発見されると富を独占しようとした英国は、



武力を背景にしてトランスヴァールとオレンジ自由国を一方的に併合を宣言した。これに対しボーア人の不満が沸騰し、第1次のボーア戦争となった歴史が私の脳裏に浮び、心を暗くして銅像を眺めていた。

弱肉強食の時代であったとは云え諦観することなく、英国の苛酷な仕打ちに立ち向かった開拓者のボーア人、その中心人物と仰がれるクルーガーは、アフリカーナたちの永遠の心の支えとなるだろう。

然し乍ら、後に発生したアパルトヘイトに対し、クルーガーは何のように思っているだろうか。人種を差別した富の不平等は嫉妬と怨念を生み、そのことがボーア戦争の二の舞になったことを、嘆いているのではないだろうか。

人間は多くの人に支えられて生きている。「遠きを捨てて近きを謀る」というか、将来のことを^{アフリカーナ}蔑ろにして現在のことばかり考える愚を、戒めているようにも見受けられたのである。

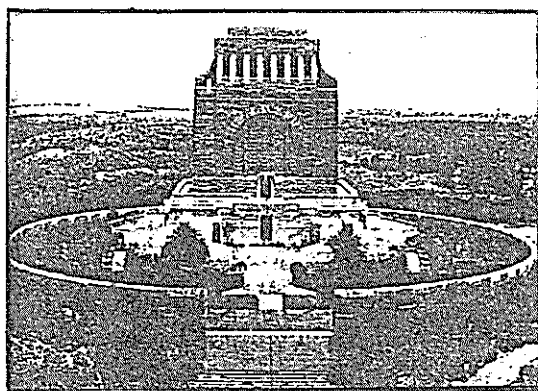
クラシックなチャーチ・スクエアを発ったバスは、街の郊外の丘の上に立っている開拓民の移住幌馬車隊記念堂（フォートレッカ・モニュメント）に向かった。

開拓民記念堂（フォートレッカ・モニュメント）（37頁地図参照）

この記念堂は南アを築いた人達や、その子孫の熱烈な願いによって建設されたものである。

建国モニュメントを建設しようと企画したのは1800年代から既にあったが、世紀末に始まったボーア戦争によって実現しなかった。

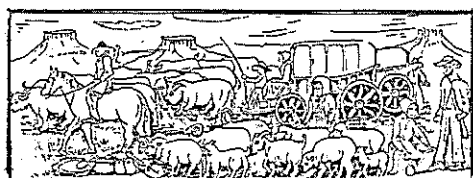
しかもボーア人のトランスヴァールとオレンジ自由共和国は、戦いに敗れて英国の属領となり、アフリカーナ（オランダ移民のボーア人の子孫）たちは貧困



にあえぐ苦しい日々が続いた。（上の写真はフォートレッカー・モニュメント全景）

敗戦の民が漸く痛手から立ち直り始めたとき真先に彼等が考えたことは、建国の英雄達の事跡を記念すべきモニュメントの建設であった。1936年に多くの候補地の中からプレトリアが選ばれた。

大移動（グレイト・トレック）は1838年にそのハイライトを迎え、史上有名なブラッドリバーの戦いもこの年に戦われた。その100年記念として1938年には開拓時代の牛車による旅行が計画された。【上の写真は大移動のレリーフ（記念堂内）】



この計画の当初は極くささやかなものであったが、この計画を伝え聞いたアフリカーナたちは、行列が自分の村や町を通過してほしいと訴えたため、遂に南アフリカ全土を通してプレトリアに達す大牛車旅行となった。

最初の牛車は8月8日にケープタウンを出発し、4ヶ月に亘る長い道程を経て漸く

12月13日にプレトリアノモニュメント丘陵に到着した。諸教会は鐘を馴らし、軍隊は礼砲を発射し、群衆は歓迎の鯨波を上げた。

こうしてブラッドリバー（血の河）の勝利を記念する聖約の祝日12月16日に、何万人ものアフリカーナは記念堂の定礎式を行った。

この当時は南アはまだ英連邦の一員で南ア連邦と称していた。本来ならこのような国家式典では英国国歌を歌わなければならなかったが、彼等はこの機会に国歌自体を変えてしまった。現在の南ア共和国国歌はこの時に制定されたものである。

記念堂の建築は途中に第2次大戦があったこともあり、11年の歳月を要して1949年に完成し、12月16日、この記念堂の世紀の除幕式が挙行された。式典には25万人以上が参列し、当時の白人の約1割が参加したのであった。

このフォートレッカー・モニュメントを理解するためには、ボーアたちの大移動の苦難の歴史を知らなければならない。前もって歴史を知るとは旅の面白さを百倍させるもので、次ぎに簡単ながら歴史を記すことにした。

ボーア農民の大移動の苦難の歴史

1700年代、英国はヨーロッパで非常に力を増して来ていたから、ケープ植民地は是非とも自分のものにしたいと考えていた。

当時は武力のあるものが自分の領土を拡張することが出来た時代であった。

英国はオランダと戦って勝利をおさめ、オランダ人が汗と努力で築き上げたケープ植民地を、1815年に取ってしまった。

オランダ開拓移民のボーア農民は、止むなく大移動（グレート・トレック）を開始した。

ボーアたちは営々と築いた農場、家屋、家具を処分し、手に一巻の聖書

を持ち、大きな荷車に少しばかりの家具や食糧を積み、多数の羊をつれ、荷車を牛に曳かせて東北へと進んで行った。（大移動の光景のレリーフは前頁参照）



彼等開拓民は幾つもの隊に分かれ、それぞれの指導者を選び、妻と子をつれて危険な旅に旅立った。この大移動は何年にもわたって行われたが、最初の隊はルイ・トリハードに率いられて出発した。

この隊はケープ州から道なき道を進んで何ヶ月も旅を続け、プレトリアよりも更に北方まで移動し、そこに文明社会を造ろうとした。しかし、そこにはマラリアと黄熱病とが待ち受け、殆どの者が死んでしまった。

このニュースを聞いてもケープのボーアたちは移動を諦めず、ヘンドリック・ポトヒーターが立ち上がり大きな隊を組んで出発した。何百台の牛車、数百の馬、何万頭の羊を引き連れての大移動であった。その中に後日大統領になったクルーガー少年もいたのである。

ポトヒーターの隊は苦勞を重ねてタバンチュウに到着した。(位置は上の地図参照) 驚いたことにはこの辺に住んでいたバロロン族の酋長モロコは、開拓民を大歓迎してくれたのである。(下の図)

これには理由がある。即ちバロロン族は昔は数多くて幸せに暮らしていたが、マタベレ族という凶暴な種族がきて多くの者は殺され、また奴隷にされてしまったのである。

彼等がポトヒーターのような勇敢で親切な人々を、自分達の守り神のように考えたことも至極もったもなことであった。

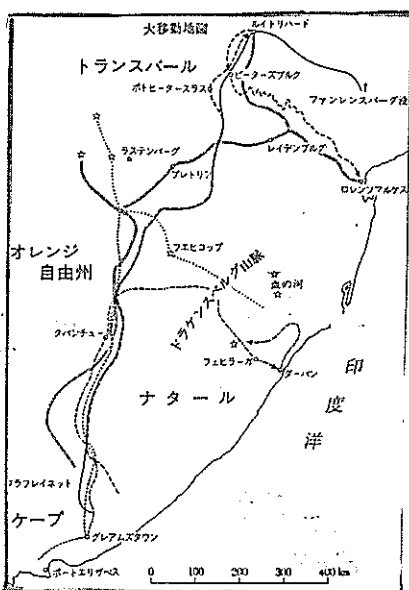
ポトヒーターの分隊がフエヒコップ(戦いの丘と後から付けられた地名)という所に到着した時に、この凶暴なマタベレ族が襲撃してきた。

ポトヒーターは34台の牛車で円陣(ラーガ)を作つて敵の突撃を防いだ。しかし敵は6000人の訓練された戦士であり、開拓民はこのとき殆ど留守をしており、34名の男しかいなかった。

婦人も子供も戦闘に参加して鉄砲に弾丸をつめ、負傷者の手当をし、敵が円陣に迫った時には銃を撃って戦った。少年クルーガーも初めて戦った。そして幸いにもマタベレ族を撃退したのである。

しかし家畜はすべて円陣の外にいたから全部マタベレ族に奪われてしまった。後に残されたのは負傷者だけで食物もなくなった。このときモロコ酋長は牛や食糧を贈り開拓民を救ったのである。(上は円陣を守った婦人立ちの図)

トランスヴァールに平和が訪れて彼等が行った最初のことは、全体の指導者を選び政府を作ったことであった。指導者たちは「聖書の教えに基づいて正義と愛の支配する国造りを行う」ことを誓った。



トランスヴァール地方にできた政府の、最初の最高指導者はピート・レティフが選ばれた。彼はナタール地方（50、51頁地図参照）は草木の茂った豊かな地で港もあり、そこへ移住すべきだと考えた。

ナタール地方には北方からきた凶悪なズル族がおり、ズル族の酋長ディンガンは「白人の住む土地を分譲し共に平和に暮らそう」と、レティフの隊を迎え入れた。契約を結んで土地の一部を開拓民が買い受けることになったのである。

平和共存協定が成立した祝の席で、ディンガン酋長は部下の戦士に命じ、開拓民を襲って大虐殺し、ナタール地方に移動した開拓民は壊滅的な打撃を蒙った。これが「ブラウクランスの虐殺」と呼ばれている。

辛うじて生き残った人々から救援を求められたトランスヴァール（以下トランスバールとする）の開拓民は、1軍の騎馬部隊を組織して報復に立ち上がった。この騎馬部隊は総勢347騎で、ズル族は常に2万を動員できる強力な部隊をもっていた。

結果は衆寡敵せず開拓民の惨敗に終わり、このような凶悪な土人のいるナタールからの引き上げを考えた。その時に立ち上がったのが開拓民の妻たちであった。

彼女等は何の贅沢も求めず、男達の偵察に出かけた留守には、ズル族の襲撃に銃をとって防禦した。夫人たちは意気消沈した夫を励まし、ズル族から買い取った土地を守ろうと決意したため、男達も再び奮い起った。

彼等はケープ州から若い有能な軍人「アンドレ・プレトリアス」を招き、彼等の指導者になってほしいと頼んだ。プレトリアスは若いが非常に軍事的な天分の豊かな人物であった。

彼は先ずコマンドと云う組織作りを始めた。これは一種の騎馬部隊である。駿足による機動性を利用してズル族の大軍に対処しようと考えたのである。しかし何分にもナタール開拓民の数は余りにも少なく、召使達を始め女子供に至るまで牛馬の移動や、鉄砲の弾丸込めなどの仕事を受けもたすことにした。

（コマンドとは突撃隊員、奇襲隊員、或はゲリラ隊員のことを言う）

ナタール開拓民の運命は、今やプレトリアスの双肩にかかっていた。彼が逃げ出せば残りの者はズル族によって抹殺されることは、火を見るより明らかであった。

1838年13月15日、ズル族の大軍の先遣隊が開拓民の小部隊に接触した。プレトリアスはズル族の襲撃に備え、直ちに牛車で円陣（ラーガー）を組むべく適当な場所を捜そうとしたが、ズル族は彼等がラーガーを作る最も適した場所に立っていた。

プレトリアスは野牛の河（バッファローリバー）が深い支流と合流する所、これを自然の障壁として64両の牛車で堅固な円陣を作り始めた。しかし円陣が出来上がる前にズル族の大軍が総攻撃の態勢をとったのであった。

日は没して暗闇となった。夜襲はズル族の最も得意とするところで、開拓民の鉄砲は目標の付けようがなくなった。勇敢なプレトリアスと部下達も全滅を覚悟しなければならなかった。

この時、不思議なことに辺り一面に濃い霧がかかり、殆ど前を見通すことが出来なくなってしまった。ズル族は攻撃に移ることが不可能となり、プレトリアスの方は十分に防禦陣地を構築できたのである。

翌12月16日、遂に決戦の火蓋が切られた。勇敢なズル戦士の大軍は、大波のように小さな陣地に押し寄せた。64両の牛車は何回も怒濤に吞まれたかと思えたが、

攻撃の波が引いた後には依然として頑強に残っていた。

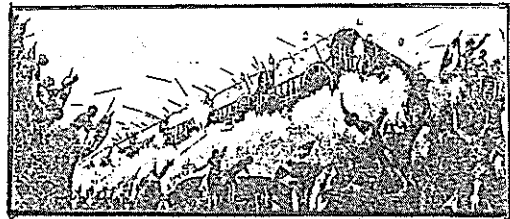
しかも敵が退くと見るや騎馬部隊がラーガーから追撃してこれらを蹴散らした。(右は戦闘のレリーフ)

戦いは何時果てるとも判らなかったが、プレトリアスの巧妙な作戦と開拓民の防戦により、今まで無敵を誇っていたズル軍の精鋭部隊も遂に退却する時がきた。



この戦いのズル部隊の死者は実に3000人と云われ、野牛の河はズル戦士の血で真っ赤に染まる屍山血河であった。

開拓民はここに人間業とは思われない勝利を目にした。そしてこの勝利こそ神の助けによるものと確信して、神に立てた聖約を忠実に実行した。(右は堅固な円陣によって戦ったレリーフ)



1938年以来、12月16日はディンガン(ズル酋長)の日として、アフリカーナの間で厳粛に守られて来た。現在は「聖約の日」として南ア共和国の祝日となり、記念されている。

野牛の河はこの戦いを契機として「血の河」(ブラッドリバーの位置は51頁地図参照)と呼ばれるようになった。

長い年月、人と人との殺し合いに明け暮れてきた暗黒大陸南部に、平和が訪れるようになった。プレトリアにあるフォートレッカー記念堂(モニュメント)は、この大移動の歴史を壁面に伝え、血の河で戦った64両の牛車が作られている。

(この項のレリーフの挿絵は記念堂内部のものである)

南アの白人たちが黒人たちに抱く憎しみは、このズル族との戦いによって激しくなり、今日まで尾を引いていることは誠に残念でならない。

ディンガン酋長の敗北によりナタールの地に平和が到来した。開拓民はナタール共和国を築いて独立の小国家が発足した。しかし、それも東の間であった。

ケープの英国政府は自分たちの失ったものが、如何に大きなもの出あるかに気が付いたのである。強欲なケープ政府は軍隊をお送り、ナタールを英国の保護領にすると宣言した。その理由は驚く勿れ「原住民ズル族の保護」であった。

開拓民は随所で抵抗を試みたが相手の英国は余りにも強大で、武力で英軍を撃退することは到底不可能であった。

英国政府は「開拓民たちはケープ州の英国政府の支配地の人民であり、従って英国政府に楯つくことは許されない。今後ナタールの農民は英国国王陛下の命令に従わねばならない」と命令したのであった。

豊かなケープの農場を捨て、苦しい牛車の旅の果てに多くの者は病に倒れ、蛮族に殺されて親兄弟を失い、漸く獲得した独立を無法にも英国に奪い取られてしまった。

一旦独立をあきらめ英国民としてナター州で農園を盛んにし、生活の安定と家族の繁栄を図ろうと考えるのが普通である。しかし彼等開拓民の妻達は生活の安定を第1目標としなかった。

夫人達は英国の行政官に対し「私達は決して英国国旗に膝を屈することはない」と宣言した。その時、行政官は開拓民を百姓ども（ボーア達）が何を言うかと冷笑した。ボーアとは農民という意味であり、英国人は彼等開拓民を見下げてボーアと言ったのである。

しかし開拓民は農業こそ神の授けた天職だと、誇りをもって自分たちをボーアと呼んだ。その後、彼等はボーア人とも称されるようになり、現在では彼等の子孫がアフリカーンス語を話すから、アフリカーナーと呼ばれている。

このボーア開拓民は自分たちの宣言を直ちに実行に移した。ナタールの農場を捨て、嘗て来た険しいドラケンスベルグ山脈（51頁地図参照）を越え、トランスバール（バール河の彼方の地の意）やオレンジ自由州へと独立を求める旅を、再開したのであった。（右の写真）

トランスバールに残っていた開拓民はナタールからの引揚者を暖かく迎え、力を合わせて国造りに励んだ。



しかしこの時すでに英国の魔手は南アの奥地まで伸びており、現在のオレンジ自由州を英国領に併合してしまった。これを阻止するため、ブラッドリバーの勇者プレトリアスは農民騎馬部隊を率いて英軍と戦ったが、新兵器で武装した英軍の精鋭軍の前にあえなく敗れてしまった。

英国の次ぎの狙いは明らかにトランスバールの奪取である。ここを英国の武力で抑えられてしまったら、開拓民の今までの努力はすべて水泡に帰したであろう。そしてトランスバールの運命はまさに風前の灯であった。

この時まことに皮肉なことに、ケープに隣接する原住民が英国政府に対して反乱を起したのである。これは「英国が保護してやる」という名分で英国領にされた住民の反乱であった。この大地域の反乱を武力で鎮圧することはケープ駐在の英軍では足らず、英軍は土人部隊に度々苦杯を飲まされた。

若しここでトランスバールの開拓民からも攻撃を受ければ、英軍は大打撃を蒙ると判断した英政府は、開拓民の国を認める方が賢明だと決意した。こうしてトランスバールの開拓民社会は、英国によって正式に共和国として認められることになった。

時は1852年、実に十数年に亘る苦難の末、大移動した農民達は遂にトランスバール共和国を樹立し、英国の認知を受けて独立国となったのである。

この2年後にはオレンジ自由州も独立を遂げ、ここに南部アフリカに2共和国が誕生し、自由と独立を求める人類の歴史に一頁を加えることになった。

その後、ダイヤモンドや金鉱の発見から2次に及ぶボーア戦争（南ア戦争）となったが、これらの歴史は「38頁に記述済」であり重複を避けたい。

世界の歴史を回顧すると「春秋に義戦なし」と謂れた通りだ。古今東西を問わず勝てば官軍、正義の数は国家の数、否その何百倍もあるのかも知れない。

開拓民記念堂の見学 (ファートレッカ・モニュメント)

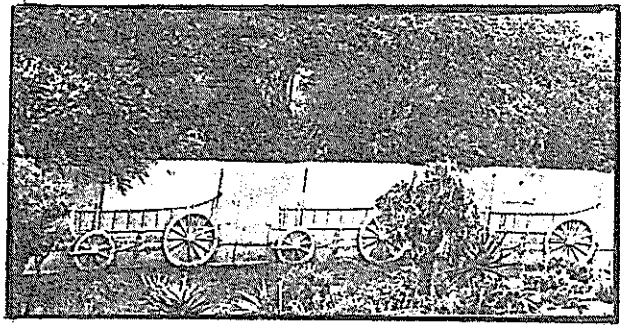
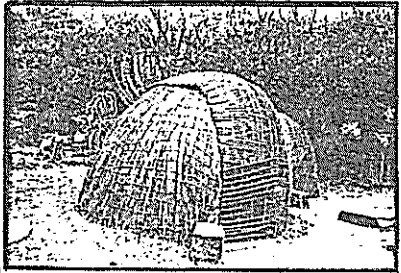
呉通訳に引率された一行のバスはモニュメント丘陵の山脚で停車し、先ず案内した所は「ズル族」の住居跡であった。(右の写真、多分模型であろう)

ズル族は前記した歴史の通り、ナタールに移動した開拓民が、最初に潰滅的な打撃を蒙った凶悪な部族である。

ズル族と戦った「ブrou克蘭スの虐殺」(52頁)や「ブラッド・リバーの戦闘」(52、53頁)など、祖先の建国の辛苦を忍ぶため、丘陵の山脚の一角に設けたのであろう。

丘の山麓を回ってモニュメント正面に移動し、幅の広い石段を登って左右に目を移すと、記念堂の丘が大囲壁で囲まれているのが見えていた。

その囲壁の内側にはブラッド・リバーの戦いで、64両の牛車の円陣を作って防戦した状況が描かれていた(右の写真はその一部)

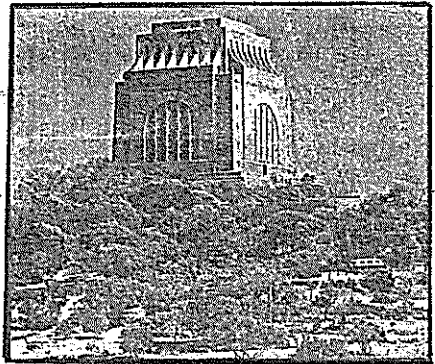


この牛車の円陣を眺めると死臭が漂い、胸がえぐられる思いがする。私が戦袍に身を包んだ戦場が彷彿と浮かび、感懐が心中に去来して百鳥の悲鳴を聴くような錯覚に陥った。

色を失いかけた紫陽花が路傍に咲く中を上に向かって歩いた。首都の街プレトリアを眼下に見おろす丘に立つ白亜の殿堂は、アフリカーナ達にとっては最大の聖地であり、精神の拠所である。

(右の写真は高く聳えた記念堂のドーム)

襟を正して殿堂内に静々と歩を運んだ。内部の壁面には南アの苦難の歴史を物語るレリーフが彫まれている。



18世紀から19世紀にかけて戦ったズル族との凄惨な死闘図は自然に私を誘い込み、阿鼻叫喚、悲鳴の絶叫に包まれたような感じを抱いて、急ぎ脚で一巡して回った。これらの胸を詰まらせ表情を引き締めたレリーフは、前記した歴史の中に挿絵した。

描かれた忍苦の1こま1こまを眺めるアフリカーナの子孫達は、父祖の血を流した歴史を痛憤の思いで見ることだろう。しかし、それが人種差別に発展したことを考えると、この問題の「業」の深さに慄然とさせられるのであった。

我々の立った水平面からは良く見えないが、殿堂の中央の床には長方形の大理石があり、南アフリカ公用語のアフリカーンス語で「我々は南アフリカのために・・・」の文字が、刻まれていると説明された。

ドームには階段が設けられて上から堂内を見下ろすようになっており、重い脚を引きずりながら登りつめた。階下中央の床に置かれた大理石は真下に見える。

「1949年12月16日正午」、時のマラン首相が記念堂の開扉のサインを出すと、南アの少年少女の代表が聖堂に入場した。この時、真夏の太陽の光は堂の頂上から射し込み、一階に安置された「我々は南アフリカのために・・・」と刻んだ石板を照らしたのである。

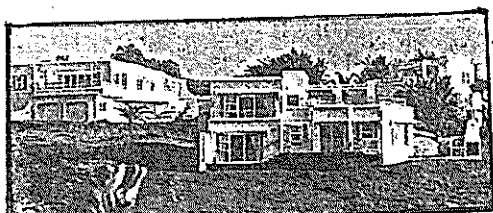
全国から馳せ参じたアフリカーナによって行われる記念行事の12月16日正午、毎年、太陽光線はこの石板を照らし、その時刻に堂の扉が開いて聖約の式典が終わる。このことを聴くと、正にイスラエル（エルサレム）の「嘆きの壁」と同じであった。

感銘一入といった感じで記念堂を後にした。しかし日本という国は、国のために命を捧げた人々に対し如何であるかと、断腸の思いがするのであった。

南アの防衛力

フォートレッカー記念堂（フォートレッカーとはボーアの開拓者の意）を去り、五葉松やナツメヤシ、それにブーゲンビリアの花盛りに見惚れながら高速道路に入った。

この沿道にも白人の高級住宅が広大な土地に連なっている。そしてトヨタ自動車工場の大看板が網膜を刺激してくると、私は無力ながら国威の大なるに微笑みを感じたのである。



トヨタ工場横の南ア陸軍の兵舎と空軍基地が目に入った。南アの防衛力は西ヨーロッパ並みに近代化され、アフリカの中では最強である。（上の写真は白人高級住宅）

軍は陸軍、海軍、空軍、医療軍の4軍から成り、常備兵力は8万強、うち志願将兵は約3万、残りは徴兵である。これに予備役を加えると動員力は40万強と云う。

1962年11月、国連が南アに対しアパルトヘイトを理由に、加盟各国に武器弾薬等の輸出禁止勧告を決定したため、それ以来兵器弾薬その他の自給体制を整えた。

戦闘機、ヘリコプター、戦車、野砲、各種銃火器、艦艇などは自国で製造、殊に15ミリ野砲は世界的に類のない高性能と評価されている。これらの高性能戦車や砲及び潜水艦は輸出され、消息筋では金について第2番目の輸出品目と云うことである。

白人男子は17歳に達すると徴兵に応ずる義務があり、混血、アジア系及び黒人には義務はない。しかし志願して軍に入ることは可能である。

1950年に朝鮮戦争が勃発して国連軍が派遣されたとき、南アは空軍部隊を送って韓国の防衛に協力した。この時の将兵は第2次大戦の経験豊かな空軍であった。

尚、南アは原子力兵器を持っていると見る人が多いようである。それはイスラエル、台湾との密接な協力関係を考えれば、その可能性は否定できない。

南アフリカはオーストラリア、カナダと共に三大ウラン生産国である上に、ケープタウンの北には原子力発電所も稼働し、ウラン濃縮技術を持っているから、原子力兵器の原料や技術を外国に依存する必要がない。

国際社会から爪はじきされることは、遂にその国を自ら強くさせ、核兵器を保有させることになるのは理の当然で、南アは其の好例だと言えるだろう。

ゴールド・リーフ・シティー

若い人たちのバスの旅は終始心が弾み、高速道路を走ること1時間も束の間であった。ヨキネスブルグに入ると急にボタ山が多く見えてきた。金鉱採掘の残滓であるボタ山はプラトニウムが埋蔵され、今では貴重な資源となっている。

(右の写真はボタ山とヨハネスブルグ市街)

ボタ山を眺めているうちにバスはゴールド・リーフ・シティーに到着した。新春は実に縁起が良い。元旦はリビングストーンで猿の訪問を受け、正月2日の今日は金山の見学だ。

ここは1886年、金鉱が発見され18世紀後半から20世紀前半にかけて、ゴールドラッシュに沸き返った当時を、歴史の町として再現したものであった。当初のテント村が大近代都市に発展したヨハネスブルグは、百周年を記念して1986年にオープンしている。

先ず目に付くのは高く聳えた坑道の櫓で、ゲートにくぐると遊園地があり、若い日本人の母親が可愛い女の子をつれて遊んでいた。ヨハネスブルグに駐在する日本人は約700人、日本人学校も開設されていると言われている。

シティー内には玩具のような汽車、ジェットコースター、馬車、売店、レストラン、劇場、再現した100年前の町並み、地下坑道、金の延べ棒ショーなどの施設が軒を並べていた。

最初に坑道を案内され、白人達と混じってカンテラにヘルメットを装備して、地下220mまで一気に鉱夫用エレベーターで降下した。

この坑道は実際に使用していた金鉱跡を観光用に整備したものだが、着いた坑道は採掘現場のような臨場感が溢れていた。(右は見学する観光客とガイド)

横に延びるメイン坑道には幾つものサブ坑道があり、サブ坑道では本物の黒人が暗闇の中で、ドリルを使って採掘の状況を観光客に見せていた。

トロツコの線路道を奥に進むと「徳政仙山」と書いた漢字の看板が目に入った。これは1904年に中国人労働者を大量に雇用した時の古いものである。(右はその看板、54頁の記事参照)

鉱夫は各国から集まって来たために各種の言葉が使われたと、中国の看板の隣に図示されていた。

駆り立てられた黒人労働者たちは、日光や新鮮な空気が不足する中で働かされ、さぞかし体の老化が加速して精神力も減退したことだろう。無告な彼等が膏血をしばられた息遣いが、伝わってくるようである。

ボロをまとって痩せ細った人達が、憔悴した顔にくっきりと苦悶の表情をにじませ、じっと生命の終りを待っていたことだろうと、江戸時代の佐渡金山の無言の地獄図を思い出したのである。



黒人のズル族に対する怨念を晴らすため、白人はモニュメントの丘に記念堂を建立したが、この酸鼻を極めた坑道の桎梏に対し、黒人たちは運命を主宰するのは天だと諦めるより手がなかつたのであろう。

坑道を出た一行は慌てて「金の延べ棒ショー」の建物の中に押し込まれ、階段教室のようになった座席に腰を下ろした。

いよいよ金の冶金の説明が英語でスピーチされたが聞き取れない。ドロドロになった金を



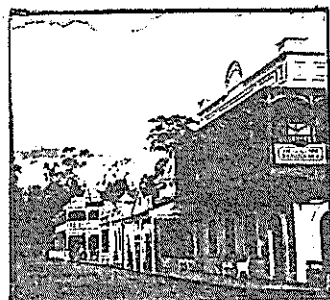
を鑄型に流し込み、純金が作られる課程は初めて見る光景で珍しい。原石1トンから生産されるゴールドは4gと云うから、高価なものだと理解できる。(上は白衣の説明者と、彼の左手の下が金の延べ棒)

金の魅力は永遠のもの、このような美しいものを人々は忘れることはないだろう。しかし輝くものは凡て金とは限らず、常に外観によって判断すべきではない。

又、「金があれば馬鹿も旦那」と云われているが、自分の生命よりも金にガツガツしているのを見ると、浅ましい気がしてならない。人間万事金の世の中であってはずらず、金がものを言う時は真理が黙り込むことを忘れてはならないのだ。

冶金のプロセスの見学が終わって外に出ると、隣の建物では驚く勿れ、ズル族の踊りのショーが催されているではないか。犬猿の仲の同士が隣り合わせとは？

最後の見学は、颯爽と登場した金鉱発見によって栄えた当時を復元した町並みであった。その中を走る馬車やSLはゴールドラッシュに湧いた町にタイムスリップしたような感じがしていた。



しかし復元した街並みも白人の町であった。贅沢三昧の豪広華麗な家屋もまた搾取の結果で、目には見えないが心では見えるのだと刮目して通り去った。(上の写真はゴールドラッシュ時代の復元した街並み)

漸くゴールド・リーフ・シティの見学が終了し、一直線に延びる道路を市内へと疾走した。輝くばかりの夕焼けが右手の稜線にくっきりと浮かび上がり、国際色の豊かな街の灯は煌々と輝いていた。

ソウェト蜂起

ヨハネスブルグを訪ねる外国人は、義務感を持ったように必ずソウェトを見学する。我々は12月29日の飛行機の延着が祟り、その夢は叶えられなかった。アパルトヘイトを理解するために一項を設けて記述することにした。

1976年のソウェト蜂起は何が原因で惹起したのであろうか。ソウェトはヨハネスブルグ西南約6kmにある南ア最大の黒人居住地区である。85平方kmの広大な地域は野菜も成育しない不毛の地で、26に区分されて約250万人が住んでいる。

バンツール教育法に基づいて白人政府は、同化政策の一環としてソウェト内の高校にアフリカーンス語(アフリカーナの使用語)を正課とするように命じた。

黒人意識運動の強い影響を受け、黒人としての自覚が高まっていた高校生は、この

指令は黒人を白人社会に隷属奉仕させようとする魂胆が明らかだとして、授業をボイコット、一斉にストライキを打って出た。

もともとサークル活動から発展した組織で、アフリカ学生運動を主体とする高校生の動きに対して、日頃、白人社会に対する鬱憤をつのらせていた黒人の大人たちが、これに同調して騒ぎが大きくなり、やがて白人警察が介入するに及んでソウェトは騒乱状態に陥った。

瞬く間に騒乱は、ソウェトからケープタウンを始めとする他の都市にも波及した。ソウェトの蜂起は鎮圧されたが死者は575名に及び、うち451名が警察の直接介入によって死亡したと云われている。

蜂起の犠牲者には小、中学生を含む未成年者が圧倒的に多かっただけに、南アフリカ白人政府は全世界の激しい怒りと憎悪を買った。

危機感をもった政府は1977年9月、学生運動のリーダーの「ビーコ」を公安警察に連行して拷問殴打のすえ、6日後の9月12日にビーコは死んでしまった。

ビーコが殺されたという衝撃的な電波が流れると、彼の死を悼む声が全世界に渦巻いた。ビーコが築き上げた黒人意識革命の精神は、次々と受け継がれて非合法すれすれの線で抵抗が続いた。

1975年にアンゴラとモザンビークが、1980年にはジンバブエが、それぞれ白人支配から脱して独立した。周辺の黒人国家からと国際世論の圧力も加わり、南アフリカの白人政府は次第に孤立感を深めていった。

1984年9月、白人政府はアパルトヘイト政策を、段階的に改善緩和して国際的な集中非難をかわすため新憲法を公布し、カラード（白人との混血）とインド系南アフリカ人にも、部分的に参政権を認める人種別3院議会を発足させた。

だが政権から締め出された黒人の反発は凄まじく、南アフリカは再び騒乱状態に陥り、86年6月に白人政府は2回目の非常事態宣言かを全土に布告した。

口には出せない不満が内向して鬱積した憤懣が沸騰したソウェト動乱、彼等は牧者を失った羊のように弱くなかったと、当時の私は感じ取っていたのである。

この紀行文のワープロを叩き終わった時、デクラーク現大統領の進めてきたアパルトヘイト廃止政策が、選挙の結果は大差で支持されたことは喜ばしい。しかし依然として白人対白人組織の葛藤、特に黒人間の部族対立は激しく、選挙期間中（白人のみの選挙）も多くの死傷者が続出している。

黒人抗争の続発は暫定政府への黒人閣僚入り、黒人参政権を盛り込む新憲法制定など、「言葉」は先行するが、具体案が出てこないことへの黒人の焦燥感、将来の権力配分をめぐる部族間の思惑が背景にあるようだ。

これから「同心治理」という東洋の言葉のように、心を合わせて白人と黒人との共存を図るため、黒人参加の政権の移行、新憲法策定に全力をあげて欲しいものである。

1月3日 (金) 晴 ヨハネスブルグ~ケープタウン

(主要各所の位置は地図の①②③などの数字を付す)

ヨハネスブルグのホテルの朝食のバイキングでは、愛想のよい黒人コックが「有難う」と声を掛けていたのは印象的である。日本人観光客の極めて少ない遠い国では実に珍しいことだ。

食後、ホテルに隣接した市の中心街に散策し、ウインドショッピングしながらオフィスや商店街、官公庁を写真に収め、南ア最大の街とも名残を惜しむことになった。

10・30にヤン・スマッツ空港を離陸した搭乗機は一路ケープタウンを目指した。南下するにつれて地形は変化し、白色の禿山が連なる一方には鏡のような湖水が陽光を反射し、整然と区画整理された耕地も延々と広がっていた。

天上に遊ぶような気分で飛行すること2時間、真っ白い砂浜の向こうに見えた大西洋を瞰下して、①ケープタウンのマラン空港に降り立った。

3方を丘で囲まれた一帯は緑が多く、北部地方では眼にすることのできない景観である。1652年、オランダのリベックが建設した南アの発祥の地、マザーシティーと呼ばれる地に立つた感懐は晴れやかだ。

出迎えた日本人女性通訳「桂子さん」(主人は外国人)の挨拶を受け、坂の多い街の高速道路を疾駆して市街地に向かった。沿道には港町特有の開放的な雰囲気が漂い、美しい海岸線の高台を別荘風の白亜の建物が埋めている。

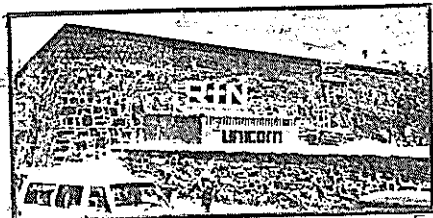
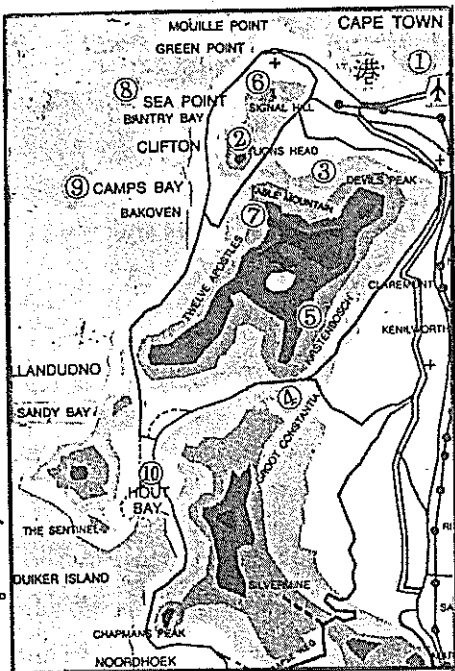
世界で最も美しい港の一つと云われる港灣には、大小の船舶が勝手な方向に向かって停泊し、地中海のコートダジュールに來たような錯覚に取り付かれた。

テキパキと明るい声で説明する彼女は②「ライオンズヘッド」を指差した。写真で拝見した通りのライオンの頭部のように、一方の海面には白い泡沫の帯を引いたモーターボートが快走し、心身ともに充電される心地である。(上は②のライオンズヘッド)

風のない湖水のように穏やかな海を眺めて市街に差し掛かると牙城のような「城砦」が眼前を塞いだ。(右の写真は城砦)

函館の五稜郭に似た城砦は、オランダが植民地を建設した1666年に起工したもので、現在は南アの国防省になっている。

風の吹き止んだ後のように回転していない風車が見えてきた。城砦と云い風車を問



わず、300年前の遺物が厳然として遺っている。一体これを何と表現したら良いのだろうか。未だに日本の過去に謝罪を要求する資格があるのかと問いたい気がする。

バーナド博士が世界で最初に脳移植をしたと云われる病院を通過し、バスは古色蒼然とした教会前の広場で停車した。その公園の中央に誇らしげに立つエドワード7世(英)の銅像、黒人たちの目には海賊のように映っていることだろう。

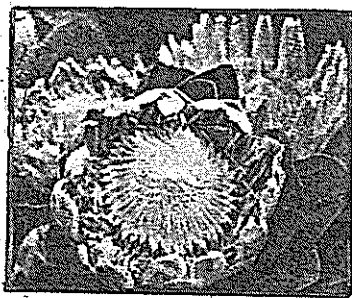
一行は洗練された格調高い③ケープ・サン・ホテル(5つ星)に旅装を解く暇もなく、船員の姿も見掛ける海岸道路を走って台湾楼で昼食となった。(右はエドワード7世像)



久しぶりの感じがする中華料理は「往生安楽、一生食楽」と云うか、往生すれば安楽だが、生きている間は食べる事が楽しみだと、舌鼓を打った。

34度の暑さが重い帳のように覆った市街を走ると、そこには美意識が息づくようにホテル、銀行、商社、ショッピングセンターなどの高層ビルが林立し、山手に通じる街道には向日葵の黄色い熱線が揺れていた。

その向こうに白亜のケープダッチハウス(ケープオランダ風)の農家が点在し、牧歌的な葡萄園が一面に広がっている。その中に咲き乱れる花は独特の文化や風俗を培ってきたようで、何時まで眺めていても飽きることはない。



これらの花の圧巻は何といっても南ア共和国の「国花」「プロテア」である。一見ハスの花に似ており、大きいものは直径30cmもあるらしい。(上の写真は「国花」のプロテアの花)

東洋では蓮の花は信義を重んじる人を表わすのに用いている。それは泥中から出てきても少しも汚れないからだ。南アも肌の色を差別することなく、人間の尊厳が尊重される平和な国になるように願って止まない。

バスは周囲を白い塀で囲んだ工場のような所に停車した。白亜の異様な形をした建築が敷地一杯に堂々と並び、別世界に足を踏み入れたような感じを受け、「まつろわぬ者は平らげるぞ」と叫ぶように、睥睨して建っていた。ここが④「グルート・コンスタンティア」のワインランドであった。(右はワインランドの一部)



ステレンボッシュはケープワインの3大名家の1つで、ワインの町として有名だが南アでも歴史の古い所である。

この地一帯は初期のオランダ開拓農民が定着を始めた歴史的な町であり、その後、フランス人のワイン技術者の指導のもとに発展し、現在ではケープワインとして世界にその名声を博している。

6000年前にエジプトで開発されたワインは、今や南アフリカ大陸の南端の地まで普及し、ミネラルウォーターの半分の値段で飲まれていると云うから驚きだ。

オランダ風の建物の中にはワイン製造の各種機械の外、中国の陶磁器や古伊万里といった東洋の工芸品まで展示され、オランダやイギリスの海運国として発展した歴史

的遺産に眼を光らせていた。

一通りの見学が終了した後はワインの無料サービスとなったが、左党でない私には関心はなく、白人に対してニヤッと笑顔を向けたが微笑は返ってこない。矢張り黄色人種を今でも一段下に見なしているのであろうか。不愉快を感じて立ち去った。

ワイン工場を後にしてケープタウンの市街に引き返す途中、桂子通訳の好意によって⑤「カーステレンボッシュ植物園」に立ち寄った。広大な面積の植物園の見学は、たっぷり1日を要するらしく、我々は極く一部を眺めて全体を想像していた。

4000種類といわれる植物園の中を暑さに首を垂れながら散策した。初めて目にしたシルバツリー、彩り鮮やかに咲き競う顕花植物は我々の目を保養させ、文化の花が開いたようなプロテアの容姿は一大奇観であった。

1週間にわたってアフリカ南部の旅を続けたが、ここで初めて重なり合った植物の精気に打たれ感じがする。しかし樹木の繁茂する間に生き生きととして開く高貴な花の名は知らず、文章に表現できないことは誠に口惜しいと言わねばならない。

慌ただしいケープタウンの半日観光（昼間）は終わり、世俗から離れて超然と暮らす白人住宅を眺めながら、閑閑な緑の丘を抜けて中心街へと進んだ。痛烈な非難だが、目に見えないアパルトヘイトの空気を除けば実に平和で静かな世界である。

桂子通訳の説明が車中で続いた。ヨハネスブルグの混血70%、白人14%に対し、ケープタウンはケープカラードが圧倒的に多く、カラード70%、白人20%、黒人10%という人種構成である。

又、市街地にはアフリカーナ（オランダ移民の子孫）は極く僅かで、イギリス系が断然多いという。2回のボーア戦争で勝利したイギリスの領有化の結果であろう。そして在留邦人は45名というから、余りに少ないのに驚くばかりであった。

イスラムのモスクも見えていたから南アにもアラブ人も居住し、ケープタウンに寄港する外国船は年間12,000隻、日本船は約500隻だという。

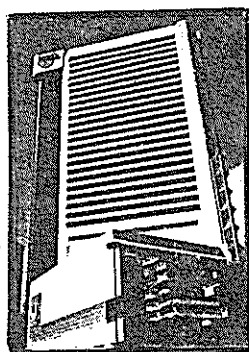
特に予想に反したことは、夜間の外出は危険であり、タクシの運転手も信用できないと注意されたことであった。港町の通弊で治安が悪いのか、それとも成り金の日本人が第1番に狙われるのであろうか。南アよ！平和の戦いに勝利するような国になって欲しいものである。

続く説明によると教育制度も白人と黒人は差別されている。黒人は小学7年、中学5年、大学3～4年で総てが有料である。一方の白人は小学5年、中・高は各5年、大学3年、大学以外は無料というから、教育でも大きな差別がある。

子供は国の宝、教育こそ国家の盛衰の鍵、黒人を育てるためにも直ちに是正すべきだと苦言を申し述べたい。

バスは国際色豊かな中心部に入った。英国式の2階建バスやベンツなどの高級車に混り、オープン・スポーツカーがフルスピードで飛ばし、ビルの背後にケープのシンボル「テーブルマウンテン」がくっきりと姿を表わした。

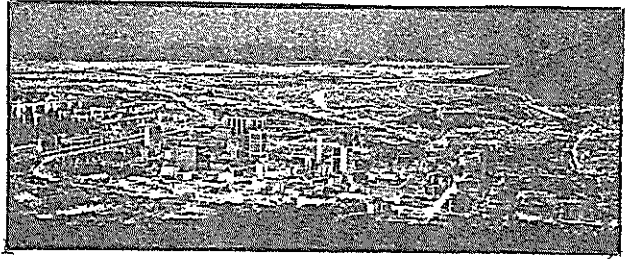
ホテルに到着して30階建のホテルの窓から眺めるテーブルマウンテンは遮るものはなく、明日の快晴に期待を掛けながら外食となり、レストラン・ラベラルでシーフードの夕食を摂り、夜の百万ドル夜景の見学に備えたのである。（右は宿泊ホテル）



百万ドルの夜景

18・30にホテルを発つてシグナルヒルの夜景の見学に向かうことになった。

心の落ち着く夕暮の海岸は落日の荘厳さを揺曳させ、海の彼方に陽は沈んで空は束の間に燃え、やがて急速に輝きを失っていく。



バスが⑧シグナルヒル（標高350m）の屈曲した急な坂道をゆっくりと登るにつれて、西の空は見事な茜色に変化した。それがバラ色に染まって白、朱色、オレンジ色、赤、ピンク、サファイア色になっていく眺めは実に素晴らしい。

水平線のくっきりとした淡い光は、僅かに湾曲した地球の円みを実感させている。視界を遮る丘の大樹は影となって浮かび上がり、丘も木も草も肅然として夜の底に沈んで行く。

バスは停車した。俯瞰する下界に広がるケープタウンの町は、煌々として輝くダイヤモンドやルビー、パールを敷きつめたようで、我々の目を弥が上にも楽しませてくれる夜景であった。

左方のベイの近くの灯は橙色、右手にある山手の住宅地は白と青色と段々に色がかわっている。特にベイの橙色の灯は真っ黒な海面に二重三重に映り、燃えるように見えていた。

天から降ったか地から湧いたかと思わせる美景は、我々に幸福を約束する永遠の喜びのようである。（上の写真の下部の黒い部分は海岸、白い部分は電灯の照明）

光輝く夜景の彼方の海上に、微かに光を放った1隻の舟が見える。一方、無数の銀粉をばらまいたような夜空には、遊星群を引きずるように南十字星が浮かんでいた。

涼しい風を浴びながら沢山の人が夜景に酔った光景は、美は憤怒を和らげるとでも云うのであろうか。旅は人生の宝物である云った感じがするのであった。

桂子通訳の説明によると、ケープの町は日役と共にホワイト・イルミネーションが灯り、クリスマス気分を延長して正月を盛り上げている。だから今の時期の夜景は年中で最も美しいと云うことである。

強行軍であったケープ観光の第1日目は慌ただしく終わり、美を感じる能力を人間に与えてくれた喜びを味わいながら、夜の沈々静々と更けていく中を丘を下った。

ケープタウンの概要

南アフリカ共和国の立法上の首都であり、ケープ州の州都でもある港湾都市である。住民の40%はヨーロッパ人でアジア系のケープ・カラード（混血）も多く、人口約120万のヨハネスブルグに次ぐ大都市である。

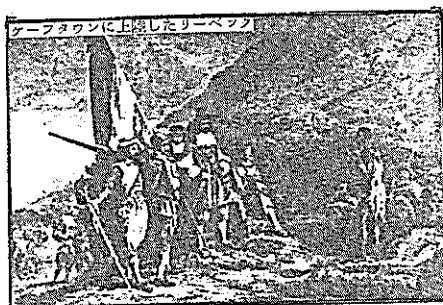
大西洋とインド洋の境界をなす喜望峰の基部に位置し、テーブル・マウンテン（1086）の麓に広がり、世界で最も美しい天然の良港といわれるテーブル湾に面している。

1488年、バルトロメウ・ディアスが最初のヨーロッパ人として来航して以来、テーブル湾はインドや東南アジア、東アジアに航行する船舶の重要な寄港地となった。

17世紀に海運国として発展していたオランダは1652年、オランダ東インド会社の補給基地を建設するため、東インド会社に勤務していた外科医ヤン・ファン・リベックを総督として派遣し、この地にオランダ人の植民地を開き、城砦を築いて港湾施設を整えた。

このためマザーシティとも呼ばれ、南アフリカの発祥の地である。

(右はケープに上陸したリベックの図)



その後、東インド会社は社員の一部を解雇して農業を営ませ、また労働力としてジャワ（現インドネシア）方面から奴隷を輸入して白人入植社会を形成していった。

さらに本国からの移民を奨励し、17世紀末には多数の新教徒（プロテスタント）が移住した。ケープの人口の増加とともに入植者は新しい土地を求めて移動し、原住民との衝突もあったが、強力な火器を持った入植者は原住民を破った。

ナポレオン戦争でオランダ本国（フランスと同盟）が占領されたため、1795年イギリスがこのケープ植民地を占領下に置いたが、ナポレオンが敗れると1803年、オランダに返還した。

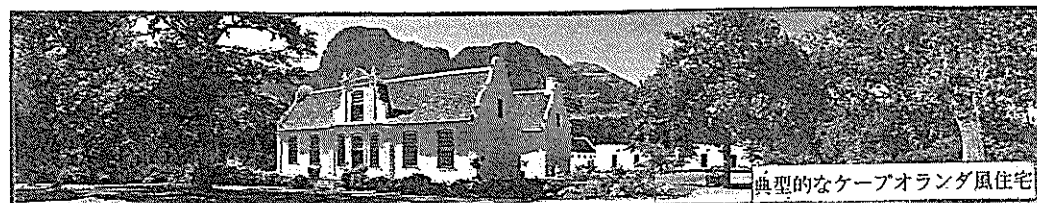
しかし当時、海運国としてオランダを凌駕していたイギリスは、1806年にケープ植民地を自国領土としてしまった。

ケープタウンの繁栄は、1833年の奴隷解放に伴うオランダ系住民の大量流出と、69年のスエズ運河開通によって打撃を受けたが、67年に内陸のキンバリーでダイヤモンドが、86年にトランスバールで金が発見されたため繁栄を取り戻した。

20世紀への変わり目に起ったボーア戦争（南ア戦争）の被害は少なく、1910年、イギリス帝国の自治領・アフリカ連邦が成立すると、その連邦議会が置かれた。61年、南アフリカ連邦はイギリス連邦を離脱して南アフリカ共和国となったが、立法上の首都として、この都市の地位は変わらない。

ケープタウンはこの国の地下資源の多い地域から離れているため、鉱工業面での繁栄は余り見られず、周辺のブドウその他の農産物や水産物の食品加工が発達し、貿易港としてインド洋岸のダーバンと首位を争っている。

市内には議会、州政府庁舎、博物館、美術館、植物園、ケープタウン大学などの政治的文化的諸施設（これらはヨーロッパ人のためのもの）がある他、17世紀にオランダが建造した城砦や教会その他の史跡もある。そしてテーブル・マウンテンや喜望峰とともに、美しい港湾都市として観光客を集める魅力をもっている。



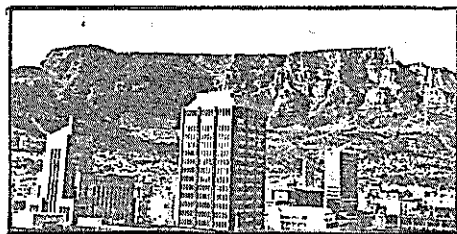
1月4日

(土) 晴

テーブル・マウンテン (60頁地図⑦)

昨夜、シグナルヒルの夜景を楽しみ、ホテルに着いた部屋の窓から眺めたテーブル・マウンテンは、闇の中にライトアップされて紫色に光っていた。

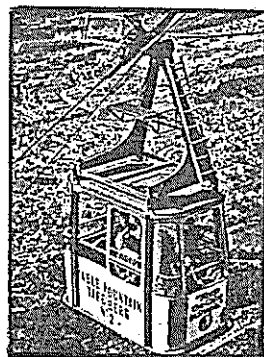
時間は駿馬のように駆け抜けて悠翔の旅も今日1日となり、胸を締めかす最後の朝を迎えた。快晴の好天に恵まれたテーブル・マウンテンの



自然が造った傑作が窓越しに映り、山の上部をナイフで切り取ったような景観に大きな夢を抱いた。(上の写真はホテルの私の部屋より眺めたテーブル山)

数億年の歳月を経て、この地球最古の岩は柔らかい部分が風雨に流され、硬い岩盤だけが台地状に残り、陸の孤島のようになったテーブル・マウンテン、その不可思議な自然と壮大無比な造形美、そして神秘的ともいえる魅力と迫力、どれをとっても心に感動を与えるものばかりである。

8時にホテルを出発してケーブルカーの乗り場に着くと、大勢の観光客は延々長蛇の列をなしていた。桂子通訳の万端足りない計により、我々は待たされることなく直ぐに乗車となった。(右は登山用のケーブルカー)



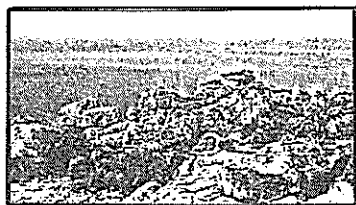
名称の通りに頂上が平らな岩山は、ケーブル(1回28人乗り、所要時間約7分)で簡単に登れるが、風が強い場合、或は晴れていても頂上にテーブルクロスという雲がかかると、運航休止するという天気まかせ、ケーブルに来て登れずに帰ることも屢々だという。好天に恵まれた我々は誠に幸運である。

優しく大自然の懷に抱かれるようにケーブルカーは上昇した。ケーブルの市街はぐんぐんと小さくなり、その分、宝石のように美しくなっていく。眼下には胸突き八丁の羊腸のような急坂に登攀する若者の姿が見えていた。汗を流して登ってこそ、初めて素晴らしい景観になるのかも知れない。

ケーブルカーの荒々しい男性的な断崖に向かう光景は羽化登仙の気分を誘い、砥石に似た平らな頂上は神々が棲むような感じがする。一方の右手に現われたライオンズヘッドの英姿は、昨日の眺めよりも一段と剛毅で艶麗優美に見えていた。

1086mの山頂で下車した途端、我が身は宙にあるような錯覚に陥り、人の靈魂に関係があるかのような感じさえ覚えたのである。

山の魅力の虜になって岩間を抜けるように歩いた。自然の芸術は360度の絶景を展開し、千仞の岸壁は半天にかかり、強風に耐えて美しく咲いた可憐な花は、清楚ながらも高貴な香りを放っていた。(右は山頂の風景)



平坦と思っていた山頂は意外にも、ごつごつした岩石で覆われ、人間の力では到底不可能な造形美を、長い歳月をかけて造り上げた自然の力に改めて敬意を表したい。

僅かな微風が涼しさをもたらす中を更に歩いた。一方には美愛に富んだ街が点と線とで結ばれ、片方には艶やかな色合いの青い海と夏空がつらなり、最高に似合った景観を写していた。

歩き疲れて焼けるように熱い岩の上に腰を下ろすと花崗岩であった。その横の石は孔雀石のようである。太古の昔、海の底にあって徐々に隆起したこの台地から、青い空を見上げていると吸い込まれそうになるばかりか、喧騒から離れて時間の経過も忘れるようである。

天に近く俗界から逃れた心豊かな憩いの一時は、まさに洗心の気分を満喫したと云えるだろう。霧にも見舞われなかった天与の幸運に感謝しながら、ケーブルカーの乗降場へと急ぎ一行と合流した。

死滅しないものは自然の美であり、太陽が輝くかぎり希望も輝くと思いながら乗車すると、箱庭のように映る世界的観光都市にも、平和な曙光が見えるような気がしていたのであった。

目と心に保養を与えてくれたテーブル山、文字通りに天に昇る心地を堪能させたテーブル・マウンテンは、幸福の秘訣は現在に生きることだと教示していた。

ケープ半島の探訪

テーブル・マウンテンの観光が終わり、喜望峰を含むケープ半島の一周に出発することになった。先ず大西洋に面した外海を南下し、待望のアフリカ大陸の南端に足跡を残して内海を北上するコースである。

松籟の響きに耳を傾けながら大西洋海岸のドライブコースを疾走した。ケープ附近の抜きこんでた美観はテーブル・マウンテンばかりではない。⑧シーポイントから⑨キャンプスベイに通じる海岸線は、ジョージ王朝やビクトリア王朝時代の建築物が遺り、岩肌を切り分けて走る景観は感動的なハイライトである。(地図番号は60頁の地図)

カメラを向けた白砂のキャンプスベイから、活気に溢れた漁船で賑わうハウトベイに至る海岸線は、幻惑するほどの奇麗なパノラマ風景が続いていた。

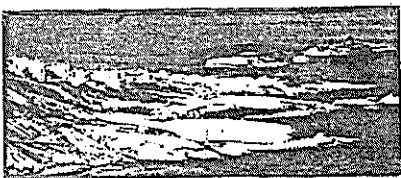
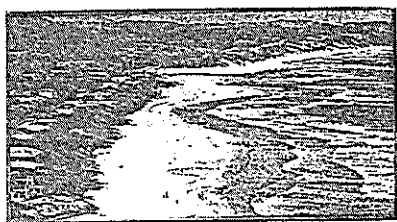
リトル・ライオンズ・ヘッドは小型の富士を思わせ、山麓に伸びる高級住宅には個人用のケーブルカーまで設備されている。(右は白砂の海岸)

海岸の街道に沿って12連峰が連なり、突き出た岬には難破船が哀れな残骸を留め、2つの大洋の合流する半島の嵐の物凄さを物語っている。説明によるとこの船は、日本まで運航してスクラップにする予定だったらしく、この光景は絶望の悪夢を見るような感じである。

(右の写真の右端上部が難破船の残骸)

尽きることのない渚の白波に見惚れながら静寂な海岸道路を走った。植えたばかりの若木の周りには風よけか、或は動物を防ぐための金網が張られ、鴨に餌を投げている人の姿も目に映っていた。

景勝のための大きな椰子の木や花盛りのハイビスカスの咲く対岸に、マンデラ氏が



投獄されていたロパーソン島（50km沖）があるかと思うと感無量だ。

バスは美しい入江の漁港「ハウトベイ」（右図のi）に着く。この港の棧橋から小型のランチに乗り移り、約1時間のミニ・クルーズを楽しむことになった。

海の色は時には青く、時には薄い緑に変化して船上の眺めは飽きることはない。約20分を経過したところから蒼い水面に小島が浮かぶように見えてきた。

このシール・アイランドの岩の上には、自然のままの天放としたアザラシたちが日光浴をしている。

ふと海面に目を移すと波は裸岩に砕けて白波が立ち、アザラシの嬉々として泳ぐ姿は天真無垢、恰も子供が戯れているようである。一行は童心にかえったような感じで、珍奇な光景に釘付けされてしまった。（上図はケープ半島の南部の地図）

物事にとらわれずに欣々然として喜び、自由を与へずして遊ぶ光景は性命（生れつき）とは云うものの、喘々然として暮らす人間様に何かを教えているようである。（右は岩上で日光浴をするアザラシ）

海の自浄作用のように寄せては返す波間を、ランチは彼等を掻き分けるように通りぬけ、豊かな寛ぎの空間を暫し楽しんだのであった。

シール・アイランドの小島を1周して帰途についた。この世の中は何も定めがなく移り変わり、丁度水に浮かんでいるようだから、「浮き世」というのであろうかと船上で思っていた。

この小島にアザラシが住み着いた理由を船員に尋ねると、①餌になる昆布類が群生している、②餌の魚が豊富、③陸地から離れて危険が少ない、と云うことであった。

ハウトベイの港に帰って再び南下した。暫くしてケープ半島を横切り、ファイズベイの海岸に面したところが「ブラックマーリン」（上の地図ii）であった。

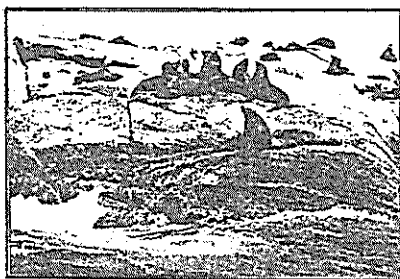
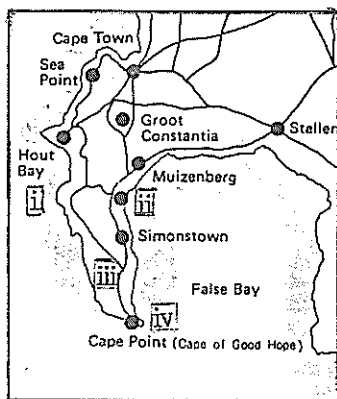
ここでのロブスターランチは想像していた範囲をこえて良好、吟味を重ねた一流の味である。食事を摂っている時、最初の生命の象徴である海は母性を表わし、母なる水の中の魚は羊水の中の胎児を思わせ、魚を食べること、食べられることは命の受け渡しのような感じがする。このような食体験は旅ならではのことであろう。

満腹感を味わって男性的な海岸道を飛ばすと、山手から傾斜した海岸段丘が視界に飛び込んできた。青い海、白い波、青と白のコントラストの美景に目を奪われながら、限りなく透き通った空間を喜望峰へとスピードを上げていた。

峰が起伏して互いに寄り添い、樹々はそれに従うような断崖を通過した時、突然、野猿の群が飛び出して道路を塞ぎ、我々の姿を見ると隠れ場へと走り去った。民族闘争の終わったケープ半島では、新たな争奪戦が始まっているのかも知れない。

やがて平坦な地形に変化した。この道が有名なケープ・マラソンのコースであろうか。ケープタウン～ケープポイント間、往復100kmを一人で走り、年に数回行われている筈である。

一方、海浜の海水浴場は客足は疎らだが、今でも白人と黒人は区別されているのだ



ろうか。歴然と区別されているから、オリンピックの水泳競技でも、黒人選手の姿が見られないのだと聞いている。当然、改善すべきである。

地形は一変して平らなステップとなり、そのゲートに駝鳥のマークが付いていた。桂子通訳の好意によってケープ半島の先端部分20km²、「ケープ半島自然保護区」(前頁地図Ⅲ)の見学となったのである。長途の旅の無聊を慰めるサービスに、心から感謝しなければならない。

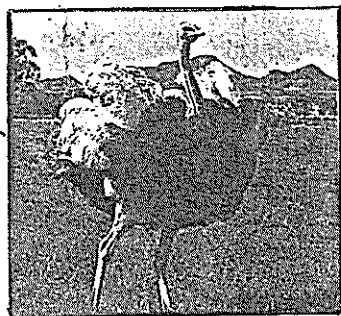
燃える太陽の直射をまともに受けて幻想的に見える小岩を、誰かが声を出して指差した。それは野生の「バブーン」(ヒヒ)だった。彼等の世界にも派閥があるのか、ボス猿は小岩の天辺に立ち、威厳を保って見張っていた。(右はバブーンの親子)



又、数頭のモンテボックス(鹿の一種)が無有に遊ぶ光景に見惚れていると、一瞬にして視界から消えてしまった。この辺一帯は300年前までライオン、象、豹などが棲息していた野生天国であったと云う。

桂子通訳は一行に駝鳥を見せたいと血眼になって目を凝していた。バスは急に停車する。すると道路両側の荒蕪とした草叢に、2・3羽の駝鳥が網膜に映っていた。

体高2、5mにも達する走禽類中の最大の駝鳥は隠れることも出来ず、僥倖にも我々の目を楽しませることができたのである。



鶏卵の20個以上もあるという駝鳥の卵を思い出すと、「碎啄之機」の字句が頭に浮かんた。

「碎」は雛が卵の内側からつつくこと、「啄」は親鳥が外からつつくことで、少しでも外れると生命は継承されないと言われている。

「愛情こそ教育の根源」であり、「師たる者はこのことが第1である」と云う教訓の言葉である。(上の写真は自然保護区の野生の駝鳥)

世の中に流れている生命の尊厳を感じながら、バスは地の果てのように広大に広がる草原を走り、一帯を睥睨するように立っている白塔の前で停車した。



これが1488年に喜望峰を発見したポルトガル人「パーソロミュー・ディアス」の記念碑である。(右はその記念碑)

この岬の発見は、黒人にとっては受難の歴史の始まりであったが、碑を注視していると、時が逆行して行くような不思議な感覚に襲われ、脱帽すべき大事業だったと感嘆を覚えるのであった。

喜望峰は近いと胸を躍らせながら茫々とした自然保護区のゲースに引返した。それから更に南下を続け、真夏のまぶしい日差しが降り注ぐ海岸を、目を血走らせ頬の筋肉をひきしめてアフリカ大陸の南端へと疾走したのであった。

喜望峰の概要 (CAPE OF GOOD HOPE)

アフリカ大陸南端の岬として世界に知られている喜望峰は、アフリカーンス語では「カープ・ディ・フーイ・ホープ」と呼んでいる。

大陸の南端と云うものの、実際は「アグリウス岬」(37頁地図参照)が最南端で、喜望峰はその北西約160kmの地点(18° 29' E、34° 21' S)にある。

北はテーブル湾、東はフォールス湾で、くびれたケープ半島南端の小突起部である。ヴァスコ・ダ・ガマ峰(256m)がそそり立ち、硬質砂岩の水平層が約30mの海食崖をめぐらし、雄大な景観をなしている。

1488年、ポルトガル人B・ディアスはインド洋に出よとしたが、強い西風のためにこの岬を越えた地点に漂着し、やがてポルトガルに引き返した。他国には「嵐の海」と称して100年間も秘密を守り続け、この航路を独占していたのである。

アフリカ南部海岸は大西洋とインド洋の海流が合流する海域で、大西洋の海水温度は平均12°~13°、インド洋の温度は16°~17°、海水温度が違うから海の色も異なり、その境界には大波が立つと云われている。

当時、この岬は前記した通り「嵐の岬」の名で航海者たちに恐れられていた。そしてポルトガル王が97~99年のバスコ・ダ・ガマによるインド航路の開拓を機会に、喜望峰と改名したと伝えられている。

この名はその後、オランダやイギリスの植民地時代にも、それぞれの国語に訳されて引き継がれてきた。岬の名は次第に拡大して使用されるようになり、半島全体、さらに植民地全体の名となり、現在の南アフリカ共和国の州名にも残されている。

フォールス湾(FALSE BAY、67頁地図参照)は荒天のとき船舶の避難に適し、軍港サイモンズタウンもあり、南アの重要な湾岸地帯を形成している。

ケープ自然保護区内に含まれている喜望峰一帯は、ケープポイントと共に観光地であり、天然公園に指定され、ケープポイントには灯台も設けられている。

尚、同名の岬が遠く離れたニューギニア島の、西に突出したドベライ半島の最北点にあるが、現在ではインドネシアはジャムルスパ岬と改名している。

喜望峰に立つ (67頁地図ivの位置)

人の心を温める青い海と蒼い空にはさまれ、女性的な優しい感じの自然の中を走ること約10分、波が白く碎ける先端に、新しい旅空間を創造するような白亜の灯台が立っていた。

(右はケープポイント灯台、左端は喜望峰岬)

バスは峰の麓にある広場でストップした。

そこからフライング・ダッチマンと名付けら

れる小型バスに乗り換え、魅惑的に見える優美な灯台に向かって急坂を登った。すると直ぐ様、小さな広場に到着していた。

そこで下車した観光客は、更に100mほどの坂道を喘ぎながら登っていた。うだるような暑さの中で茫然と眺めていると、幸いにも我々は更に小さなバスに乗り継い

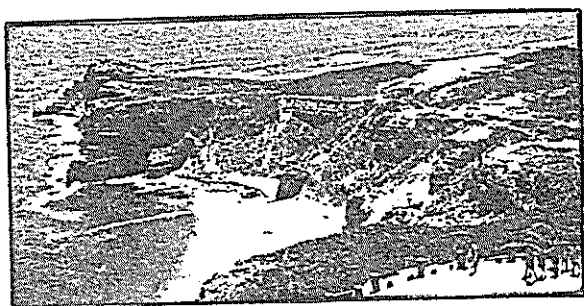


で登ることになった。

降り着いた所が、夢を追いつけてやってきたケープポイント灯台の下であった。その地点から更に石段を登り詰めると、アフリカ大陸の「最南端」、喜望峰を見下ろす展望台に辿り着く。

久恋の夢の地を制したような旅情はここに極まり、オーバーに表現すれば血湧き肉躍る喝采を叫びたい心境である。

死ぬまでに一度は訪れてみたいと虎視眈々と狙っていた、南アフリカ歴史の夜明けの地、「喜望峰」は、眼下の七彩の海に気品に満ちた造化のような天工を見せていた。(右はケープポイントから眺めた喜望峰)



万有引力のように引きつけた喜望峰は絵で見た通りの景観で、不思議な思いは自分が今ここに立っていることであった。

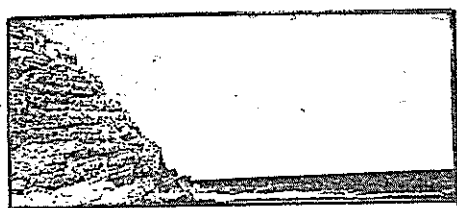
身も心も晴やかな気に浸り、夢を見ているような眼差しで眺めていると、四海の外に遊び、新天地に生き甲斐を求めた陶然至福の境地である。

一見穏やかそうに見える浩洋は潮流は速く、目に神の使者のように映る白い鳥は海上を飛び、未知の世界にふれた感動に麻痺することなく、宿志を果たした喜びを噛み締めていた。

目に映る水平線は僅かに湾曲し、周りの木は強い海風に耐えたように曲がり、枯木も残る景色を眺めながらケープポイントの展望台を下りた。再びバスに乗車してバスターミナルに着くと、そこには簡易建築の売店兼郵便局などが設備されていた。

売店で絵葉書を買えば喜望峰の記念スタンプが押印され、2週間後には日本に着くという記事の思い出し、早速、孫や友人宛に簡単な文を書いて投函した。(2週間後確かに到着している)

ケープポイントを離れたバスは拓がる草原を走り、水端も見えないような白砂の海浜で停った。目の前に衝立のように立ち上がる岩壁は、横縞のような層をなしており、白波を砕く岩礁の彼方に一つの孤影が悄然と浮かんでいた。



(右は硬質砂岩層の喜望峰岬の先端)

これが喜望峰先端の堆積岩であった。燦々と降り注ぐ夏の太陽、エメラルド色に澄み切った海、眩いばかりの白砂の海岸が調和して、これぞ至幸の時だといった表情をする自然の姿である。

人間の心は環境によって大きく左右されると云われるが、心の洗濯の積りだろうか。一行の中の若い人たちは炎熱の暑さに誘われて、大海原の海水に浸る人も見えていた。時を忘れて人生を送る人は贅沢な幸福だと思いつつ、私は嬉々としたその光景を眺めていたのであった。

名残惜しく喜望峰と別れたバスに揺られがら、何とはなしに、生命の終点が目に見えないうちに近くなっていると感じていた。その時、草原は黒一色の煙に包まれ、野

火の広がる言葉通りの紅蓮な火が見えた。

これは野焼きをして新しい芽を出させ、自然保護区の動物たちに新鮮な草を食べさせるためである。紆余曲折の人生を歩んだ私は茶毘を思い出し、各戦場で亡くなった人々のことが次々と浮かんでいた。何故であろうか。我れながら不思議である。

気がつくとは大分西に傾いて車の影は長く伸び、バスの中は気心の知れあった人達の楽しい触れ合いの場となっていた。これも旅の特権である。

たった一度しかない人生、自然を存分に楽しんだ今日一日を回顧すると、結論として、旅は老化防止の上善の策だと思えてくる。

日本食で命の洗濯

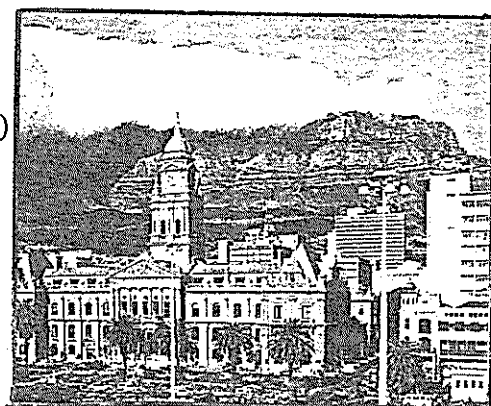
ケープタウンに向かうバスの旅の楽しみは、移り変わる風景を広い車窓から眺めることであった。海、山、見知らぬ町が次々と展開し、乙女の唇を思わせる真っ赤な花は、ドライブをしているような気分を味わせてくれた。

ケープの町が近づくにつれて、民族争奪の坩堝となった歴史が脳中を走り、平和の陰には必ず戦争の歴史が存在することを改めて感じていた。

宗教の仮面をかぶって他人の懐に手を入れ、侵略基地として魔手を伸ばしたことは過去のことだが、彼等の辞書に「反省」という文字があるならば、21世紀になろうとする今日、平和の看板に偽りのないようにすることが緊要である。それが南アに招福繁栄をもたらす道である。

焦げ付くような炎天もいつしか曇り、ホテルに到着した時にはテーブル・マウンテンには雲が懸り、ライオンズ・ヘッドは完全に姿を隠していた。（右は雲が懸ったテーブル山）

雲一つない晴天に恵まれた今朝、雄大な眺望を堪能できた我々は、全く僥倖だったと天に感謝しなければならない。



漸くホテルに落ちて着いて休憩後、10階の売店を覗くと駝鳥の卵（空）が目に入った。すると、生きている限り何時かは当然の結果として死は避けられないと、ふと考えさせられたのである。しかし、自分の死はずっと続く「生の中絶」に過ぎないと感じてきた。

即ち、私は子に、そして孫に、世代から世代へと生き続け、終わることなく生き続けるのだと。駝鳥の卵を数個買い求めたのは、このことを孫達に教えるためである。

旅の全日程を滞りなく消化した一行は、満ち足りた幸せの余韻に包まれながら、目の保養の後には舌の保養だと日本食堂に走った。

突然、市内の海岸通りの広場から、蜂の巣を突ついたように大騒ぎをしている集団が飛び出てきた。奇声を発し、歌をうたい、笛や太鼓を鳴らす「歌吹海」の団は、乱痴気騒ぎの黒人たちである。

感情の高ぶった老若男女の叫ぶ声は、泣いても一生、笑って暮らすも一生だと叫んでいるようにも聞こえてくる。黒人の集会やデモを禁じたアパルトヘイトの解除を喜

び、正月を機会に長い間の鬱憤を晴らしているのだろうか。

バスはシーポイントにある日本食堂「鎌倉」の前で停車し、空腹も重なって涎を垂らすようにカウンターの席に着く。久し振りに日本食にありつける喜びを、骨つなぎとでも表現すればよいのだろうか。

前菜に続く板前の差し出す握り鮓、天ぷら、焼き魚、刺身、味噌汁、香の物など、どれ一つとっても我々の舌の先を満足させないものはなく、生命の歓喜を味わうように咀嚼した。

何とも云えない日本茶の味と香りを楽しみながら、静かに流れる「荒城の月、宵待草、出船」などの日本の曲に耳を傾け、当然のように日本文化の良さを自覚していた。その一方、白人女性のホステスが金髪を上手に巻き上げ、和服を着ている姿もまた日本食堂「鎌倉」に強い印象を残していた。

店内に飾り付けた日本画や提灯は懐かしさを増幅させ、箸を使って天ぷらを口に運ぶ白人男性の姿も見えて商売繁盛のようである。アフリカ南端の街で努力する鎌倉の人達、多くの困難な問題を英知と努力で切り開き、外交官にも優る活躍に敬意を表したい。

特記すべきは鎌倉の名刺であった。日本国内の一部には日の丸の国旗に反対する輩も多いが、この鎌倉の名刺には堂々と日の丸を印刷し、KAMAKURA OF JAPANと書いて国威の掲揚に努めていた。感激のあまり重ねて敬意を表します。

目と舌を楽しませ、贅沢なまでに快適だった旅も千秋楽となり、鎌倉を辞してホテルに戻った。「話尽山海月情」（カタリツクスサンカイゲツジョウ）、気の合った者同士の会話と云うべきか、旅で親しくなった若い人たちに誘われ、人生の最後の青春を謳歌するように二次会に臨んだのである。

1月5日～6日

帰国の途

陽は高く昇り強烈な日差しが皮膚を突き刺す暑さの中を、我が旅に悔いなしと10時にケープ空港を離陸した。時は人を待たず時間ほど貴重なものはないと、遠い地の果てまでも飛んできたが、風のように過ぎ去ってしまった。

ヨハネスブルグに12時に着陸して中華航空に乗り継ぎ、CI-092便はソウェトを訪れなかった悔みを残して14・40に飛び立った。

これで南部アフリカとも永遠に左様ならと思うと、白人達に一つだけ申し上げたいことが浮かんできた。「自」と「大」を重ねると「臭」になる。自分が優れた人間だと思って尊大ぶると、臭気ぷんぷんとして鼻もちならないと言うことだ。

古い歴史探訪の旅と違って何時までも感傷にとらわれることもなく、物見遊山の浪漫の疲れが一挙に爆発し、耐え難い睡魔の檣になって臍抜けのように横臥した。

シンガポールで給油した機は6日の午前8時に飛翔し、13時に台北空港に到着。50数億の人間の中から選ばれ、親交を得た人達とも別れれる時を迎えて、台北から各々東京、名古屋、福岡へと離別を惜しんで羽撃いた。

人間は慾に手足が生えたように快樂の奴隷かもしれないが、その快樂を与えてくれたことに感謝しながら、鵬程万里の図南の旅は終わったのである。

あとがき

歳月の移り行くままに荏苒^{ジンジン}として羊の歩みの如く、鳴かず飛ばずの人生を送る私にとって、終生かなわぬ夢だったアフリカ南部諸国の紀行を終えたことは、旅冥利に尽きると言わなければならない。

中国人は古来から現世の願望が至って強く、福（子供が多い）、禄（金持ち）、寿（寿命が長い）を人生の至福とした。但し私にはこの三点とも該当しないようである。しかし、戦後の私は自分の境涯を楽しむという成心（固った心）と、天命は定まったものだとして生きてきた積りである。

人生には自然と同じく春夏秋冬があり、我が一生もあざなえる縄の如く吉凶の繰り返しであった。泡沫に終わるかも知れない私が、年を増す毎に考え付いた精神的な若返りの方策が、「旅」であった。

年を重ねてからの若さは自分で作り出す若さである。心は常に真っ盛りの花のように、新鮮で元気でありたいと旅立つのも、生きて行くために必要な活力源だ。

博く知識を求める旅の欲望には際限はなく、人生の絶え間のない連動の一時を捉え、自分の最も憧れる地に脚を運ぶことが上善である。夢幻の彼方であった南部アフリカ紀行は物見遊山の旅路であったが、人界の七難八苦の片鱗を垣間見たと感じている。

太陽の光と豊かな自然、闊文明と未開（一部を除く）がアフリカ南部の印象であり、白人よりも黒人との触れ合いの多かったのも特徴である。白人は都会地に集中して家やビルの中に閉じこもり、支配階級として君臨しているからであった。

黒人たちの優しい笑顔、白い健康な歯、すらっと乾燥した筋肉質の身体、あれが本当の人間ではないかと思うほど親しみがある。彼のネルソン・マンデラ氏が28年間の投獄生活に屈しなかった強韌さも、このアフリカの大地が育てたのだ。

ジンバブエやザンビア共和国のブラック・アフリカでは、支配と分割の傷跡を残しながらも解放の熱い息吹きがあり、屈辱の冬眠から目覚めた国造りが微かに窺えたように感じられた。

白人支配の南アフリカ共和国ではアパルトヘイト諸法は撤廃されたものの、白人と黒人の貧富の差は著しく、掌を返したように一朝一夕には、人間性の疎外された社会の変化は望めないだろう。

黒人と白人の問題を考える時、利権^{ガレンジ}で雁字がらめになっている白人が、金やダイヤモンドばかりでなく各種産業を独占支配する限り、根本的な解決は至難である。

然し乍ら、平和、自由、独立は世界の趨勢であり天の声である。貧しい黒人の生活が今のままで良い訳がない。長い圧迫の慣習を改め、黒人の生活水準を高めることは白人の償いであり、黒人も心に希望の火を燃やして平和的に話し合うべきである。

「公田に雨降り遂に我が利に及ぶ」という古語がある。これは世の中全体に利があり、その利が自分にも及ぶと云う意味である。即ち全ての人間に幸福がくる心を語っている言葉だ。

又、「政治は自分を正すこと」だと謂れている。政治の「政」は「正」と「支」の合字で、人を支える心を正すことが政治だと云うのである。以上、二つの東洋の古語を今回訪れた国への饒^{ハヤテ}の辞としたい。

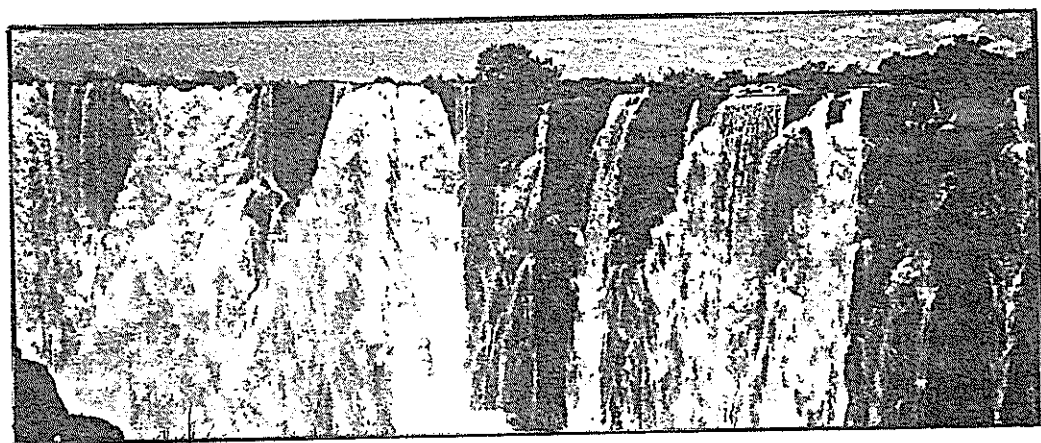
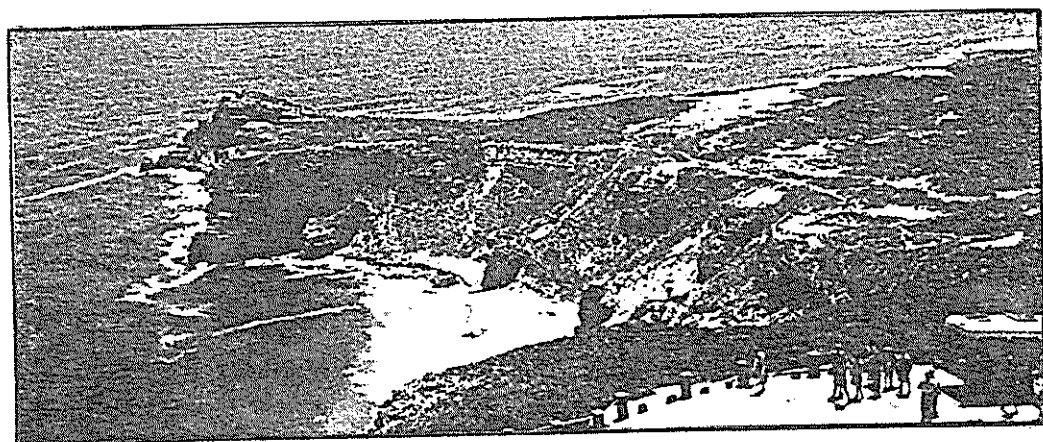
生命の大半は地上を離れて宙に浮き、再び帰らない川の流れのような人生も、旅

によって月日に節目ができ、時の流れが長く感じるのは確かである。

戦争で生命を焼き尽くして戦った我々は今こそ青春を謳歌し、人間は笑って過ごせば至福だと煩悶を忘れ、一心に精神的な楽しみに熱中したいものである。

旅には旅行としての旅の外に心の旅がある。旅をただの旅に終わらせず、二度、三度と心の旅を味わい、心友となった旅人の想い出のためにも、今回もまた拙文を恥じながら記録を残すことにした。

(下の写真は喜望峰とビクトリア大瀑布)



下は南アフリカ共和国々花「プロテア」

